

博士論文

ハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動の
歴史的変遷と現状：ドイツと日本の比較

令和元年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科コーチング学専攻

中山紗織

目次

第1章 序論.....	1
1. 研究背景.....	1
(1) 球技における育成年代初期の選手育成活動.....	1
(2) ハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動.....	2
(3) 育成年代初期の試合で導入されている競技規則.....	4
(4) ドイツと日本のハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動.....	4
(5) 選手育成活動の変革プロセス.....	5
2. 選手育成活動に関する先行研究.....	6
(1) ヨーロッパおよび日本における選手育成活動に関する先行研究.....	6
(2) スポーツ指導者の持つ考えに関する先行研究.....	7
(3) 育成年代初期における練習の内容と方法に関する先行研究.....	8
(4) 試合におけるゲームパフォーマンスに関する先行研究.....	8
(5) 先行研究のまとめ.....	9
3. 研究目的.....	10
4. 用語の定義.....	11
5. 研究の限界.....	13
第2章 ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷 (課題 I)	15
1. 研究背景.....	15
(1) 球技における育成年代初期の選手育成活動.....	15
(2) 選手育成活動に関する文献.....	16
(3) 研究目的.....	16
2. 研究方法.....	17
(1) 資料収集.....	17
(2) 分析対象資料の選別.....	18
(3) テキストマイニング分析.....	19
(4) 本文引用.....	20
(5) 翻訳.....	20

(6) 解釈と考察	21
3. 結果	23
(1) ドイツの歴史的変遷に関する結果	23
(2) 日本の歴史的変遷に関する結果	34
4. 考察	52
(1) ドイツの歴史的変遷に関する考察	52
(2) 日本の歴史的変遷に関する考察	54
(3) 総合考察	58
5. 要約	59
第3章 育成年代初期のハンドボールにおける「個の育成」を目指した競技規則の 下での選手育成活動について:ドイツと日本のトップチームを比較して (課題Ⅱ)	61
1. 目的	61
2. 研究方法	62
(1) 調査手順の概略	62
(2) 調査対象者および対象チーム	62
(3) ゲームパフォーマンスに関する調査	62
(4) 指導者の持つ選手とチームの育成方針, 練習の内容と方法についての調査	75
3. 結果	77
(1) 記述的ゲームパフォーマンス分析	77
(2) 選手およびチームの育成方針	98
(3) 練習の内容と方法	100
4. 考察	104
(1) G1	104
(2) J1	105
(3) J2	106
(4) ドイツと日本における「個の育成」内容の相違	108
5. 要約	108
第4章 総括	110
1. 結論	110

(1) ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷	111
(2) 育成年代初期のハンドボールにおける「個の育成」を目指した競技規則の 下での選手育成活動について：ドイツと日本のトップチームを比較して	112
(3) 論文全体の結論	112
2. 今後の課題	113
注	115
文献	116
謝辞	125

第1章 序論

1. 研究背景

(1) 球技における育成年代初期の選手育成活動

ハンドボール競技において、2004年アテネオリンピックに参加した選手の競技開始年齢の平均は11.1歳である (Vaeyens et al., 2009)。また、チームの平均年齢は、最も若い国 (中国) で24.1歳であった (International Handball Federation, 2004)。これらのことは、ハンドボールにおいて選手が国際レベルで活躍するまでには育成年代初期から短くとも13年の練習が必要であることを示している。Ericsson (1993) も、スポーツをはじめ、様々な分野において世界トップレベルへ到達するためには、少なくとも10年1万時間の練習が必要であり、早期に専門的な練習を始めることが有利であると述べている。育成年代初期の10歳から13歳は運動学習能力の1番高い時期であること (Meinel and Schnabel, 2015, p.306) を考慮すると、ハンドボールにおける育成年代初期の練習では、長期的な選手育成を目指して、「高い意思決定スキルを獲得するための土台として様々な運動を行わせること」 (Backer and Côté, 2003)、「ゲーム状況に依存した様々な運動経験を積ませること」 (Meinel and Schnabel, 2015, p.307) が大切であるといえる。

近年、球技では、長期的な選手育成を目的に国ごとや競技種目ごとに様々な取り組みが行われている。特に、育成年代初期においては、「個の育成」を目指してコート、ゴール、ボール、競技時間、プレー人数、プレー方法に関して成人とは異なる子ども特有の競技規則で試合が行われている (Deutscher Basketball Bund, 2016 ; Deutscher Fussball Bund, online; 公益財団法人日本バスケットボール協会, 2018; 財団法人日本サッカー協会, 2012)。このことから球技では、長期的視野に立った選手育成の初期段階においては、「『個』を高めること」 (西, 2008)、「個人戦術力」 (永野ほか, 2017)、「1対1や2対2の攻防における技術・戦術力」 (ネメシュ・會田, 2012) など、将来的に選手が最大限のパフォーマンスを発揮できるように一人ひとりの選手を大きく成長させること、すなわち「個の育成」が目指されていることがわかる。現在日本で前述したような選手育成活動が行われているのは、スポーツ振興計画において「ジュニア期からトップレベルに至るまで一貫した理念に基づき最適の指導を行う一貫指導システムの構築」 (文部省, 2000) が掲げられているためである。

(2) ハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動

男女代表チームおよび男女ユース・ジュニア代表チームの国際大会での成績をもとに作られた、国際的な競技力の評価基準である国際ハンドボール連盟 (IHF) ランキングにおいて、オランダは現在 22 位である (2019 年 12 月時点)。オランダの育成年代初期における選手育成活動としては、発育発達に適したハンドボールのプレーを促すことを目的に、2015 年から 10・11 歳の試合で以下の 4 点において成人とは異なる競技規則が導入されている。それはプレー人数 (6 対 6 : 成人は 7 対 7)、競技時間 (20 分×2 セット : 成人は 30 分×2 セット)、使用するボールの大きさ (0 号球 : 成年男子は 3 号球, 成年女子は 2 号球)、防御隊形 (少なくとも 3 人がフリースローラインの外側で防御する) である (Nederlands Handbal Verbond, 2015)。2016 年からは 12・13 歳の試合で以下の 3 点において成人とは異なる競技規則が導入されている。それは、競技時間 (20 分×2 セット)、使用するボールの大きさ (1 号球)、防御隊形 (少なくとも 3 人がフリースローラインの外側で防御する) である。

ブラジルは、国際ハンドボール連盟ランキングにおいて 13 位である (2019 年 12 月時点)。女子代表選手は、2011 年からの 3 年間で自国リーグより高い競技レベルにあるオーストリアのクラブチームでプレーしたことによって、2013 年女子世界選手権で 4 位という好成績を残したと考えられている (毎日新聞, 2016)。ブラジルの育成年代初期における選手育成活動としては、2016 年から 12・13 歳の試合で積極的な防御隊形、具体的には、コート全面または半面でのマンツーマン防御の採用が義務化されている (Leonardo and Scaglia, 2018)。

フランスは、国際ハンドボール連盟ランキングにおいて 7 位である (2019 年 12 月時点)。男子代表チームは、オリンピックにおいて 2008 年から 3 大会連続で優勝または準優勝、世界選手権において 2015 年、2017 年共に優勝の好成績を残している。フランスの育成年代初期における選手育成活動として、9~12 歳では、成人の試合よりもコート (12 歳以下 : 20m×12m)、ボール (12 歳以下 : 00 号球)、ゴール (12 歳以下 : 1.7m×2.4m) が小さく、競技時間が短く (12 歳以下での年齢カテゴリーによって異なる競技時間)、プレー人数が少ない (12 歳以下 : 5 対 5) (Fédération Française de Handball, 2019)。

スウェーデンは、国際ハンドボール連盟ランキングにおいて 5 位である (2019 年 12 月時点)。スウェーデンの育成年代初期における選手育成活動としては、成人の試合よりもコート (10 歳以下 : 20m×12m, 11 歳以上 : 40m×20m)、ボール (10 歳以下 : 00 号球,

11・12歳：0号球），ゴール（10歳以下：1.7m×2m，11歳以上：2m×3m）が小さく，競技時間が短く（12歳以下での年齢カテゴリーによって異なる競技時間），プレー人数が少ない（10歳以下：4対4，11歳：5対5または6対6，12歳以上：7対7）（Svenska Handboll Förbundet, online）.

ドイツは，男女代表チームおよび，男女ジュニア・ユース代表チームの成績が高く，国際ハンドボール連盟ランキングにおいて長年1位の成績を維持している（2019年12月時点）. ドイツの育成年代初期における選手育成活動としては，成人の試合よりもコート（8・9歳：20m×12m，10歳以上：40m×20m），ボール（11歳以下：0号球，12・13歳：1号球），ゴール（11歳以下：1.6m×3m）が小さく，競技時間が短く，プレー人数が少ない（8・9歳：5対5，10歳以上：7対7）. 防御隊形については，コート全面または半面でのマンツーマン防御（10・11歳）やオープンディフェンス（12・13歳）の採用が義務化されている（Brand et al., 2009；ノイハウス, 2016, pp.8-13）.

そして，日本は，国際ハンドボール連盟ランキングにおいて21位である（2019年12月時点）. 日本の育成年代初期における選手育成活動としては，2015年度から，12歳以下の試合において，Jクイックハンドボールと呼ばれる新競技規則が導入されている. この競技規則は，日本が世界で勝つためには，判断力，想像力，トータルモビリティ（総合的機動力）を育成しなければならないという考えのもと導入された. 新競技規則は，以下の4つの点において成人の競技規則とは異なる. それは，通常のコートより小さくすること（36m×20m），競技時間を10分×3セットにすること（2019年度から15分×2セットに改定），センターラインからのスローオフをゴールキーパーライン（2016年度からゴールエリア内に改定）からのゴールキーパースローに変更することの3つの新ゲーム様式の導入と，オープンディフェンスの推奨から構成されている. ゲームでは，全体を通して中断のない攻防の切り替え，防御においては脚を使った積極的な防御，攻撃においては空いている／空けたところを攻めることが，それぞれ具体的な目標として掲げられている. また，全国大会のゲーム様式を変えることで，普段の練習をゲーム的要素を多く取り入れた練習へ変えることをねらいとしている（公益財団法人日本ハンドボール協会, 2015）.

このように，国際競技力の異なる様々な国においては，6歳から12歳の試合で成人とは異なる競技規則が導入されており，ハンドボールの育成年代初期では発育発達に応じて競技規則を変更することによって試合の構造を変えられる，それが長期的な選手育成に繋がるという考えを持っていることが推察される.

(3) 育成年代初期の試合で導入されている競技規則

育成年代初期の試合において導入されている競技規則は、大きく 2 つに分類できると考えられる。一つは、スウェーデン、フランスのように、コート、ボール、競技時間、プレー人数に関して成人とは異なる競技規則である。このような競技条件のsmallサイズ化は、子どもに対して成人に近いプレー条件を提供することになる。もう一方は、これらの変更に加えて、オランダ、ブラジル、ドイツおよび日本のように積極的な防御隊形の採用の義務化、または推奨をする競技規則である。これらの国では、育成年代初期において、マンツーマン防御などの積極的な防御隊形を採用させることによって養成すべき内容を明確にしている (Feldmann, 2013, pp.4-5 ; Pombo Menezes, 2011)。そこでは、主に体力および戦術力の養成が目指されている。具体的に、体力に関しては、マンツーマン防御によって生じるゴールエリア前の広いスペースにおいて、ボールを持たない時に動くことで運動強度を上げ、体力の向上を図ることが挙げられている (Feldmann, 2013, pp.4-5 ; Nederlands Handbal Verbond, 2015)。防御戦術に関しては、自分と対峙する相手プレーヤーおよびボールの位置を常に把握すること、相手からボールを奪うことが、攻撃戦術に関しては、ボールを持たない時に動くことによって相手のマークを外すことが挙げられている。

日本と同様に積極的な防御隊形の採用を義務化、または推奨する競技規則を導入している国々の取り組みに着目すると、オランダでは 2015 年から、ブラジルでは 2016 年から防御隊形の採用が義務化され、日本では 2015 年から推奨されている。しかし、ドイツではそれよりも 10 年以上前の 2003 年から義務化されている。このことは、ドイツでは育成年代初期における試合や練習での独自の取り組みに関する歴史がどの国よりも古く、その理念が国内で浸透していることを示していると考えられる。

(4) ドイツと日本のハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動

前述した通り、ドイツと日本では、育成年代初期の試合で特別な競技規則が導入されている (Brand et al., 2009, p.36 ; 公益財団法人日本ハンドボール協会, 2014)。具体的には、子どもの身体的特徴に合わせて、成人の試合よりもコートとボールが小さく、競技時間が短く、スローオフの行い方が簡略化されている。また、「個の育成」のために、ドイツではコート全面または半面でのマンツーマン防御が義務化され、日本ではオープンディフェンス、すなわちロングシュートおよびカットインシュートの両方を用いる攻撃に対して

有効な奥行きのある防御 (Marczinka, 1993, p.346) が推奨されている。成人の競技規則では、個人戦術よりグループ戦術やチーム戦術を用いることによって勝つ可能性が高まってしまうため (Denne, 2001) , 両国とも「個の育成」を促進する積極的な防御隊形 (Korfsmeier, 2006) を採用させるように方向付けているのである。その前提には、積極的な防御隊形によって、防御とそれに対する攻撃において個人が対峙し合うプレーが多くなるという考えがある。

では、育成年代初期のハンドボールのコーチング実践において、指導者は「個の育成」に対してどのような方針を持ち、育成すべき「個」の目標像をどのように捉え、目標に到達させるためにどのような内容や方法で練習を行ったら良いのであろうか。そして、その練習の成果としてのゲームパフォーマンスをどのように評価したら良いのであろうか。

もし、これらの考え方とその成果としてのゲームパフォーマンスをドイツと日本の育成年代初期のトップチームおよびその指導者を対象に明らかにでき、これらを両国間で比較することができれば、より明確に両国の特徴が現れ、日本の育成年代初期のコーチングにおける指導の方向性を示すことができる有用な手がかりが得られるであろう。また、国際競技力向上の鍵と考えられている長期的な選手育成において成果をあげるために不可欠な質の高い指導者の育成 (勝田, 2002) に資する言説が得られるであろう。

(5) 選手育成活動の変革プロセス

組織などの変革のプロセスに関して Lewin (1951) は、3段階を経るモデルを提示している。それは、①「解凍」段階 (これまで信じてきた信念が必ずしも望ましくなく、何らかの変革が必要であることを組織成員に認識させることに重点を置く段階)、②「移行」段階 (新たに身につけるべき行動パターンや価値観などを組織成員に身につけさせることに注力する段階)、③「再凍結」段階 (新しい行動パターンや価値観を組織成員に定着させるための段階) である (山岡, 2006)。「解凍」段階を経ずに、いきなり「移行」段階から組織変革に着手した場合、組織成員は新しい価値観の必要性を理解できていないため変革の実現が困難になる。また、「解凍」段階、「移行」段階がうまくいった場合でも、元の習慣に戻ることを防ぐ「再凍結」の段階が必要となる (山岡, 2006)。このモデルを、ハンドボールの育成年代初期における試合形式の変革に当てはめれば、ドイツは「再凍結」段階が完了し、日本は「解凍」段階にあると捉えることができる。

過去の無知は、現在の理解を妨げるのみならず、現在における行動自体を危うくしてし

まう（ブロック，2004）．もし，ドイツハンドボール協会が育成年代初期の選手育成活動において，どのような問題を発見し，どのような理念，目標，プログラムを作成し，それを子どもの指導に携わる指導者へ発信し，実践現場でどのような育成活動が行われているかを明らかにでき，そのプロセスを日本に応用することができれば，日本の育成年代初期の選手育成活動の現在地を俯瞰でき，取り組みを成功させるための方向性を示すことにつながると考えられる．

2. 選手育成活動に関する先行研究

(1) ヨーロッパおよび日本における選手育成活動に関する先行研究

選手育成活動の実態を明らかにするために，各競技の強豪国および日本を対象に，選手育成担当者へのインタビュー調査や文献調査が行われている．山田ほか（2013）は，カヌースラローム競技の強豪国（スロバキア，フランス，ドイツ，スロベニア，オーストラリア）および日本を対象に，各国の強化育成担当者に対するインタビュー調査に加えて，日本の地域クラブを対象にアンケート調査を実施した．その結果，カヌースラローム競技の強豪国では，育成センターまたは育成拠点で早い段階から有望な選手を育成していることを明らかにした．日本の選手育成の課題としては，4年間の育成計画の策定，育成プログラムの枠組み，学業との両立を可能にする支援，指導者資格制度の強化，指導者の雇用確保，育成拠点の設置，トレーニング施設の充実が必要であることを報告している．町田（2018）は，スペイン・マドリードにおけるバスケットボールチームの育成責任者を対象に現地でのインタビュー調査を行った結果，スペインでは年齢カテゴリーを1歳刻みで分け，1チームの人数を12人程度としていること，12歳以下の試合における3ポイントルールについて，スペインでは競技規則で認められているが日本では認められていないことが両国の育成現場における大きな違いの一つであることを示唆している．河村ほか（1981）は，西ドイツの小学生ハンドボールについて文献調査を行った結果，当時，西ドイツでは12歳以下の試合において成人とは異なるコート，ボール，ゴールで試合が行われていたことを報告している．

選手育成活動の現状を明らかにするために，各競技の強豪国および日本を対象に，現地でのコーチングやトレーニングに関する実践報告も行われている．松原ほか（2009）は，フランスのサッカーにおける選手育成について現地調査を行った結果，日本で一貫指導の成果をあげるためには，育成年代の選手にとって質の高い環境（物的および人的環境）を

整え、指導者の質を向上させることが鍵であることを示唆している。須田ほか（2019）は、オランダのサッカーにおける選手育成について現地調査を行った結果、オランダの選手育成システムは、オランダの文化・歴史的背景を反映したものであること、具体的には、選手が主体的に楽しむというスポーツの本質を保ちながら、選手や指導者がサッカーを理解するための枠組みをプログラム化したことによって整えられたシステムであると述べている。

各国における選手育成活動の方針を明らかにするための研究として、永野ほか（2017）は、ハンドボールの強豪国（ドイツ、ハンガリー、デンマーク）および日本の一貫指導プログラムを対象に、テキストマイニング分析を用いて各国のプログラムの特徴を明らかにした。その結果、ドイツでは、身体的な優位性を保持したまま、スピードのある中での判断力を段階的に養成すること、ハンガリーでは、強いフィジカルを育成すること、デンマークでは、予測力の向上を図っていること、日本では、感覚的なプレーから理解されたプレーの育成が目指されていることが報告されている。

しかし、これらの研究は、調査時点における各競技の選手育成活動の内容を明らかにすることを目的としており、そのような取り組みが行われた背景、育成活動がどのように変化したのか、その歴史的変遷については明らかにしていない。

（2）スポーツ指導者の持つ考えに関する先行研究

阿部・冨田（2018）は、宮城県のスポーツ少年団の指導者を対象に、指導者が持つ指導に対する考え方についてアンケート調査を行い、その結果、指導者は子どもとのコミュニケーションを第一とし、子どもの視点から指導することを重視する一方で、団の円滑な運営や財源の確保などの財務面、広報活動の運営面を課題として挙げていると報告している。

會田・船木（2011）は、大学ハンドボールに携わる若手コーチを対象にインタビュー調査を行い、ゲーム構想の計画、実践および評価に関する語りを質的に分析することによって、コーチング活動の実践知について明らかにしている。その結果、ゲーム構想を立案する際には、採用するチーム戦術に対する対戦相手の対応を事前に想定し、それに対して効果的なチーム戦術を計画・準備しなければ、十分な成果をあげることはできないと推察している。また、楠本ほか（2015）は、日本の高校および大学ハンドボール界を代表する卓越した指導者のコーチングに関するライフストーリーを事例として提示し、指導力の熟達化にとって重要な出来事や行動、そこから得られた教訓を明示している。

田代・會田（2014）は、高校ハンドボールにおいて、チームの立ち上げから全国大会常連校に導いた1名の若手指導者を対象に、指導者の熟達化をもたらす要因について事例的に明らかにしている。その結果、熟達化をもたらす要因として、指導者のつまずきとそれを克服する経験、ゲーム構想や基本戦術の明確化、他者からのアドバイス、自分自身のコーチングを振り返る省察を挙げ、これらの要因を獲得することを通して戦術行動をシンプルにし、わかりやすく指導できるようになると推察している。

これらのことから、指導者の持つ選手およびチームの具体的な育成方針を明らかにした研究は行われてはいるものの、育成年代初期のハンドボールチームの指導者および日本以外の国の指導者を対象とした研究はこれまで行われていない。

(3) 育成年代初期における練習の内容と方法に関する先行研究

育成年代初期のチームにおける練習の内容と方法に関する先行研究として、大島ほか（2018）は、北海道の小学生および中学生の野球指導者を対象にアンケート調査を行った。その結果、オフシーズン中には分習法を多く用いた練習によって個の育成を図っていること、シーズン中には技術を重視した練習を多く行うことによって、試合に向けた準備や対策を行っていることを報告した。

ハンドボールを対象とした研究において、東根（1997）は、ドイツにおける練習の内容と方法について現地調査を行い、日本と比較した結果、ドイツでは短時間・実践中心・想定型の練習が、日本では長時間・技術中心・反復型の練習が行われていることを報告している。花城（2012）は、スペインのハンドボールにおけるジュニア期（8歳～18歳）での練習の内容と方法および指導内容について現地調査を行った結果、スペインでは指導者が各カテゴリーで選手に身につけさせるべき技術や戦術等を理解し、試合と同じ状況を想定したトレーニングを行うことによって、ジュニア世代も含めた代表チームが国際大会で好成績を収めていることを報告している。

しかし、これらの研究では育成年代初期における練習の内容と方法に関して明らかにしてはいるものの、ハンドボールチームの指導者が持つ練習に対する具体的な考え方は明らかにされていない。

(4) 試合におけるゲームパフォーマンスに関する先行研究

球技における練習の成果は、記述的ゲームパフォーマンス分析、すなわち研究目的に

じて項目を定め特定の表記方法を使って試合でのチームやプレーヤーのパフォーマンスを記録し、その記録結果を特定の観点から数量的に処理する手法（中川，2009）によって明らかにできる。ゲームで発揮されるパフォーマンスには多くの要因が複雑に関与しているため、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いた研究についてはいくつかの限界が指摘されているが、実際の試合そのものを分析できるという大きな利点がある（中川，2011；大江ほか，2013；鈴木・西嶋，2002；山田，2011）。そのため、ハンドボール競技においても記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて、さまざまな競技力のチームを対象とした研究が行われている（Gruic et al, 2005；水上ほか，1997；Praveen and Chandrasekaran, 2017；田中ほか，2009；山田，2010）。

しかし、育成年代初期を対象とした研究は、非常に少ない。Jクイックハンドボールと呼ばれる、12歳以下の試合における新競技規則導入前後の全国大会での試合を分析、比較検討し、新競技規則導入の影響について調査した研究では、男子においては導入の目的が達成された可能性が、女子においては十分達成されなかった可能性が推察されている（井上ほか，2015）。土井ほか（2008）は、小学生・中学生・高校生のトップチームの試合映像を対象に、DLT法を用いて、一貫指導プログラムの作成に向けたハンドボール戦術の分析に資する客観的評価指標の構築を目指した研究を行い、各カテゴリーにおける移動特性を明らかにした。その結果、小学生では個人の能力を、中学生では判断力を、高校生では精度の高い攻撃の継続が求められることを推察している。しかし、これらはいずれも大会に出場したチームのゲーム様相を総括しているため、個別のチームの練習成果をゲームパフォーマンスとして明らかにしてはいない。

（5）先行研究のまとめ

以上、選手育成活動に関する研究を概観した結果、調査時点における各競技の選手育成活動の内容を明らかにする研究は行われているものの、そのような取り組みが行われた背景、育成活動に関する変革の歴史の変遷についての研究はないことが明らかになった。また、育成年代初期の選手に対する指導に関する研究では、ハンドボール指導者の持つ育成に関する具体的な考えや個別のチームの練習成果をゲームパフォーマンスとして調査した研究はこれまで行われていないことが明らかとなった。

3. 研究目的

以上の先行研究の検討結果を踏まえ、本論では、ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷と現状を明らかにすることを目的とした。歴史の変遷については、ドイツおよび日本のハンドボール協会が発行する機関誌を対象に文献調査を行う。現状については、ドイツおよび日本においてどのような「個の育成」が行われているのか、両国のトップチームおよびそのチームの指導者を対象に、記述的ゲームパフォーマンス分析およびインタビュー調査によって事例的に明らかにする。そして、今後日本の育成年代初期の選手育成に関する新たな取り組みに役立つ知見を得ることを目的とする。これらの目的を達成するために、以下の2つの課題を設定した。

課題Ⅰ ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷

課題Ⅱ 育成年代初期のハンドボールにおける「個の育成」を目指した競技規則の下での選手育成活動について：ドイツと日本のトップチームを比較して

図1に研究の全体像を示した。本論では、日本の選手育成活動をより詳細に解釈することを目的に、選手育成活動の歴史が長く、現在国際ハンドボール連盟ランキング1位（International Handball Federation, online）であるドイツを比較対象国とした。ドイツの取り組みを詳細に解釈することによって、自国の取り組みに対しても「他者の視点」

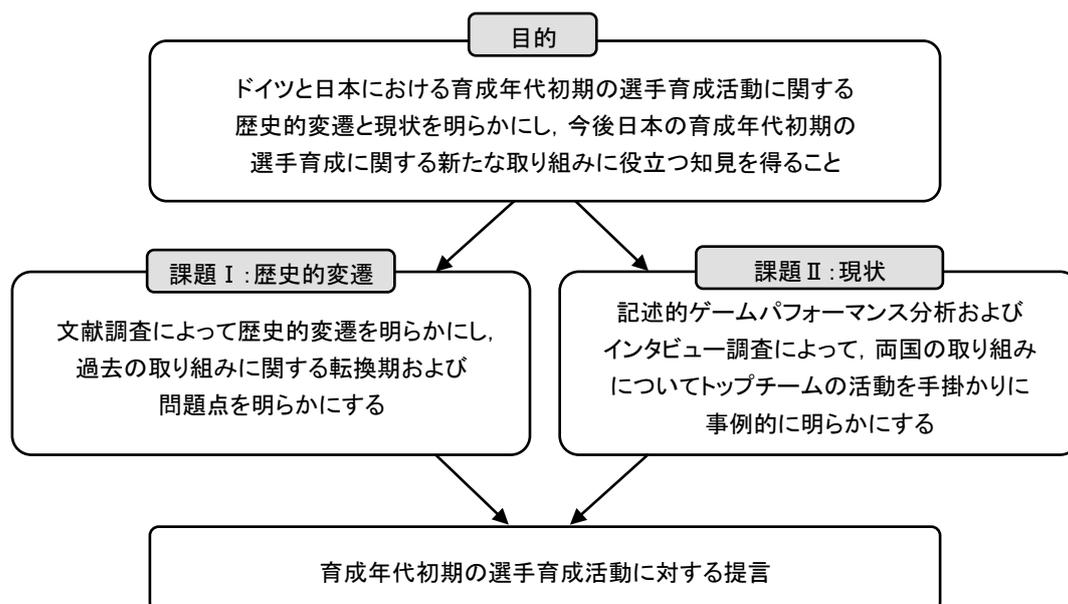


図1 研究の全体像

を持って批判的に分析できる（中矢，2019）ようになることを目指している．そのため，ドイツと日本の二国間における差異性や共通性に着目するのではなく，ドイツと日本の両国の取り組みの特質を明確にすることを旨とする．

4. 用語の定義

本論を通じて使用される基本的な用語の定義を以下に示す．

① 育成年代初期

ドイツでは，最も低い年齢カテゴリーとして，U8（8，9歳），U10（10，11歳），U12（12，13歳）というように2歳刻みのカテゴリーが設定されている（ノイハウス，2016，pp.6-7）．日本では，小学校期として，6歳から12歳を1つにまとめた年齢カテゴリーが設定されている（財団法人日本ハンドボール協会，2009）．本論では，初めて対外試合が認められるカテゴリーを選手強化活動の始まりと捉え，それについて「育成年代初期」という用語を使う．具体的には，ドイツではU10（10，11歳），日本では小学校高学年（10～12歳）である．なお，ドイツのU10の選手は当該シーズンの試合が開催される年（1月以降）に11歳になる．日本の小学校高学年の選手は当該大会が開催される年度（4月以降）に12歳になる．そのため，本論で対象とするチームに所属する選手の年齢は日本がドイツより1歳高い．

② 技術

ゲーム状況を目的に合うように解決する機能をもった運動経過という意味で「技術」という用語を使う（シュテラーほか，1993，p.66）．

③ 技術力

ゲーム状況を目的に合うように解決する運動経過を自らの身体を動かして遂行することができる能力という意味で「技術力」という用語を使う（會田，2019a）．

④ 戦術

もっとも良いゲーム結果を得るために，相手の行動やゲーム状況に応じて自らの行動を調整し，個人で，または味方と協力して行う具体的・実践的な行為もしくは行為の事前計

画という意味で「戦術」という用語を使う（會田，2006）。

⑤戦術力

相手の行動に合わせて自分の行動を調整することによって試合の目標に照らして、相手に対して優位を得ることができる能力という意味で「戦術力」という用語を使う（朝岡，2006）。

⑥ゲームパフォーマンス

プレーの主体であるプレーヤーあるいはチームの競技力が試合で発揮された結果、生じたものという意味で「ゲームパフォーマンス」という用語を使う（中川，2015，p.494）。

⑦ゲーム能力

球技における個人の競技力，すなわち，戦術力，技術力，体力，心的・知的能力の4つの要素からなる複合的達成力について，「ゲーム能力」という用語を使う（會田，2019b，p.65）。

⑧積極的防御

自陣のフリースローラインより外側，すなわち守るべきゴールから遠いエリアで行われる防御について「積極的防御」という用語を使う。

⑨消極的防御

自陣のフリースローラインの内側，すなわちで守るべきゴールから近いエリアで行われる防御について「消極的防御」という用語を使う。

⑩アクティブ（防御活動）

攻撃プレーヤーのパスまたはシュートに制限を加える防御，攻撃プレーヤーの進路を遮断する防御，または攻撃プレーヤーのミスを誘発する防御について「アクティブ」という用語を使う（Späte and Wilke, 1989）。

⑪リアクティブ（防御活動）

攻撃プレーヤーの動きに合わせてついて行く防御について「リアクティブ」という用語

を使う（船木・會田，2014）。

5. 研究の限界

本論には以下の点で限界が存在する。したがって、本論で得られた知見は、これらの限界の範囲内で解釈されなければならない。

①選手育成活動に対する各国のハンドボール協会以外の研究機関や競技団体からの影響について考慮できないという限界

本論では、第2章において、ドイツと日本のハンドボールにおける選手育成活動の歴史の変遷を明らかにするために、それぞれの国の協会が発行する機関誌を調査対象とした。

調査対象である育成年代初期における取り組みに着目すると、近年は、一つの専門種目に特化したクラブでの身体活動が中心になってきている。そこでは、一面的で大人の練習をコピーしたような早期専門化が問題となっている（Roth and Kröger, 2015）。早期専門化によるリスクとしては、子どもたちの社会的孤立やバーンアウト、他者への過度の依存などが挙げられている（Malina, 2010）ため、ドイツでは、早期専門化を避けることを目的に、球技系の専門競技に入る前の体系だった準備プログラムとして、バルシューレと呼ばれるプログラムが開発されている（岡出，2018）。このプログラムでは、子ども（12歳以下）の初心者を対象としており（奥田，2018, p.10）、現在はドイツに加えて、アメリカ、中国、日本において幅広く普及している。このように、ドイツおよび日本においては育成年代初期の学習者を対象に、競技種目の枠を越えたタレント発掘を意図したプログラムが開発、普及されてきている。

本論の調査対象である機関誌の内容は、他の競技種目団体やバルシューレのようなプログラムを開発する研究機関などの影響を受けている可能性は否定できない。そのため、本論では機関誌を発行する各国のハンドボール協会以外の研究機関や競技団体からの影響について考慮できないという限界がある。

②調査対象チームに関する限界

本論では、第3章において、ドイツおよび日本における育成年代初期のトップチームを対象に事例的にチームの取り組みを明らかにすることを目的とした。調査対象のチームと指導者は、ドイツは1チームとそのチームの指導者1名、日本は2チームとそれぞれのチ

ームの指導者 2 名であった。そのため標本の偏りに関する問題は否めない。しかし、本論の目的を達成することを考えると、調査対象のチーム数については、多い方が望ましいとは言えない。むしろ、各国の特徴的なチームおよび指導者を対象に調査をする必要がある。

ドイツでは、タレント指導活動を中心に行う拠点として、男女それぞれ 13 の都市を DHB-Stützpunkte に定めている (Deutscher Handballbund, 2017, p.91)。そこでは、ドイツハンドボール協会、指定された州協会およびその州に属するクラブチームが互いに協力しながらタレント育成活動が行われる。男女ともに DHB-Stützpunkte として定められている都市は、ライプツィヒ、シュトゥットガルト、ハノーファーの 3 都市である。また、ドイツハンドボール協会は、ライプツィヒ大学との提携によって指導者育成の強化を目指している (Deutscher Handballbund, 2017, p.50)。これらのことから、ライプツィヒでは、ドイツハンドボール協会が示す理念を反映するような選手育成活動、すなわちドイツの選手育成活動の取り組みの特徴が現れるような活動が行われていると考えられる。本論では、ライプツィヒに拠点を置く育成年代初期 (U10) の男子チームのうち、地区大会で優勝した 1 チームを研究対象とした。

日本には、DHB-Stützpunkte のように、日本協会、各地方協会および各チームが互いに協力してハンドボールのタレント育成活動を行う拠点は無い。そこで本論では、全国小学生ハンドボール大会における男子優勝チームおよび準優勝チームの 2 チームを調査対象とした。全国小学生大会で上位の成績を残すチームは、その国における選手育成活動の取り組みの特徴を現わしていると考えられるからである。

また、本論では、男子チームのみを対象とした。そのため、本論で得られる知見は、女子に適用できない可能性もある。しかしドイツおよび日本では、育成年代初期において男女同一の育成方針が提示されていることから、育成年代初期の男女チームおよびその指導者の理解には役立つと考えられる。

第 2 章 ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷（課題 I）

1. 研究背景

(1) 球技における育成年代初期の選手育成活動

近年、球技では、各発育発達段階における育成の目標像や目指されるゲームが提示されている（藤本，2019）。その中でも育成年代初期に着目すると、バスケットボールでは、マンツーマン防御の義務化（公益財団法人日本バスケットボール協会，2018）、全国大会における対戦形式の変更が行われている^(注1)。サッカーでは、成人（11人制）より少ない人数の8人制で試合が行われている（財団法人日本サッカー協会，2012）。このように、長期的な選手育成を目指して、育成年代初期において様々な変革が行われている。それは、「子どもは小さな大人」ではない（ルソー，1978）という理念に基づく育成プログラムのリニューアルであるとも考えられる。

日本のハンドボールにおいても育成年代初期からの一貫指導が重視されている。選手育成活動として、2002年には長期的な一貫指導を目指したナショナル・トレーニング・システム（以下、NTSとする）（財団法人日本ハンドボール協会，2002）が導入され、2015年には12歳以下の試合においてJクイックハンドボールと呼ばれる新競技規則が導入された。しかし、永野ほか（2017）は、日本の一貫指導プログラムでは、総合的な体力と世界で通用する技術の習得が掲げられているものの、ドイツ、デンマーク、ハンガリーの強豪国と比べると、選手に身につけさせるべき内容に関する具体的な記述は少ないと述べている。また、2015年に導入された新競技規則では、「積極的な防御」の採用を推奨し、「空いているスペースや空けたスペースを攻める意識の向上」を目的としている（公益財団法人日本ハンドボール協会，2015）。しかし、2017年度の全国小学生ハンドボール大会の結果を見る限り、競技規則変更の目的の1つである積極的な防御隊形の採用が達成されたとは言えない（スポーツイベント，2017）とも評価されている。

もし、ドイツおよび日本ハンドボール協会の育成年代初期の選手育成活動の歴史的変遷を明らかにすることができれば、長期的な視野に立った合理的な一貫指導を実現するための有用な知見が得られるであろう。そうすることによって、現在の選手育成活動を詳細に理解し、新たな取り組みに基づいた選手育成を行うことができるようになると考えられるからである。

(2) 選手育成活動に関する文献

ハンドボールの選手育成に関する取り組みの理念、目標、プログラム等に関する公式な情報は、主に競技団体が発行する機関誌で得ることができる。機関誌とは、「政党や研究所などの団体または個人が、その活動内容などの発表・宣伝・連絡のために発行する新聞や雑誌類」(新村編, 2008)である。ドイツハンドボール協会の機関誌である『handballtraining』(月刊誌)は、1986年から、12歳以下の選手を指導している指導者向けの機関誌である。『handballtraining JUNIOR』(季刊誌)は、2012年から発行されている。『handballtraining』の1988年4月号において、著者のシュペーテは、今後も育成年代の選手育成に関する記事を発表する(Späte, 1988)と述べている。また、『handballtraining JUNIOR』の2012年第1号において、当時のドイツハンドボール協会選手育成委員長であるブランドは、季刊誌『handballtraining JUNIOR』を通して、12歳以下の子ども達が将来よりよく育成されるように、実践現場で役立つ助言や提案をしていくと述べている(Brand, 2012)。

日本ハンドボール協会の機関誌である『ハンドボール』は、1960年から発行されている。第1巻・第1号において、当時の同協会会長であった式場は、機関誌『ハンドボール』を通して、ハンドボールの良さを多めに普及してもらいたい(式場, 1960)と述べている。それを受けて、第1巻・第4号では、今までは機関誌の普及を目指した記事内容であったが、「今後は全32頁のうち、20頁はハンドボール技術(レベル)の向上に役立つ」内容を目指すとともに、「協会の人々が、協会の立場に立って編集するのが、この雑誌の本来の行く道である」ことが示されている(杉山, 1960)。さらに、機関誌第300号や第500号という節目では、これまでの機関誌の意義を確認し、記事内容のさらなる充実を目指している(安藤, 1990; 川上, 2009)。

これらのことから、当初から現在まで、機関誌は、特に普及および選手育成に関するドイツおよび日本ハンドボール協会の意思を反映・発信していると捉えられる。

(3) 研究目的

本章では、ドイツおよび日本ハンドボール協会機関誌の記事を対象に、育成年代初期の選手育成活動に関する記載内容をテキスト化し、質的に分析することによって、まず育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷を明らかにする。次に過去の取り組みに関する転換期および問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本章では、前述した目的を達成するために以下の分析手順を経た（図 2）。なお、日本を対象とした調査では、「翻訳」の分析手順を省略した。

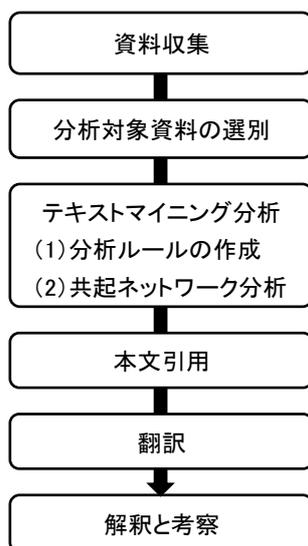


図2 本章における分析手順

(1) 資料収集

ドイツの育成年代初期における選手育成活動は 1990 年代初頭から本格化した（Eberl and Baum, 2015）。そこで本章では、ドイツについては、ドイツハンドボール協会が発行している月刊誌『handballtraining』の 1988 年から 2018 年までの 31 年分、全 310 冊、13,560 ページ、および季刊誌『handballtraining JUNIOR』の 2012 年から 2018 年までの 7 年分、全 17 冊、1,071 ページの中から、U10 以下のカテゴリーに関する記事を取り出した。記事は、合計で 246 件あった（表 1）。なお、『handballtraining』の 1986 年および 1987 年の記事は入手できなかったため、調査対象としなかった。

日本については、日本ハンドボール協会が発行している機関誌『ハンドボール』の全国小学生ハンドボール大会が初めて開催された 1988 年から 2018 年までの 31 年分、全 315 冊、9,209 ページの中から、12 歳以下のカテゴリーに関する記事を取り出した。記事は、合計で 97 件あった（表 1）。日本では、全国小学生ハンドボール大会が初めて開催された 1988 年より前にも県やブロック単位での小学生大会は行われていたが、それに関する記事は調査対象としなかった。

なお、ドイツハンドボール協会は、機関誌の他に『Handball pur』と呼ばれる選手育成に関する DVD や文書を、日本ハンドボール協会は、機関誌の他に『ハンドボール協会指導教本』と呼ばれる選手育成に関する DVD や文書を発行している。機関誌は、先述したように各中央競技団体の意思を発信していると捉えられるため、これまでに発行された機関誌を調査対象とすることで研究目的を達成できると判断し、強化委員会など個別の委員会によって発行された選手育成に特化した内容の資料は調査対象としなかった。

表1 分析対象資料の内訳

	ドイツ		日本	
	記事数	分析対象ページ数	記事数	分析対象ページ数
1988-1992	22	67	5	10
1993-1997	45	96	13	24
1998-2002	51	111	33	58
2003-2007	47	88	15	19
2008-2012	13	32	7	11
2013-2018	68	123	24	26
合計	246	517	97	148

(2) 分析対象資料の選別

次に、得られた資料を選別した。本章では、育成年代初期の選手育成における理念や取り組みに関する歴史的変遷を明らかにすることが目的であるため、具体的な練習ドリルの紹介部分は分析対象から外した。また、記事の内容に、U10（ドイツ）または12歳（日本）より上のカテゴリーに関する記載が含まれている場合には、U10または12歳以下の記載のみを取り出した。

記事の発行年をもとに31年分の分析対象資料を複数の年代に分けて予備的に分析した結果、6つの年代に分けた時に最も解釈しやすかった。そのため、本論では6つの年代に分けて検討した。具体的には、1988年から5年ずつに区切り、最後の2013年から2018年のみ6年間とした。なお、年代区分を決定する際には、その妥当性を確保するために1名の研究者と十分に確認しながら進めた。この研究者は、日本スポーツ協会公認上級コーチ資格（ハンドボール）を有し、コーチング学の博士号を有する者であった。

(3) テキストマイニング分析

文章・音声・映像などさまざまな質的データを分析するための方法として内容分析がある（樋口，2018，p.1）。内容分析では多くの場合，データをいくつかのカテゴリーに分類した上で分析を進めていく（樋口，2018，p.1）。しかし，大量データのコーディングを人手で行う場合，全てのデータを一貫性をもって分類することが難しい上に，分類基準作成は非常に困難である（加納，1961）。さらに，研究者の持つ理論的仮説や研究目的が異なれば，同じデータに向き合っても分類基準は異なる（樋口，2018，p.8）。

そこで近年，コンピュータを利用した計量テキスト分析が行われるようになってきた。そこでは，コンピュータがコーディングを行うため，人手でコーディングした場合，何年もかかるような大量データであっても，わずかな時間でコーディングでき，またデータ量の多寡に関わらずその分類基準が揺らがない（川端・樋口，2003）。また，得られたデータを計量分析することによって，単なる自由回答やテキストデータを読んでいるだけでは気づかない，あるいは気づきにくいデータの「潜在的論理」を発見できる可能性がある（川端，2003）。

そこで本章では永野ほか（2017）の方法に倣い，内容分析の方法にテキストマイニング分析を採用し，ソフトウェアとして KH Coder（Ver. 3. Alpha. 14）を用いた。なお，テキストマイニング分析とは，コンピュータによってデータの中から自動的に語を取り出し，さまざまな統計手法を用いて探索的な分析を行い，語の用いられ方のパターンやルール，ひいては知識の発見を目指す分析手法である（樋口，2018，p.1）。

①分析ルールの作成

テキストマイニング分析を行うにあたり，まず強制抽出する語の指定および使用しない語の指定をした。強制抽出する語の指定とは，例えば「1 gegen 1（1対1）」というひとまとまりの言葉が「1」，「対」，「1」の3語として認識されることを防ぐ手続きである（樋口，2018，p.133）。使用しない語の指定とは，例えば，「z. B.（日本語：例えば）」という言葉は，「z」，「B」の2語として認識されてしまうため，「z」，「B」の2語を使用しない語とする作業である。これらの語の指定に関する分析ルールの作成は，KH Coder（Ver. 3. Alpha. 14）によって抽出された語の一覧を確認した後に行った。

②共起ネットワーク分析

テキストマイニング分析によって抽出された語がどの語と関連して使われていたのかを調べるため、共起ネットワーク分析を行った。ここでは、得られた語と語のネットワークについて、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行う「サブグラフ検出媒介性」（樋口，2018，p.160），およびそれぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているのかを示す「次数中心性」（樋口，2018，p.160）によってサブグラフ（関連の強い語のグループ）を検出した。

(4) 本文引用

それぞれのサブグラフを解釈するために、各サブグラフ中で中心性の最も高い語およびその語と最も共起の高い語の 2 語を含む文章を引用した。ただし、各サブグラフ中で、全ての語の中心性が同様の場合には、頻出度の最も高い語を中心性の高い語とした。引用文は、「前後で連続した 2 文以内にその 2 語が含まれている」という条件を満たす文章とした。引用文の数は、各サブグラフで 5 文になるまで検索した。2 文以内に指定された 2 語がなかった場合には、中心性の最も高い語とその語と 2 番目に共起の高い語の 2 語を含む文章を同じ条件で引用した。それでも引用文が 5 文に満たない場合には、サブグラフ内で 2 番目に中心性の高い語とその語と最も共起の高い語の 2 語を含む文章を引用し、サブグラフを解釈できる引用文を 2 文以上検索した。

本文引用の具体例をドイツにおける 1988 年から 1992 年における共起ネットワーク（図 3）で示す。サブグラフ 1 で中心性の最も高い語は「kind（子ども）」、その語と最も共起の高い語は「ball（ボール）」であった。連続した 2 文以内に kind と ball の 2 語が含まれている文章を検索したところ、「…ボールは子どもの手に適してなければならない」を含む 5 つが引用文として取り出された（表 2）。

(5) 翻訳

ドイツを対象とした調査では、(1) 資料収集から (4) 本文引用までの手続きにおいてドイツ語のみを使用した。そのため、ドイツ語で得られた引用文を日本語へ翻訳した。翻訳は、本研究者が行った。本研究者は、ドイツ語の語学能力証明書として Goethe-Zertifikat B2 を持っていた。この語学能力証明書は「自分の専門領域では専門的な議論も理解することができるドイツ語力」（Goethe Institut, online）を意味しており、適切な翻訳が行われた

察できる能力を有すると考えられる。解釈における恣意性をできる限り排除するために、本研究者と博士（コーチング学）の学位を有する1名の研究者でトライアングレーションを行った。

なお、引用文が2文に満たないサブグラフ、意味のある解釈ができないサブグラフに関

表2 ドイツの1988年から1992年のサブグラフにおける引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	子ども	ボール	<p>ボールは「手の器の大きさ」でなければならない。= ボールは子どもの手に適していなければならない。</p> <p>初心者にステップシュートを習得させる際には、シュート時に子どもがしっかりと握れるくらい小さなボールを使用させる。</p> <p>子どもに提供されているボールは子どもの小さな手には適していないことが多いため、ボールヘカを伝えることができない。</p> <p>1人または2人の子どもだけがボールを持ってプレーするのではなく、全員がゲームに参加できるようにまずは能力やスキルを育成する。</p> <p>子どもが味方と相手を観察するためには、ボールを注視せずにドリブルしなければならない。</p>	子どもに適したボールの推奨
2	クラブ	新しい	<p>間違いを防ぐために、新しい連載「Handball-1x1」では、以下のことを決めた。それは、クラブでは一番下のカテゴリーを指導するという難しい課題を担う「新人指導者」がいるため、そのような指導者に対する現場で役立つ内容にした。</p> <p>ドイツハンドボール協会によってクラブでの実践が提案されたコンセプト「4+1でのミニハンドボール」が登場し、1989年には新しいシリーズ「ハンドボールハンドブック」(ドイツハンドボール協会公式指導書)の第1巻(「子どもとのプレーや練習」)が発刊された。</p> <p>青少年の活動に積極的に参加している全てのクラブおよび州協会の力がここに集らなければならないでしょう。構造的な問題、競争思考、目標、そして学習内容は再考されなければならない。</p>	クラブで実践すべき新たな学習内容の提示
3	系統的な	コンセプト	<p>重要なことは、ハンドボールの導入段階のために系統的なコンセプトを提供することである。</p> <p>試合で成功することや試合自体を目標としない、ゲーム能力を育成するための系統的なコンセプト。</p> <p>この一連の記事は、既存の系統的コンセプトに対する重要かつ詳細な補足の役割を担っている。</p> <p>成人スポーツのような活動ではなく、年齢に応じて教育的・系統的に調整されたコンセプトが実践されなければならない。</p> <p>系統的なコンセプトが欠けていることによって、クラブの育成年代における体系的な選手育成活動がさらに困難になる。</p>	系統的なコンセプトの必要性
4	育成年代の・青少年の	内容	<p>育成年代においては、発達段階に適した練習内容を選択する必要がある。</p> <p>練習内容および練習中の態度に関する上位目標は、青少年を生涯スポーツへ導くことである。</p>	育成年代に適した練習内容
5	育成・普及	年	<p>何年も前に、ハンドボールを学びたい子どもたちに対する長期的なゲーム能力の育成を目指した練習プログラムを指導者に提供した。</p> <p>コンセプトの目的は、U8からU12まで、何年にもわたって基本的なスキルと能力を徐々に高めていくことであった。すなわち、試合での成功や試合自体は目標としない、ゲーム能力を育成することである。</p> <p>ドイツハンドボール協会による育成年代チームの普及に関する統計(1988年)から、大きな減少傾向が見られる。過去5年間で、育成年代のチーム数は2565に減少した。</p> <p>スポーツのカリキュラムにおいてボールゲームのないような長年にわたり同じままである:ドッジボール、ハンターボール、パンチボール、シートボール、キックベース。これらは普及しなくなった。</p>	ゲーム能力の長期的な育成

しては、概念化しなかった。そのサブグラフは、図においては点線で囲い、表においては記載しなかった。

3. 結果

(1) ドイツの歴史的変遷に関する結果

①1988年から1992年

1988年から1992年の5年間の記事内容は、10のサブグラフに分類された(図3)。

表2にサブグラフを解釈する引用文とその概念化を示した。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「子ども」であった。引用文には、「ボールは子どもの手に適していなければならない」、「子どもがシュート時にしっかりと握れるくらい小さなボールを使用」などがあった。このことから、このサブグラフを「子どもに適したボールの推奨」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「クラブ」であった。引用文には、「新しい連載…では、…クラブ…の『新人指導者』…に対する現場で役立つ内容」、「クラブでの実践が提案された…新しいシリーズ」などがあった。このことから、このサブグラフを「クラブで実践すべき新たな学習内容の提示」と概念化した。

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「系統的な」であった。引用文には、「系統的なコンセプトを提供」、「ゲーム能力を育成するための系統的なコンセプト」などがあった。このことから、このサブグラフを「系統的なコンセプトの必要性」と概念化した。

4つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「育成年代の・青少年の」であった。引用文には、「育成年代においては、発達段階に適した練習内容」、「練習内容…に関する上位目標は、青少年を生涯スポーツへ導くこと」があった。このことから、このサブグラフを「育成年代に適した練習内容」と概念化した。

5つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「育成・普及」であった。引用文には、「何年も前に…長期的なゲーム能力の育成を目指した練習プログラムを…提供」、「コンセプトの目的は、…何年にもわたって基本的なスキルと能力を徐々に高め…ゲーム能力を育成すること」などがあった。このことから、このサブグラフを「ゲーム能力の長期的な育成」と概念化した。

6つ目以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「異なる」、「練習ドリル」、「小さな」、「注意点」、「頻繁に」であったが、これらに関しては意味のある解釈が可能な

かった。

②1993年から1997年

1993年から1997年の5年間の記事内容は、6つのサブグラフに分類された(図4)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「1対1」であった(表3)。引用文には、「ボールを保持した相手プレイヤーに対する1対1」、「1対1状況における防御プレーを育成する」などがあった。このことから、このサブグラフを「1対1状況を個人で解決する防御能力の育成」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「子ども」であった。引用文には、「(遊

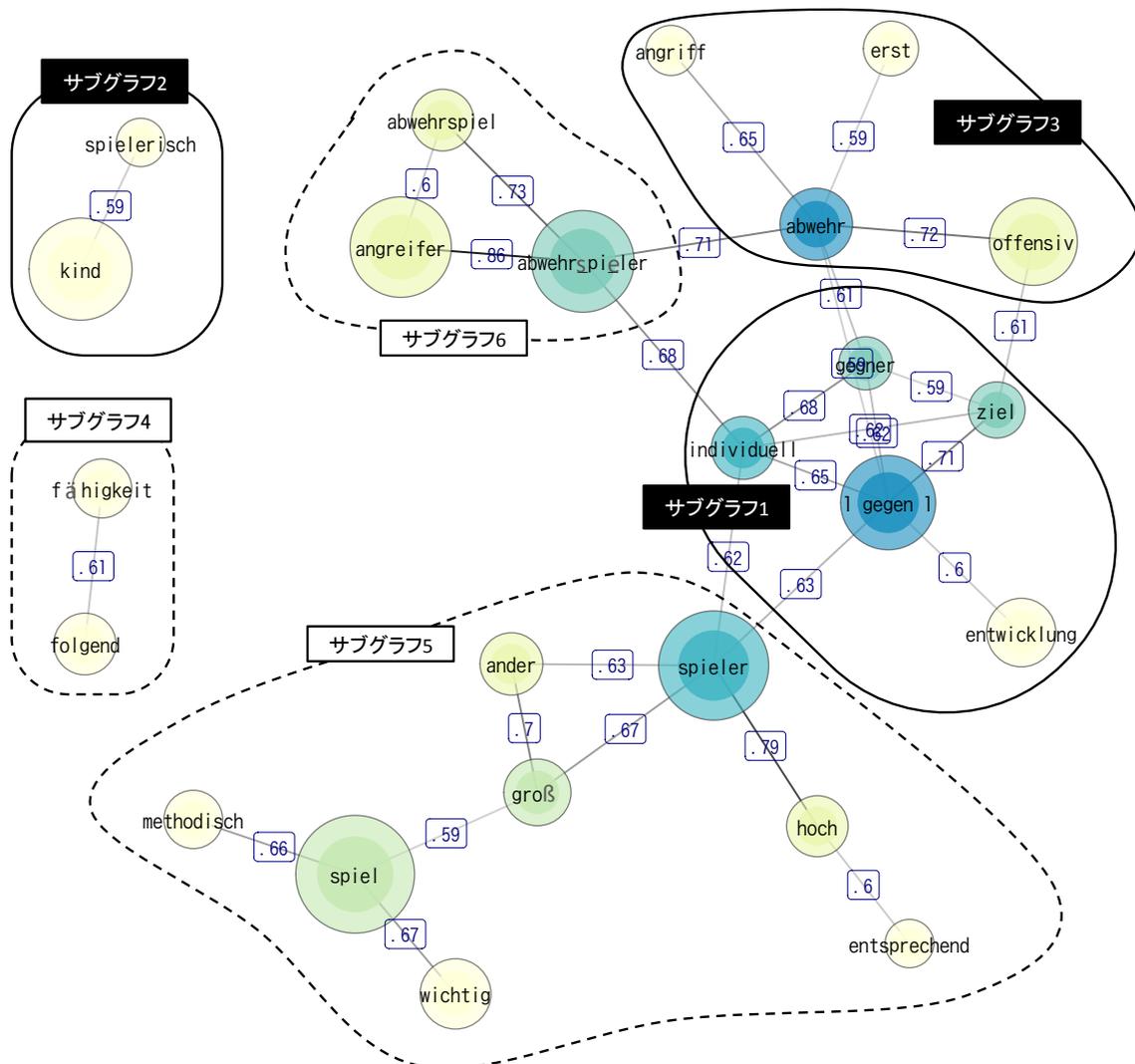


図4 ドイツの1993年から1997年における共起ネットワーク

びの中でのウォーミングアップ) では、全ての子ども、あるいは少なくとも2人に1つはボールを持たせる」、「子ども向けの遊びの中での基礎学習」などがあつた。このことから、このサブグラフを「遊びの中での育成」と概念化した。

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「防御」であつた。引用文には、「防御では…積極的な位置でプレーする」、「積極的な防御に対する攻撃方法」などがあつた。このことから、このサブグラフを「積極的な防御とそれに対する攻撃」と概念化した。

4つ目以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「能力」、「選手」、「防御プレーヤー」であつたが、これらに関しては意味のある解釈ができなかつた。

表3 ドイツの1993年から1997年のサブグラフにおける引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	1対1	相手プレーヤー	ボールを保持した相手プレーヤーに対する1対1において、防御プレーヤーは相手プレーヤーと自チームのゴールの間に立つ。	1対1状況を個人で解決する防御能力の育成
		育成	1対1状況における防御プレーを発展させるための良い出発点となる。	
	個人の相手プレーヤー	目標	個人または協同的なプレーにおける認知的な目標は、事前に情報を把握することである。	
		目標	目標は、「相手プレーヤーとプレーする」というような、創造的な防御プレーである。	
2	子ども	遊びの中で	練習における最初の部分(遊びの中でのウォーミングアップ)では、全ての子ども、あるいは少なくとも2人に1つはボールを持たせることが重要である。 「子ども向けの遊びの中での基礎学習」というテーマにおいて、「スポーツの土台の養成」および「ハンドボールをプレーすることによって学ぶ」の2つに分けたビデオ教材が発売される。 これらの指導者は子どもや青少年に対して遊び心のある発達を阻害する。後者はルールロボットになる。	遊びの中での育成
3	防御	積極的な	基本的に防御では、アクティブかつ積極的な位置でプレーする。	積極的な防御とそれに対する攻撃
			この議論は、積極的な防御に対する攻撃方法として理解されるべきである。	
			ドイツ男子代表チームの課題は、アフリカチームの積極的な防御に対する攻撃プレーだけではない。	
			積極的な防御(例:マンツーマン防御)においては、選手は相手プレーヤーに対して集中的に、継続してプレーしなければならない。 攻撃プレーヤーは、ボールを受け取るために、積極的な防御に対して先に動かなければならない。	

③1998年から2002年

1998年から2002年の5年間の記事内容は、6つのサブグラフに分類された(図5)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「空間・スペース」であつた(表4)。引用文には、「ボール保持者が積極的な防御に対して広いスペースを使えるように」、「防御プレーヤーを引きつけて味方にスペースを与える」、「消極的な防御に対してはスペースが

狭い」などがあつた。このことから、このサブグラフを「積極的または消極的な防御に対する攻撃」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「道」であつた。引用文には、「ボール保持者がゴールへの道も見つけれなければならない」、「ゴールからゴールまでの長い道のり」などがあつた。このことから、このサブグラフを「ゴール方向へボールを運ぶ意識」と概念化した。

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ボール」であつた。引用文には、「様々な（大きさや種類の）ボールを使った活動」などがあつた。このことから、このサブグラフを「様々な大きさや種類のボールを用いた練習」と概念化した。

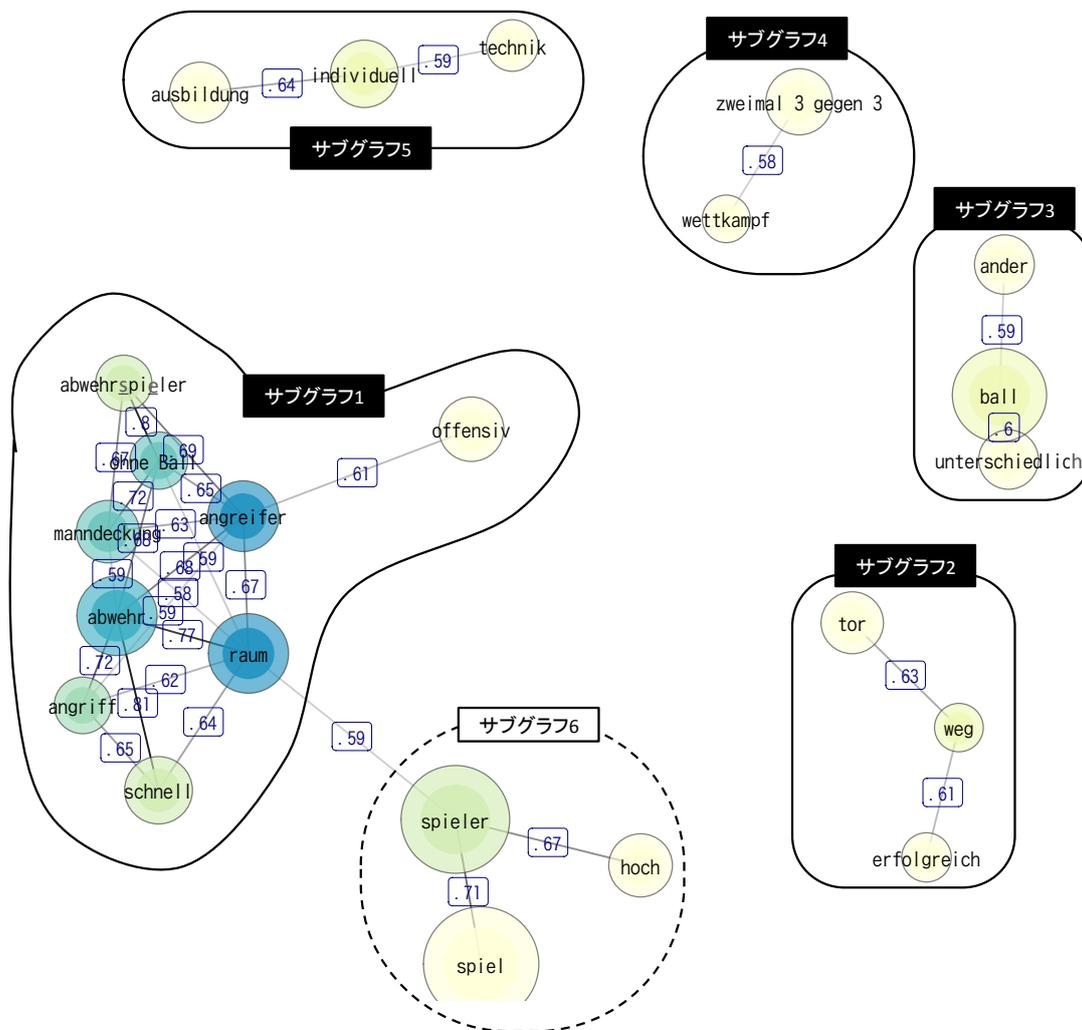


図5 ドイツの1998年から2002年における共起ネットワーク

4つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「2×3対3」^(注2)であった。引用文には、「『2×3対3』という試合形式」、「2×3対3では、非常に激しいゲーム局面と休息局面が交互に…起こる」などがあった。このことから、このサブグラフを「2×3対3での試合形式のトレーニング」と概念化した。

5つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「個人の」であった。引用文には、「育成志向であり、その内容は個の育成」、「育成年代での個の育成に重点」などがあった。このことから、このサブグラフを「個の育成」と概念化した。

6つ目のサブグラフにおいて、中心性の高い語は「選手」であったが、これに関しては意

表4 ドイツの1998年から2002年のサブグラフにおける引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	空間・スペース	防御	ボール保持者が積極的な防御に対して広いスペースを使えるように、他の攻撃プレイヤーは防御プレイヤーを引きつけて味方にスペースを与える。	積極的または消極的な防御に対する攻撃
			消極的な防御に対してはスペースが狭いため、ボール保持者はそれを明確に行うことができない。	
		攻撃プレイヤー	攻撃プレイヤーは自分が突破したいスペースを広げようとしなければならない。	
			パスした後の攻撃プレイヤーの動き方としては、次のボール所有者のためにゴール前のスペースを空けることが重要であるが、消極的な防御に対してはゴール前の狭いスペースでプレーすることになる。	
2	道	ゴール	ボール保持者がゴールへの道も見つけなければならないことを意味している。	ゴール方向へボールを運ぶ意識
			2×3対3ではゴールからゴールまでの長い道のりを避けられるため、技術的に優位なプレイヤーの単独プレーが不可能になる。つまり、全てのプレイヤーが積極的にゲームに関わることとなる。	
			ボール保持者が本当にゴールへの道を模索していることを意味している。	
3	ボール	異なる・様々な	様々な(大きさや種類の)ボールを使った活動も含まれる。	様々な大きさや種類のボールを用いた練習
			異なる球技、すなわち様々な(大きさや種類の)ボールを使用しなければならない。	
			ボールを異なる高さ、異なる早さでドリブルする。	
		他の	重要なことは、ボール保持者とボールを持たない他のプレイヤーの動き方である。	
4	2×3対3	試合	例として、「2×3対3」という試合形式を挙げる。この試合形式では、グループ・チーム戦術はあまり有効ではないが、個人戦術を育成するためのゲームとして非常に優れている。	2×3対3での試合形式のトレーニング
			試合に出場する人は全員、自分の能力を発揮すべきである。広い空間、小さなユニット、強度の高い中でプレーすることは、初心者育成においても役立つ。「ランナー」がいない2×3対3では、非常に激しいゲーム局面と休息局面が交互に何度も繰り返し起こる。	
5	個人の	育成	子どものハンドボールにおけるコンセプトは育成志向であり、その内容は個の育成である。	個の育成
			「古い」コンセプトにおいても、育成年代での個の育成に重点を置いていた。	
			個の育成という意味では、攻撃が数的有利のゲームは適していない！	
			個の育成についての良い面は、この記事の最初に紹介した。	
			異なるポジションでの育成だけでなく、プレイヤーのタイプ(シューター、オールラウンダーなど)に基づく個の育成も含まれる。	

味のある解釈ができなかった。

④2003年から2007年

2003年から2007年の5年間の記事内容は、8つのサブグラフに分類された（図6）。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプト」であった（表5）。引用文には、「ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプト…では、積極的な防御を規定」、「ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトの中心的なテーマは、育成年代初期における新しい試合形式である。…将来の世代はマンツーマン防御の

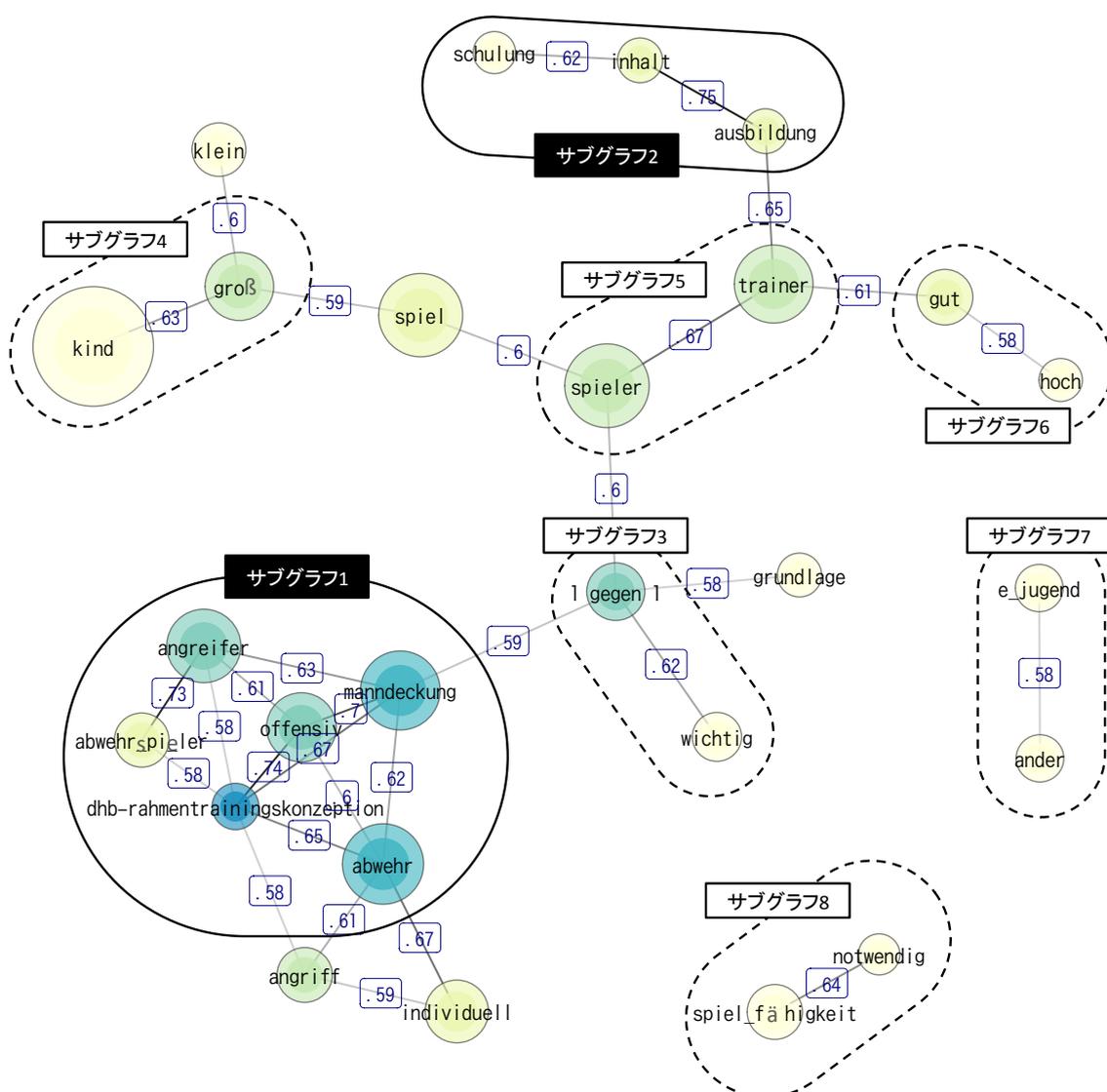


図6 ドイツの2003年から2007年における共起ネットワーク

中でハンドボールを学ぶ」などがあつた。このことから、このサブグラフを「積極的な防
御を規定するドイツハンドボール協会一貫指導コンセプト」と概念化した。

2 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「内容」であつた。引用文には、「子ど
ものハンドボールではゲーム形式の練習においてゲーム能力が育成されるべき」、「正しい
練習内容の推奨だけではうまくかなかつた。つまり、学習、練習、試合は統一されていな
ければならない」があつた。このことから、このサブグラフを「育成方針の反省と一貫指導
コンセプトの確立」と概念化した。

3 つ目以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「1 対 1」、「大きい」、「選手」、
「良い」、「U10 (E-Jugend)」、「ゲーム能力」であつたが、これらに関しては意味のある解
釈ができなかつた。

表5 ドイツの2003年から2007年のサブグラフにおける引用文とその概念化

サブ グラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の 概念化
1	ドイツハ ンドボ ール協 会一 貫指 導コ ンセ プト	積極的な	ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプト2002-2007では、積極的な防御を規定している。 2002-2007年版ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトでは、試合構造の変更(積極的な防御)に加えて、試合運営に関する変更について示されている。そこでは部分的に義務化(U8ではコートを横に区切った4+1でプレーされる)または推奨されている。	積極的な防 御を規定する ドイツハンド ボール協会 一貫指導 コンセプト
		マンツ ー マン防 御	2002-2005年版ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトの中心的なテーマは、育成年代初期における新しい試合形式である。積極的な防御は特殊ではなく、将来の世代はマンツーマン防御の中でハンドボールを学ぶだろう。	
		防御	この記事では、2002-2007年版ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトにおける防御に関するテーマが取り上げられている。 最初のゾーンディフェンス(ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトによると1:5防御)への移行により、多くの指導者にとっては(本当の意味で)初めてコート上が整理される。	
2	内容	育成	器械体操や陸上競技は、ミニハンドボールにおいても重要な役割を担う。もちろん、練習内容はドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトのガイドラインに従うが、子どものハンドボールでは、バルシューレに加えて、ゲーム形式の練習においてゲーム能力(連携、ルールの理解、最初の戦術の原則、パフォーマンスおよびパフォーマンスの違い、試合)が育成されるべきである。	育成方針の 反省と 一貫指導 コンセプトの 確立
		学習	15年間にわたる。適切な指導者研修や正しい練習内容の推奨だけではうまくかなかつた。つまり、学習、練習、試合は統一されていなければならない。	

⑤2008年から2012年

2008年から2012年の5年間の記事内容は、7つのサブグラフに分類された(図7)。

1 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「4+1」^(注3)であつた(表6)。引用文には、「4+1でのゲーム…に加えて…3つの形式からなる試合」、「U8では4+1、U10では通常のコートでの6+1」などがあつた。このことから、このサブグラフを「10歳以下での

試合形式」と概念化した。

2 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「初心者」であった。引用文には、「初心者には…初めからハンドボールのゲームをさせる」、「第一段階では、『スモールゲーム』を通して状況解決スキルを身につけさせるべき」などがあった。このことから、このサブグラフを「ゲームを通した初心者指導」と概念化した。

3 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「実行」であった。引用文には、「試合構造の改革…の現状について詳細に報告し、新しいアイデアの実行に注目し続ける」、「試合構造に関するルールの実行」などがあった。このことから、このサブグラフを「規定（義

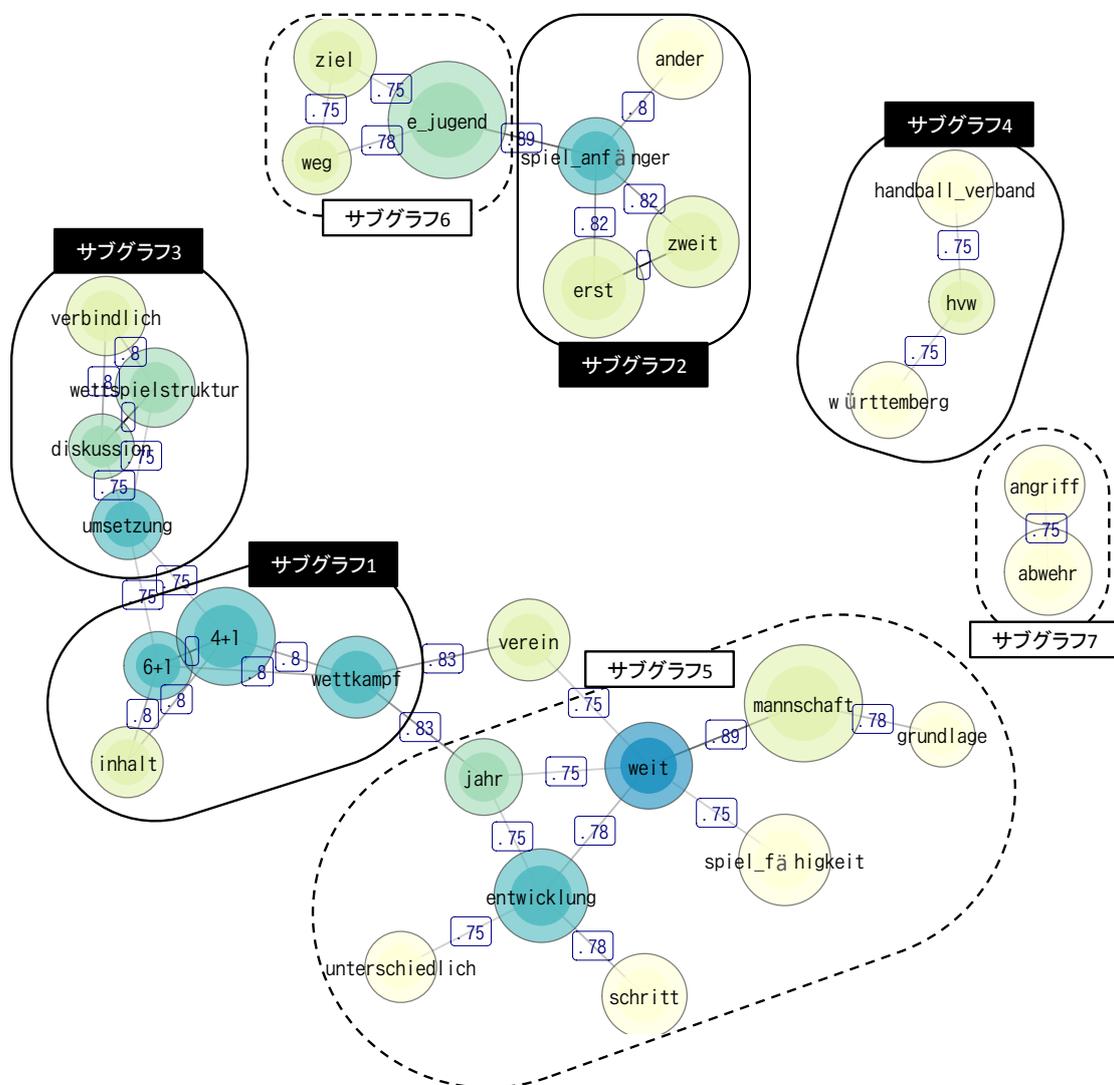


図7 ドイツの2008年から2012年における共起ネットワーク

務化)された試合形式の実践への適用」と概念化した。

4 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「HVW」であった。引用文には、「Württemberg 州協会 (HVW) は…子どものハンドボール独自の概念を発展させる方針へ変更した」, 「Württemberg 州協会もこのトピックを詳細に扱う」などがあつた。このことから、このサブグラフを「Württemberg 州での活動内容の紹介」と概念化した。

表6 ドイツの2008年から2012年のそれぞれのサブグラフにおける引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	4+1	試合	4+1でのゲーム(または5対5のバウンドボールゲーム)に加えて、第2のゲーム(例えばパスゲーム)およびコーディネーションの要素を含むテストの3つの形式からなる試合が導入された。	10歳以下での試合形式
		6+1	U8では4+1, U10では通常のコートでの6+1を主張している。	
			2×3対3のゲームは、1試合を通して、あるいは試合の後半(前半で6+1がプレイされた後)で、またはホームアンドアウェイのホーム(アウェイで6+1)での試合形式として用いられる。4+1は競技種目転向者または競技力が低いチームで行われる。 U10: 年齢に応じた試合形式が用いられる(2×3対3での6+1, または4+1)。	
2	初心者	はじめに・第1に	バウンドボールゲームの利点: 初心者にはドリル練習や「手を使ったミニボールゲーム」で練習してからハンドボールのゲームを行わせるのではなく、バウンドボールゲームを用いることで初めからハンドボールのゲームをさせることができ、やる気を起こさせるという面において良い効果がある。 Roth博士は、どのようにして初心者を「ゲームができる人」へ育成できるかについて研究している。第一段階(5~8歳/U8の年齢層)では、「スモールゲーム」を通して状況解決スキルを身につけさせるべきであり、それは様々な競技におけるゲーム能力の育成に有効であると述べている。	ゲームを通した初心者指導
		異なる	練習においては様々なレベル(初心者, 競技転向者, 上級者)に対する指導を考慮する必要がある。上級者から初心者までの異なるレベルを保ちながらも、試合では全員に成功体験を積ませるために、基本について教えなければならない。	
3	実行	試合構造	8年前に採用された育成年代における試合構造の改革が、これまでどのような影響をもたらしたのかについて話し合った。私たちは現場の現状について詳細に報告し、新しいアイデアの実行に注目し続けることを約束した。	規定(義務化)された試合形式の実践への適用
			このカテゴリーにおける試合構造に関するルールの実行は、比較的多くの地域協会のレベルで規制されていない。	
		試合構造の改革目的は、ドイツハンドボール協会によって暗示された練習内容をクラブで行わせることである。つまり、クラブの指導者は段階的にこのアイデアの実行をしていくことになる。		
義務的な	試合構造	2009年版ドイツハンドボール協会一貫指導コンセプトの改訂時にまとめられたガイドラインは、主に州協会の責任で実施される。フレンスブルク, マクデブルク, グンマースバッハ, シュッターヴァルトには、義務的な試合構造を通して育成年代の選手のゲーム能力を効果的に育成するためのアイデアがある。		
	議論	今まで提示してきたU10, U12の指導者向けの雑誌, ビデオ, DVDなどの資料が不足しているわけではない。しかし、ハンドボールの練習は料理と同じように、素材だけではなく調理が決め手となる。したがって、この記事の目的は、練習計画のガイドラインを示すことによって、指導者がガイドラインに沿って練習を計画できるようになることである。		
4	HVW	州協会	スポーツ科学における子どものスポーツに関する知見から、Württemberg州協会(HVW)は6~12歳の試合構造を変更することで子どものハンドボール独自の概念を発展させる方針へ変更した。	Württemberg州での活動内容の紹介
			Württemberg州協会(HVW)もこのトピックを詳細に扱うために様々な理由をあげている。	

5 目以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「さらに」、「U10 (E-Jugend)」, 「攻撃」であったが、これらに関しては意味のある解釈ができなかった。

⑥2013 年から 2018 年

2013 年から 2018 年の 6 年間の記事内容は、6 つのサブグラフに分類された (図 8)。

1 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「練習」であった (表 7)。引用文には、「子どもには可変的でモチベーションが上がるような練習」、「それぞれの子どもに適した練習を行うために、創造性の溢れる内容にする」などがあつた。このことから、このサブグラフを「子どもが楽しめる多面的な練習」と概念化した。

2 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「練習ドリル」であった。引用文には、「次の記事では、…練習ドリルの例を紹介」、「この記事で説明している練習ドリル」など

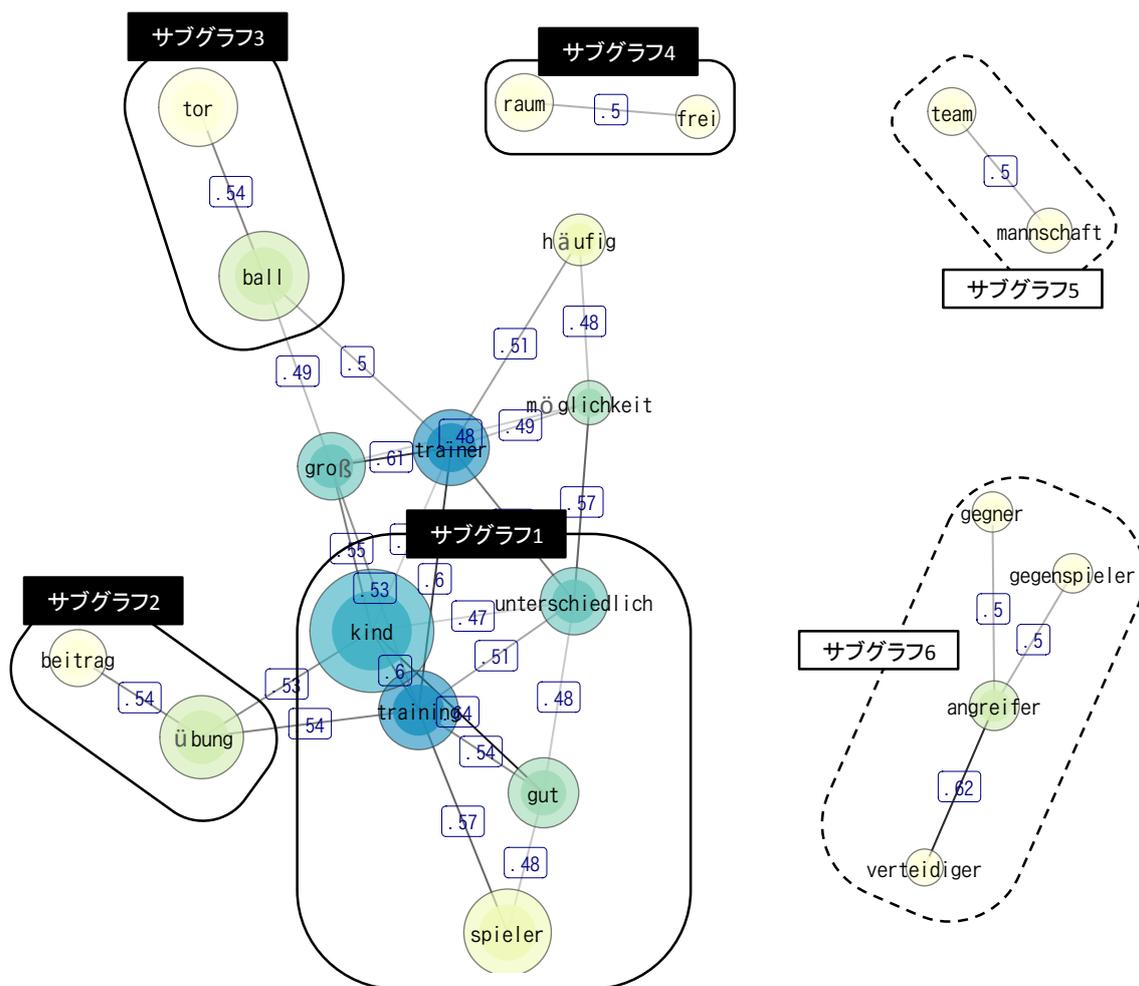


図8 ドイツの2013年から2018年における共起ネットワーク

があった。このことから、このサブグラフを「練習ドリルの紹介」と概念化した。

3 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ボール」であった。引用文には、「ゴールへ向かってボールをうまく投げる」、「ボールを持ってゴールへ向かって動く」などがあった。このことから、このサブグラフは「ゴール方向へ攻める動き」と概念化した。

4 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「空間・スペース」であった。引用文には、「(空いているスペースの代わりに) 防御プレイヤーへ向かって」、「空いているスペー

表7 ドイツの2013年から2018年のサブグラフにおけるキーワードと引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	練習	子ども	<p>典型的な練習をやめ、子どもには可変的でモチベーションが上がるような練習を行っている。</p> <p>それぞれの子どもに適した練習を行うために、創造性の溢れる内容にする。</p> <p>以下の記事では、子どもたちが好きな平台車を使ったドリル練習を紹介する。</p> <p>コーチと子どもたちに負担をかけないために、そしてクラブに途中から入った子どもたちに対しても「普通の」トレーニングを可能にするために、「初心者」は最初にいくつかの入門トレーニングを行う。</p> <p>子どもたちにとって楽しくない単調な練習ほど悪いものはない - 楽しさとパフォーマンスの向上は排他的ではないためである。</p>	子どもが楽しめる多面的な練習
2	練習ドリル	記事	<p>次の記事では、布(またはキャミソールや新聞紙)、小さな箱、ローラーボード、跳び箱の段、ベンチ、マットを別々にまたは組み合わせて使用する練習ドリルの例を紹介する。</p> <p>この記事で紹介している練習ドリルは、ハンドボールキャンプの一部として行われたものである。</p> <p>記事の後半では、フィジカル(筋力、持久力、スピード)を鍛えるためのさまざまな練習ドリルを紹介する。</p> <p>以下では、パラシュートを使ったトレーニング、基本的な運動能力(ランニング、ジャンプ、スロー)およびコーディネーションスキルを向上させるためのスイングクロスの使用方法を示した練習ドリルを紹介する。</p> <p>これらは、この記事の練習ドリルにも当てはまる。</p>	練習ドリルの紹介
3	ボール	ゴール	<p>ゴールへ向かってボールをうまく投げる。</p> <p>ボールを持ってゴールへ向かって動くのか、ボールなしでフリーになるように走るのか。</p> <p>プレイヤーはコートそれぞれの半面において防御プレー(インターセプトする/ゴールを防ぐ)と攻撃プレー(ボールを前へ運ぶ/得点する)を行い、ボールの所有権が代わったら、素早く攻防を切り替えなければならない。</p> <p>攻撃(自陣のゴールからセンターラインまで): ボールをキーパーから受け取る</p>	ゴール方向へ攻める動き
4	空間・スペース	空いている	<p>子どもたちは常に意図的にプレーするのではなく、(空いているスペースの代わりに) 防御プレイヤーへ向かって走る。</p> <p>これらのスキルが十分に養成されていれば、攻撃プレイヤーは空いているスペースを利用して、相手を脅かすことができる。</p> <p>用具を1人、ペアまたはグループで使うかどうか、室内にどのようにステーションを配置するか(例えば、フリースペース、縦に、正方形または円形)を決定する必要がある。</p> <p>空いているスペースについて話す。</p> <p>どこの空間が空くだろうか?</p>	空いているスペースを利用した攻撃

スを利用」などがあつた。このことから、このサブグラフは「空いているスペースを利用した攻撃」と概念化した。

5 つ目以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「チーム」、「攻撃プレイヤー」であつたが、これらに関しては意味のある解釈ができなかつた。

⑦ドイツの歴史的変遷に関する結果のまとめ

共起ネットワーク分析によって得られた結果から、それぞれの年代におけるサブグラフは以下のように概念化された。

1988年から1992年の5年間では、「子どもに適したボールの推奨」、「クラブで実践すべき新たな学習内容の提示」、「系統的なコンセプトの必要性」、「育成年代に適した練習内容」、「ゲーム能力の長期的な育成」と概念化された(表2)。1993年から1997年の5年間では、「1対1状況を個人で解決する防御能力の育成」、「遊びの中での育成」、「積極的な防御とそれに対する攻撃」と概念化された(表3)。1998年から2002年の5年間では、「積極的または消極的な防御に対する攻撃」、「ゴール方向へボールを運ぶ意識」、「様々な大きさや種類のボールを用いた練習」、「2×3対3での試合形式のトレーニング」、「個の育成」と概念化された(表4)。2003年から2007年の5年間では、「積極的な防御を規定するドイツハンドボール協会一貫指導コンセプト」、「育成方針の反省と一貫指導コンセプトの確立」と概念化された(表5)。2008年から2012年の5年間では、「10歳以下での試合形式」、「ゲームを通した初心者指導」、「規定(義務化)された試合形式の実践への適用」、「Württemberg州での活動内容の紹介」と概念化された(表6)。2013年から2018年の6年間では、「子どもが楽しめる多面的な練習」、「練習ドリルの紹介」、「ゴール方向へ攻める動き」、「空いているスペースを利用した攻撃」と概念化された(表7)。

(2) 日本の歴史的変遷に関する結果

①1988年から1992年

1988年から1992年の5年間の記事内容は、12のサブグラフに分類された(図9)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「松」であつた(表8)。引用文には、「松ヤニを使用すること…を小学生に管理させることは困難」、「…松ヤニを使用しない…」などがあつた。このことから、このサブグラフを「小学生年代における松ヤニ使用の取りやめ」と概念化した。

2 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「技術」であった。引用文には、「ボールを片手で扱えることにより技術は…進歩する」、「技術向上を考えて…各国のボールを手にとって比較検討」などがあった。このことから、このサブグラフを「攻撃における技術力向上を目指した取り組み」と概念化した。

3 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「パス」であった。引用文には、「一連の動きがスムーズに行われることにより、良いパスが完成」、「一連の動きの修得（原文ママ）が…パス技術を…高めていく」などがあった。このことから、このサブグラフを「パス動作」と概念化した。

4 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ボール」であった。引用文には、「ひじが肩より下がらないようなポジションにボールを引き上げる」、「打点の高いシュート」などがあった。このことから、このサブグラフを「打点の高いシュート」と概念化した。

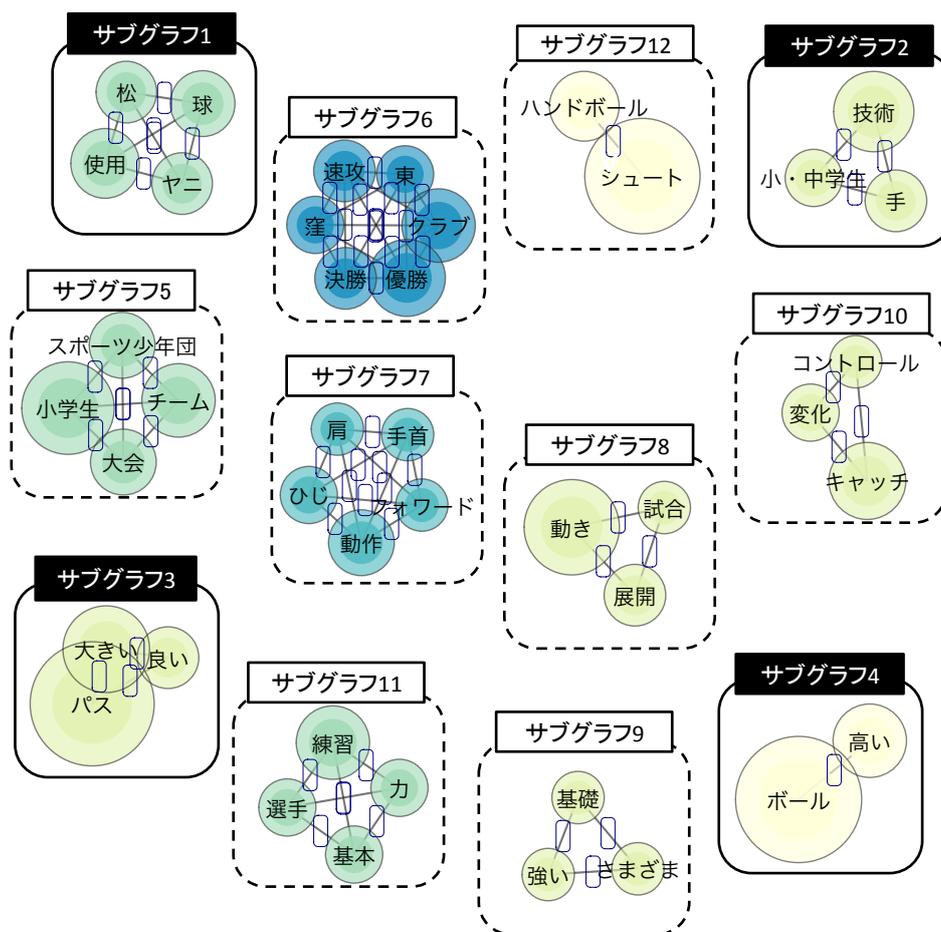


図9 日本の1988年から1992年における共起ネットワーク

5つ目以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「小学生」、「優勝」、「動作」、「動き」、「基礎」、「キャッチ」、「練習」、「シュート」であったが、これらに関して意味のある解釈ができなかった。

表8 日本の1988年から1992年のサブグラフにおける引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	松	ヤニ	松ヤニを使用することによる衣服、手の汚れを小学生に管理させることは困難である。	小学生年代における松ヤニ使用の取りやめ
			アジア、ヨーロッパ事情を含めて松ヤニを使用しない方向で決定した。	
			松ヤニはボールが軽量2号球から1号球に変われば、ボール操作は今までよりもさらに容易になり、松ヤニの使用は不要になる。	
			外国では貼りボールの使用を禁止している。松ヤニの使用はあまりない。	
			小学生の松ヤニ使用について	
2	技術	手	ボールを片手で扱えることにより技術は大幅に進歩する。	攻撃における技術力向上を目指した取り組み
			小学生4～6年生の体格差による技術向上を考えて、ボールの大きさ、重さ、安全性、ボールの操作、親しみやすさ、材質などについて実際に各国のボールを手にとって比較検討した。現在使用している日本の軽量2号球を1号球に変更し、縫い皮ボールで天然皮革が良い。	
		小・中学校	韓国では、小・中学校それぞれのカリキュラムができており、徹底した一貫教育の技術指導を行っている。	
			小学生・中学生ハンドボール技術指導カリキュラム作成について	
3	パス	大きい	一連の動きがスムーズに行われることにより、良いパスが完成されると言える。特に初心者には、この一連の動きの修熟度(原文ママ)を見ながらアドバイスを加え、大きく分けた四つの動きの修正を行う必要がある。	パス動作
			手首はこのとき、投げる方向に返すようにするので、この一連の動きの修得(原文ママ)がその後に選手のパス技術を大きく高めていくと思われる。	
			高いポジションは、パスの延長としてシュートがあると考えると、変化の幅を大きくとれる。高いところへの引き上げが重要であると考えられる。	
			ショルダーパスの延長として考えると、キャッチ、ティクバック、フォワードスイング、フォロースルーという一連の動作がスムーズに行なわれていくことは当然であるが、それぞれの部分でシュートの動作を示した1～4にあるように、柔らかいキャッチ、素早く、高い位置でのティクバック、からだのねじりの返しを十分に利用し、ひじや手首のきいたしなやかなフォワードスイング、大きくゆっくりとしたフォロースルーという過程を通してシュートが完成されると考える。	
			網津も後半の反撃は素晴らしく、早いパスのつながりで全員の動きもリズムに乗って追いかけたが、前半の点差の失点を取り返すことができず、大きな傷口となり惨敗した。	
4	ボール	高い	ひじが肩より下がらないようなポジションにボールを引き上げる。高いポジションは、パスの延長としてシュートがあると考えると、変化の幅を大きくとれる。高いところへの引き上げが重要であると考えられる。	打点の高いシュート
			ボールをしっかりのにぎることのできる者は、写真のように上からボールをにぎり、それを振り出すと、コントロールの良い、打点の高いシュートが期待できる。	
			ボールを片手で扱えることにより技術は大幅に進歩する。(ラテラルパス、フックパス、ジャンプカアアップ、高い打点からシュートが可能など)	

②1993年から1997年

1993年から1997年の5年間の記事内容は、7つのサブグラフに分類された(図10)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「スポーツ少年団」であった(表9)。

引用文には、「決勝戦には…スポーツ少年団を安定した強さで連破」、「決勝トーナメントに進出したのは…スポーツ少年団…の 8 チーム」などがあった。このことから、このサブグラフを「大会成績」と概念化した。

2 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「子供」であった。引用文には、「デンマークでは…スキルテストで…子供たちは練習してできるようになれば指導者に見てもら…う」、「子供たちは…一人一人練習して…より高いレベルの技術を目指すことが可能」などがあった。このことから、このサブグラフを「海外における自主練習ドリルの紹介」と概念化した。

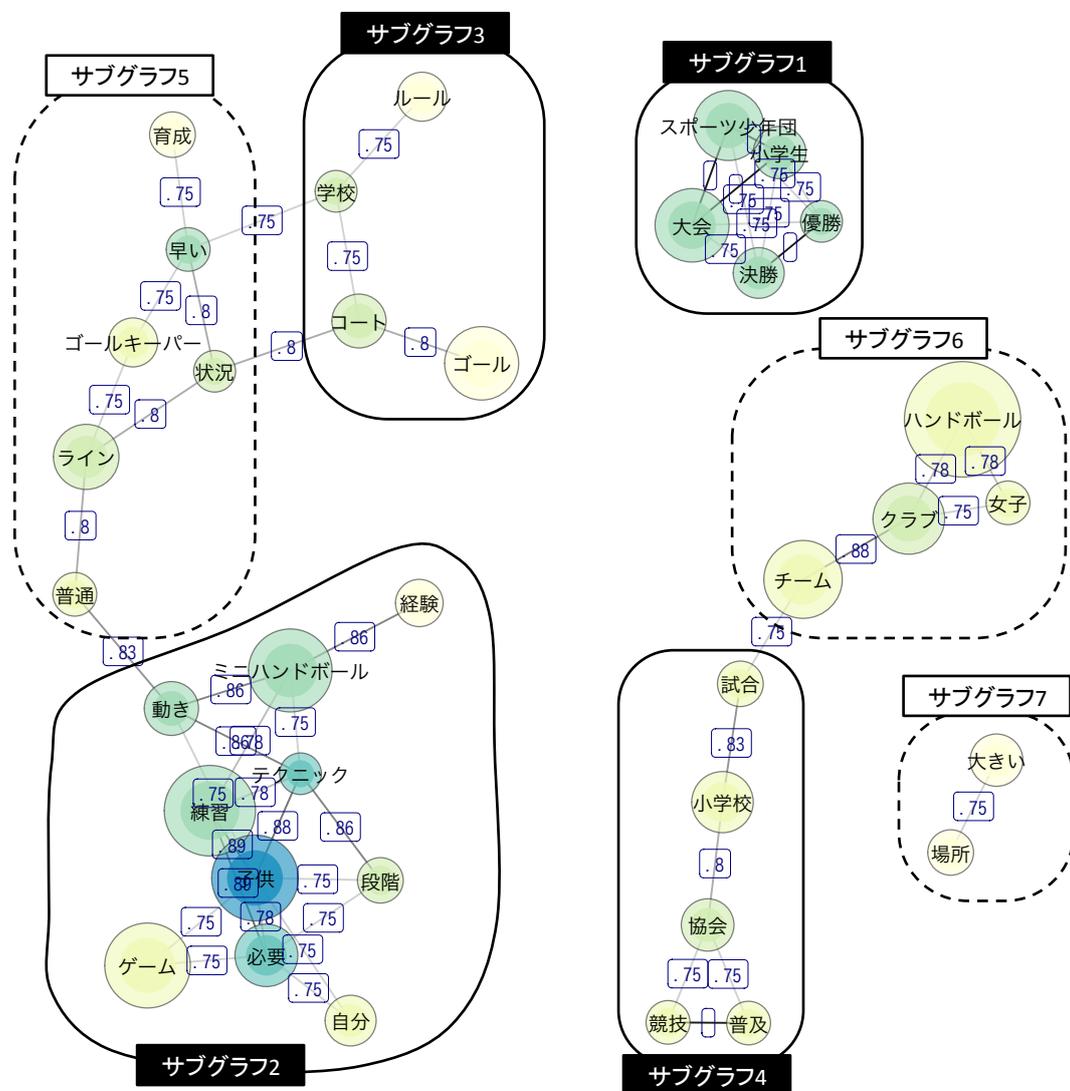


図10 日本の1993年から1997年における共起ネットワーク

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「コート」であった(表10)。引用文には、「ハンドボールコートのサイドラインを、ミニハンドボールのゴールラインとして使う場合」、「ミニハンドボールの…場合、コートの大きさ…等は…世界的な共通の課題」などがあった。このことから、このサブグラフを「ミニハンドボール^(注4)の概要」と概念化した。

4つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「協会」であった。引用文には、「各都道府県協会組織をベースにした普及事業」、「各都道府県協会にハンドボールスポーツ少年団の誕生が…普及強化方針は本事業の主要なテーマ」などがあった。このことから、このサブグラフを「各都道府県が担う小学生ハンドボールの普及課題」と概念化した。

5つ目の以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「早い」、「クラブ」、「大

表9 日本の1993年から1997年のサブグラフにおける引用文とその概念化①

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	スポーツ少年団	決勝	決勝戦には長崎選抜、窪スポーツ少年団を安定した強さで連破し、2年連続優勝を狙う当山小学校が進出。 決勝トーナメントに進出したのは、宮城小学校スポーツクラブ(沖縄県)、花高クラブ(長崎県)、中央北HC(熊本県)、窪スポーツ少年団ハンドボール部(富山県)、田辺東小学校(京都府)、日知屋東小ハンドボール部(宮崎県)、スポーツ少年団守谷クラブ(茨城県)、明野北ハンドボール少年団(大分県)の8チームで、その内5チームが九州勢で、九州のレベルの高さがうかがえる。 網津小ハンドボール部(熊本県)、舞鶴ハンドボールスポーツ少年団(大分県)、宮城小学校スポーツ(沖縄県)、田辺東小学校(京都府)、日知屋東小ハンドボール部(宮崎県)、仏生寺スポーツ少年団(富山県)の6チームが決勝トーナメントに進出。 決勝戦は、3年連続決勝戦進出の仏生寺スポーツと今回初出場の舞鶴ハンドボールスポーツ少年団との対決となったが、2人のエース(1人は体格・技術クラブ、共中学生級)を持つ舞鶴ハンドボールスポーツ少年団が、攻守において洗練されたプレーを随所に発揮し、危なげない戦いを展開し初優勝を飾った。	大会成績
		優勝	女子の部については全国大会常連チーム、仏生寺スポーツ少年団と塩山スポーツ少年団が順当に勝ち進み、仏生寺スポーツ少年団が第6回小学生ハンドボール大会準優勝の力をまざまざと見せつけ初代クイーンに輝いた。	
2	子供	練習	デンマークでは個人の技術のレベルの判定をするための3段階評価のテストを作成している。銅メダル、銀メダル、金メダルというように評価し、パス、フェイント、シュートなどのスキルテストである。子供たちは練習してできるようになれば指導者に見てもらい、全部合格し終了すればそこにサインをもらう。 子供たちは自慢げに親にそれを見せる。このように自分一人一人て練習して達成すればより高いレベルの技術を目指すことが可能となる。 子供達が自然にフェイントをしようとした時には、それを利用して、その子供達と一緒に練習してみると良い。 子供から大人までの一貫教育について(指導委員会)lund氏の所属しているクラブの35チームのプランである。このような練習のマニュアルを作成し、年齢に応じてそれぞれのメニューができ上がっている。 子供達をボールとその動きに慣れさせるために、準備された段階に応じた状況の練習から始める。	海外における自主練習ドリルの紹介

表10 日本の1993年から1997年のサブグラフにおける引用文とその概念化②

3	コート	ゴール	大きなハンドボールコートのサイドラインを、ミニハンドボールのゴールラインとして使う場合には、1つの問題が生じる。	ミニハンドボールの概要
			ミニハンドボールの5～8、9歳の子供達を対象にした場合、コートの大きさ、ゴールエリアの大きさ、ゴールポストの大きさ、ボールの大きさ(日本は1号球に変更)等は子供達の世界的な共通の課題であり、指導者協議の場が必要であると思われます。	
			試合コートの大きさ、選手の数、彼らの年齢、得点、ゴールの大きさ、ボールの大きさ、重さなどは相互にすべて関連しあっていないなければならない	
			プレイは、センタースポット(その名の通りプレイ場所の中央)から始まり、サイドラインの上やゴールラインの後ろなどの最もふさわしいところが、補欠選手や競技役員のために設けられた場所である。一連の長い経験と深い研究が、ボールの大きさや重さや表面のコートに生かされている	
			プレイヤーを二つのグループに分け、それぞれが半分のコートにつく。一方のチームがボールを持ち、どうやってボールをゴールに入れるか。	
4	協会	普及	各都道府県協会組織をベースにした普及事業に対する認識と理解を得て、協会組織で機能した協力が無いと行きづまりは早い。	各都道府県が担う小学生ハンドボールの普及課題
			各都道府県協会にハンドボールスポーツ少年団の誕生が頂点強化を目指す普及強化方針は本事業の主要なテーマでもある。	
		各都道府県協会理事長を中心に各行政、民間機関とのタイアップしたアプローチを如何にコンタクトすればよいのか、その調整が小さくても多くの「スポーツ組織努力」を結集するエネルギーの生産は欠かすことができない資源であり、JOCジュニアオリンピックカップ大会との一貫した普及対策事業として一石を投じる課題といえよう。		
競技	日本中体連ハンドボール部が平成5年度から日本協会の加盟が承認されたことから、連動する普及事業として小学生育成事業は重点施策となってきた。			
			このような一貫性指導の不備な点を社会体育領域のカテゴリーでハンドボールスポーツ少年団育成は各都道府県協会に課せられた急務であり、競技力向上へつなぐ大事な架け橋である。	

きい」であったが、これらに関して意味のある解釈ができなかった。

③1998年から2002年

1998年から2002年の5年間の記事内容は、8つのサブグラフに分類された(図11)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「NTS」であった(表11)。引用文には、「ナショナルトレーニングシステム(NTS)の新設実施」、「…NTS)を新設」などがあつた。このことから、このサブグラフを「NTS(ナショナルトレーニングシステム)の開始」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ハンドボール」であった。引用文には、「初めてハンドボールに接する子ども達に、身体を動かす楽しさ・礼儀…を…指導」、「指導方針…は…ハンドボールの技術向上だけではなく、『人に優しく、何事にも積極的に取り組む、集中力がつく』…ように育成」などがあつた。このことから、このサブグラフを「実践現場における様々な指導方針の紹介」と概念化した。

表11 日本の1998年から2002年のサブグラフにおける引用文とその概念化

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	NTS	実施	ナショナルトレーニングシステム(NTS)の新設実施について	NTS(ナショナルトレーニングシステム)の開始
			日本ハンドボール協会はナショナルトレーニングシステム(以下NTS)を新設し、若年層からナショナルチームまでの一貫指導を実施します。	
			NTS2001実施にあたって	
			NTSナショナルトレーニング実施結果について(報告)	
			本年はブロックトレーニングから各都道府県でのNTSトレーニング実施を模索していただくように、その展開を視野に入れた取り組みをしていただければ幸いです。	
2	ハンドボール	指導	小学校で初めてハンドボールに接する子ども達に、身体を動かす楽しさ・礼儀・チームワークの大切さを、主幹とし特に力を入れ指導しています。	実践現場における様々な指導方針の紹介
			指導方針としては、ハンドボールの技術向上だけでなく、「人に優しく、何事にも積極的に取り組む、集中力がつく」子供に成長するように育成しております。	
			世界の強豪国は、体力・技術・戦術に長けているが、それは、若年層時代いかに「質の高い」指導を受けたかの証である。日本のハンドボールの課題は、どんな選手でも、誰でもできるような事、簡単にできるであろう事、つまりハンドボールの「基本的な技術・戦術」の完成度である。	
			以上の指導ポイントを踏まえ、NTSを展開します。発育発達に合った最適なトレーニングを行い、将来世界で活躍する人材をハンドボール界全体で育成していきましょう。	
			強化指導を実施していくためにハンドボール競技としての技術・戦術の体系を連載します。	
3	必要	プレー	戦術的な基本姿勢としても、個々のプレーヤーが、以上に上げたような「ボールを持たないときの工夫」「ボールの継続性」を常に意識しながらトレーニングに取り組む必要があります。そうすることにより、常にボールが無いときに自分のプレープランを準備することや、次のプレーヤーがプレーしやすい意図的なパスをすることが習慣化されます。	攻撃における戦術力
			個人の状況判断による独自のプレーが、チームとしての攻撃の新しい展開を生んでいくことが必要となるでしょう。	
			例えば、フェイント動作の際にバランスを保持する、あるいはディフェンスの妨害に対して素早くバランスを回復するには、ハンドボールの専門能力や筋力が必要です。コーディネーション能力の中でも複数が組み合わせたり、様々なプレーを作り上げています。	
			例えば、韓国はポジションを固定したプレーで横方向への攻撃(ラテラルパスなどの積極的使用)の継続を図ることでスピードと継続性を兼ね備えた攻撃を長年に渡って行い、世界で成功を収めました。もちろん、このプレーの実現には、フェイント力を絶対的につける事や、ジュニア期から同じ戦術的解釈が出来るように育成していく必要があります。	
			ボールが無いと得点できませんからボールを持つてのプレーが工夫される必要性は当然あります。	
4	能力	向上	コーディネーショントレーニングとは、身体の神経-筋の運動性を高め、身体をコントロールする能力を向上させようとするトレーニングです。	基礎的な運動能力の向上
			技術指導は、基本的な運動能力・体力の向上を第一とし必要最低限にとどめるようにしています。	
		基本	NTS2002-コートプレーヤー編は基礎戦術能力の向上を目指し、トレーニングをプログラムいたしました。こんな事を考えながらオフェンス部門を構成してみました。	
			2000年指導ポイントは「基本技術の向上とコーディネーション能力アップ」です。技術指導は、基本的な運動能力・体力の向上を第一とし必要最低限にとどめるようにしています。例えば、3年生時期には、シュートもステップシュートの指導にとどめ地肩づくりをします。	

5つ目の以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「運動」、「競技」、「シュート」、「男子」であったが、これらに関して意味のある解釈ができなかった。

④2003年から2007年

2003年から2007年の5年間の記事内容は、7つのサブグラフに分類された（図12）。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「トレーニング」であった（表12）。引用文には、「『課題克服型トレーニング』を重視」、「NTSのトレーニング内容は…課題を抽出し、それを克服するための基本トレーニング」などがあった。このことから、このサブグラフを「NTSにおける課題克服型トレーニング」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「指導」であった。引用文には、「一貫した指導理念と指導方法に基づいて競技者を育成強化していくという考え方…が大事」、

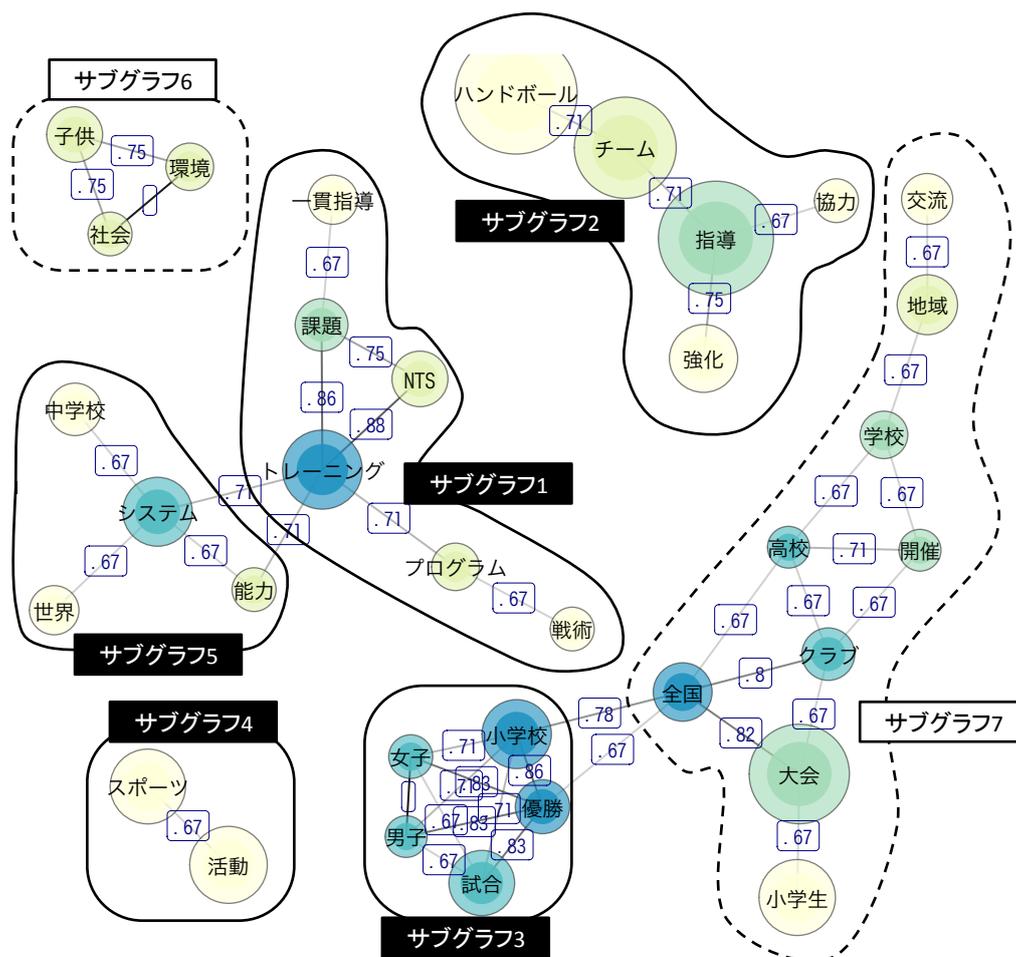


図12 日本の2003年から2007年における共起ネットワーク

「一貫指導を進めるためには…指導者の方にも…参加していただかなければなりません」
 などがあつた。このことから、このサブグラフを「一貫指導理念の重要性」と概念化した。

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「小学校」であつた。引用文には、「…
 小学校…が…優勝」,「小学校の全国大会優勝は、男女で13回」などがあつた。このことか
 ら、このサブグラフを「大会成績」と概念化した。

4つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「スポーツ」であつた(表13)。引用文
 には、「スポーツ活動はもちろんのこと、地域交流活動にも力を入れていきたい」,『「…ハ
 ンドボールを中心としたスポーツライフ』を活動目標として掲げれば行政の施策とタイア

表12 日本の2003年から2007年のサブグラフにおける引用文とその概念化①

サブ グラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の 概念化
1	トレー ニング	課題	今回のトレーニングのテーマは、「目指せファンタジスタ!」とし、昨年に引き 続いてこのテーマを設定し、「課題克服型トレーニング」を重視しています。 NTSのトレーニング内容は一貫指導を念頭にしてチーム戦術を中心に指導 するのではなく課題を抽出し、それを克服するための基本トレーニング中心 にプログラムを作成しています。	NTSにおけ る課題克服 型トレーニ グ
			NTS2003ブロックトレーニング強化指導DVDについて 学生時代やこれまでの経験から、ハンドボールの専門家として日々の指導に 当たっておられる保護者の方々には、強化部が主導になってNTSトレーニ グの内容を講習会等で伝達しています。	
	課題	NTSは若い世代の為の、発掘育成システムです。そして、各カテゴリーの チームを作るためのものではなく、普遍的課題克服に向けて『個を育成』す ることが使命です。		
2	指導	強化	ジュニア期からトップまであるいは競技を終わった後のセカンドキャリアまで トータルに捉えた、一貫した指導理念と指導方法に基づいて競技者を育成強 化していくという考え方に発想を転換していくことが大事だということに気がつ くわけです。	一貫指導 理念の 重要性
			いままでの強化合宿というのは競技者たちだけ集めて行っていました。一 貫指導を進めるためには、その競技者を育てている指導者の方にも一緒に 参加していただかなければなりません。	
		チーム	従来の強化指導教本は、教本とVTRといったものが主流でしたが、DVD編集 する事で教本と動画を同時にまた瞬時に、選択でき、大変見易くできておりま す。 教化・普及を兼ねた指導DVDを作成し、各チーム指導者に配布すること によって、基礎部分の練習法の統一や新入部員に対する動機付けに役立てて もらう取り組みも行っています。 特に少年チームを指導する際には、鷹の目(そのプレーヤーの生涯を見通し た視点)、蟻の目(年間の目標を達成する視点)の二面性が必要です。	
3	小学校	優勝	神森小学校(沖縄県浦添市)が男女とも優勝	大会成績
			小学校の全国大会優勝は、男女で13回の実績がある。	
			最近では、今年の神森小のアベック優勝を含め6ヶ年連続日本一に輝いてお り、すべて浦添市内の小学校チームである。	
			日本リーグで活躍するホンダ熊本・オムロンを頂点として、高校、中学校、小 学校が一連の指導体制のもと、全国大会優勝や入賞目指して一丸となり努 力を積み重ね頑張っているところであり、 今年度においては7月に京都で開催された第18回全国小学校ハンドボール 大会において、男子の中央小学校が優勝、女子の玉名町小学校が準優勝し ています。	

表13 日本の2003年から2007年のサブグラフにおける引用文とその概念化②

4	スポーツ	活動	<p>今後は、スポーツ少年団の活性化と育成の原理に基づき、「自分たちの町は、自分たちでつくる」「自分たちの子どもは、自分たちで育てる」「自分たちのスポーツは、自分たちで楽しむ」の3項目を柱に「子どもたちの心とからだをスポーツ活動を通じて、健全育成する」を理念としているスポーツ少年団の存在意識を持って、スポーツ活動はもちろんのこと、地域交流活動にも力を入れていきたいと思っています。</p>	ハンドボールチームの活動環境
			<p>県及び地域のハンドボール協会が先頭となって「少年チーム活性化・ハンドボールを中心としたスポーツライフ」を活動目標として掲げれば行政の施策とタイアップして効果的な活動が可能です。</p>	
			<p>スポーツ教育の具体的活動事例報告</p>	
			<p>どこのハンドボール部にも『父母会』と呼ばれる保護者会が必ず存在し、日々の練習だけでなく運営面においても子供達に対し強力なバックアップを行うシステムが整っています。ややもすれば1人の指導者だけで、日々の指導や資金調達も含めた部活動運営面、子供達への諸連絡から試合会場への送り迎えまで、丸抱えて四苦八苦されていることがある現在の学校指導現場において、このシステムは大変有効な方法であり、これからの学校スポーツ部活動を考える上でも非常に示唆に富む取り組み方法ではないかと思えます。</p>	
5	システム	世界	<p>2000年のシステム発足以来、世界に通用する『個の育成』を念頭に展開してきました。</p>	一貫指導システムの重要性
			<p>この事態を改善するには、世界で勝つためにはどうするかというようなベクトルを、指導者、競技者が同じ方向に向いていくためのシステムが必要になります。</p>	
			<p>一貫指導システムの基本コンセプトに関しては、まず世界各国が競技水準を上げている現状があります。</p>	
		<p>一貫指導システムを簡単に図式化するとこのようになります。発掘の下に小さく「地域スポーツの土壌充実」とありますが、ここが一番大切だと思うんです。例えば中学校には卓球部がないから他の部活に入るというケースはたくさんあるのではないのでしょうか。</p>		
能力	<p>このように以前は、子供の能力がさまざまな環境で自然に育成されてきたわけだが、現在はそういった環境が非常に少なくなっている。しかしこれとは反対に、子供体操クラブ・スイミングスクール・町の道場(昔からあった社会スポーツ)といったシステムやトレーニング方法を確立した取り組みが始まってきた。</p>			

ップして効果的な活動が可能」などがあった。このことから、このサブグラフを「ハンドボールチームの活動環境」と概念化した。

5つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「システム」であった。引用文には、「2000年のシステム発足以来、世界に通用する『個の育成』を念頭に展開」、「世界で勝つために…指導者、競技者が同じ方向に向いていくためのシステムが必要」などがあった。このことから、このサブグラフを「一貫指導システムの重要性」と概念化した。

6つ目の以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「子供」、「全国」であったが、これらに関して意味のある解釈ができなかった。

⑤2008年から2012年

2008年から2012年の5年間の記事内容は、14つのサブグラフに分類された(図13)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「各県」であった(表 14)。引用文には、「東海ブロックの場合…ハンドボール経験値が各県で開きがあり…」,「各県 3 名枠の選手では, ゲームなど…を実施するには支障をきたす」などがあった。このことから, このサブグラフを「各県・ブロックにおける NTS 活動報告」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「トレーニング」であった。引用文には、「関東ブロックトレーニングでは…270 名…で行われました」,「NTS ブロックトレーニングは持ち回りで…開催」などがあった。このことから, このサブグラフを「各ブロックにおける NTS 活動報告」と概念化した。

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ディフェンス」であった。引用文には、「ディフェンスの間を鋭く突く練習」,「積極的なディフェンス, 1 対 1 を積極的に抜きに行くオフェンスを実践」などがあった。このことから, このサブグラフを「攻撃および防御

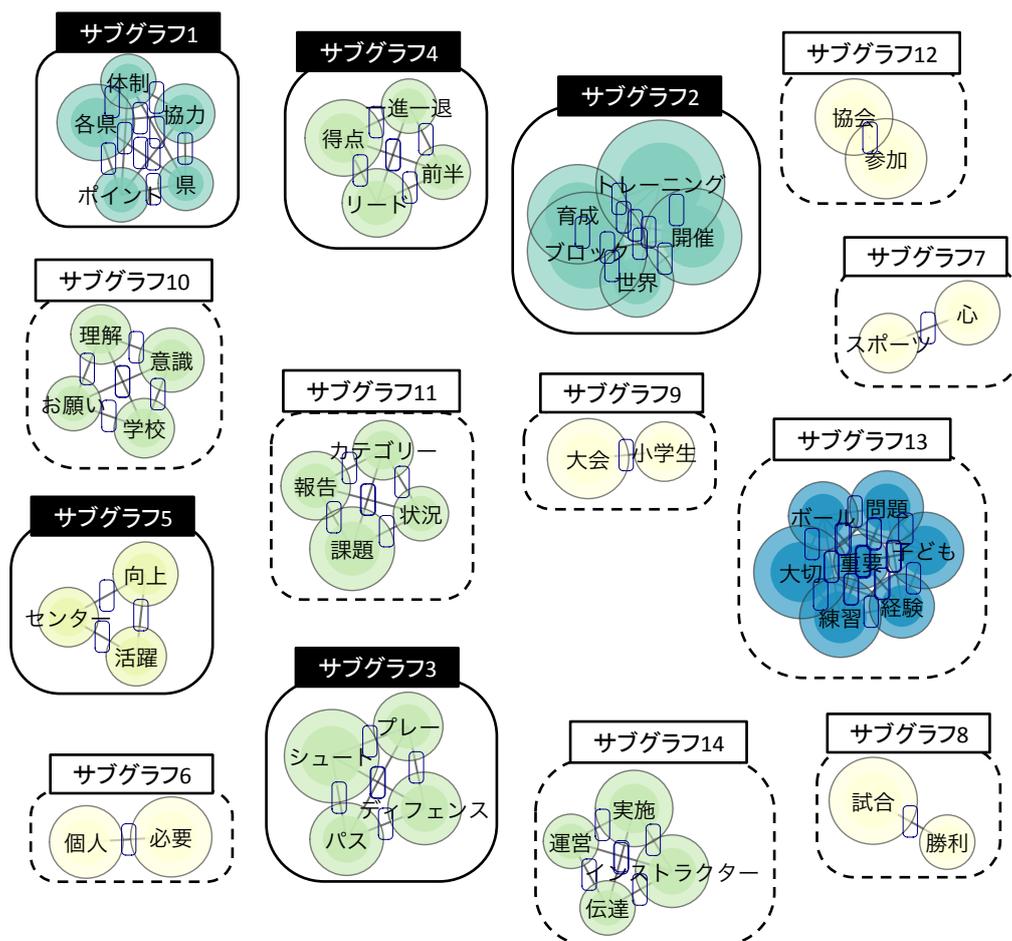


図13 日本の2008年から2012年における共起ネットワーク

に関するプレー方法」と概念化した。

4つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「得点」であった(表15)。引用文には、「連続得点を止めることができず」、「3連続得点」などがあった。このことから、このサブグラフを「戦評」と概念化した。

5つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「活躍」であった。引用文には、『NTSセンタートレーニング2007』の…トレーニングメニューを紹介し…世界で活躍できる…日

表14 日本の2008年から2012年のサブグラフにおける引用文とその概念化①

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	各県	県	<p>東海ブロックの場合、小中でのハンドボール経験値が各県で開きがあり、個人戦術が乏しい県からしっかりと身に付いている県と分かれているのが現状である。</p> <p>四県のため、各県3名枠の選手では、ゲームなど集団でのトレーニングを実施するには支障をきたすので、参加人数を各県4名として実施しました。</p> <p>今回の研修の中で色々なポイントを示されたが、経験値に差があるので、それぞれの県またはチームで今一度重要となるポイントを整理し、継続して指導していきたい。また、選手のみならず、各県の指導者に対してもしっかりと伝達していくことが大切である。</p> <p>また、NTSへの参加選手の輩出チームが県によっては特定化される傾向にあり、NTSの方針なり運営方法が、一部の関係者のみに限られ、それ以外の者に十分に理解されていないのが現状である。さらには各県において伝達講習会等を確実に実施していただき、NTSの情報が全チーム、関係者に速やかに浸透することを願う。</p>	各県・各ブロックにおけるNTS活動報告
		体制	2011年度より「NTS四国ブロックトレーニング」(実施要項)を作成し、組織化を図るとともに、NTS委員の各役割を明確化し、ブロックから各県へNTSの組織や意義、一貫指導内容の伝達と一貫指導体制の構築ができるように努力しています。	
2	トレーニング	ブロック	2009NTSブロックトレーニング(関東)	各ブロックにおけるNTS活動報告
			8月29日から開催の関東ブロックトレーニングでは、参加者側が小中高・男女156名と指導者93名、主催者側のインストラクター・役員など20名余と総勢270名規模で行われました。	
			全国9ブロックの推薦者が絞り込まれ、正月明けにはセンタートレーニング(中学・高校生各30名を予定)が開催されます。	
			NTSブロックトレーニング報告(北海道)	
初期のNTSブロックトレーニングは持ち回りで、福島県石川町、秋田県湯沢市等で開催されました。				
3	ディフェンス	パス	<p>ひたすらボールを回し、ディフェンスの間を鋭く突く練習を徹底して行いました。パスをつなぐことはハンドボールの魅力であり、お互いの呼吸が合わないとながりがりません。</p> <p>勝ち残るチームのほとんどが、NTSが提案している、積極的なディフェンス、1対1を積極的に抜きに行くオフェンスを実践していました。なによりも素早いパスキャッチやシュートにミスが少なく、基礎基本がしっかりと身につけていることに感服しました。</p>	攻撃および防御に関するプレー方法
		プレー	<p>数的不利な状況でのディフェンスの対応力を重要視しており、ボールと逆のディフェンスがどれだけ連動できるかを意識したメニューであり、これはどのチーム戦術においても大切なスキルである。クロスアタックの時に相手のパスナー、バックプレーヤー、サイドを観察する視野の広さと駆け引きでプレーを限定させる位置取り等、積極的に取り組ませ、継続していく必要があると感じる。</p>	

表15 日本の2008年から2012年のサブグラフにおける引用文とその概念化②

4	得点	リード	平針南小も5分過ぎにようやく1点を返すが、以後も日岡スポーツ少年団の連続得点を止めることができず、12対5と日岡スポーツ少年団が大きくリードを奪って折り返す。	戦評
			ここから窪スポーツ少年団が反撃、5分から8分30秒までに4点を連取、逆に1点のリードを奪う。その後再び一進一退となったが、終盤、10分過ぎから3連続得点をあげた安居ブルーサンダースが粘る窪スポーツ少年団を降り切り(原文ママ)、18対16で優勝を飾った。	
			先制したのは塩山で、1分過ぎ9番・日原、3分過ぎには3番・遠藤の得点で2対0とリードする。	
			前半立ち上がり、平針南小が7番・関、2番服部の連続得点でリードを奪う。	
			後半立ち上がりも仏生寺ペースで、着々と得点を重ね、7分過ぎには13対7と大きくリードを広げた。	
5	活躍	センター	1月に開催されました「NTSセンタートレーニング2007」のトレーニングスケジュールおよびトレーニングメニューを紹介しました。今号においては、世界で活躍できる可能性を持った日本代表プレーヤーを育成するために必要であることを、NTSシミュレーションにおいてナショナルコーチングスタッフがディスカッションし、NTS2007トレーニングメニュー選定に至った基本的なコンセプトを報告します。	育成年代の選手が将来世界で活躍することを目指したNTS活動
		向上	スタイルに関係なくハンドボールにおける基本的な部分であるパスキャッチなどは、「ハンドボールベーシック」として押えながら、NTSセンターでは日本人が世界で活躍していくためのベーシックではない部分を「ジャパニーズスタンダード」として優先的に強調していく。	

本代表プレーヤーを育成」、「NTSセンターでは日本人が世界で活躍していくため…」などがあつた。このことから、このサブグラフを「育成年代の選手が将来世界で活躍することを目指したNTS活動」と概念化した。

6つ目の以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「必要」、「心」、「試合」、「大会」、「意識」、「課題」、「参加」、「大切」、「インストラクター」であつたが、これらに関して意味のある解釈ができなかつた。

⑥2013年から2018年

2013年から2018年の6年間の記事内容は、9つのサブグラフに分類された(図14)。

1つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「ディフェンス」であつた(表16)。引用文には、「得点後の素早いボール展開とハンドボールコート全面を使った幅広い攻撃、…積極的なディフェンスを目的としたこのゲーム様式」、「積極的なディフェンス、1対1を積極的に抜きに行くオフェンス」などがあつた。このことから、このサブグラフを「新ゲー

ム形式における積極的な防御とそれに対する攻撃」と概念化した。

2つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「課題」であった(表17)。引用文には、「指導者の育成など…課題は山積」、「指導者の育成には、まだ課題が残されています」などがあつた。このことから、このサブグラフを「指導者育成の課題」と概念化した。

3つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「内容」であつた。引用文には、「平成27年…Jクイックハンドボールと呼ばれる新ゲーム様式を導入した。具体的なゲーム様式変更の内容は…」、「競技規則の一部改訂が提案され…審判委員会では、提案の内容を受け…競技規則条文を定めた」などがあつた。このことから、このサブグラフを「新ゲーム様式(Jクイックハンドボール)の導入」と概念化した。

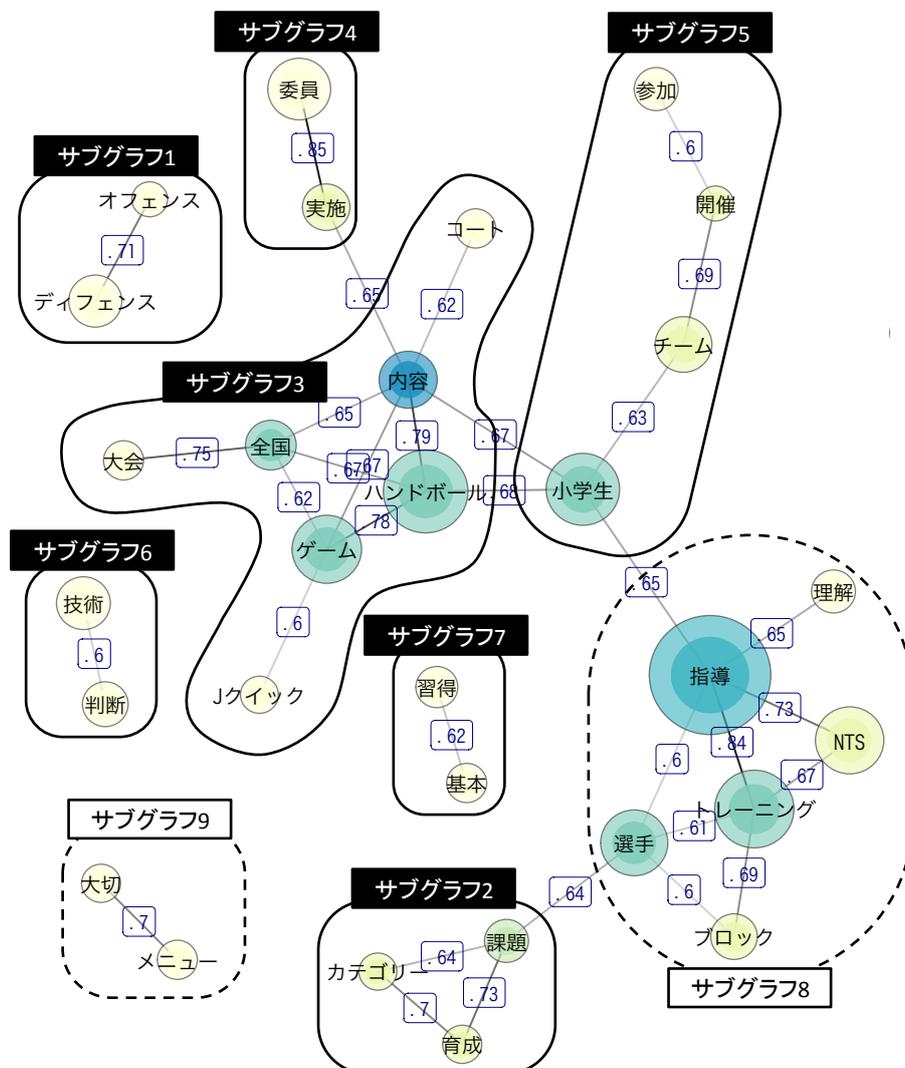


図14 日本の2013年から2018年における共起ネットワーク

4 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「委員」であった。引用文には、「日本協会内で、Jr 指導についての連携が強まって…指導委員会…が小学生委員会と連携」、「小学生委員が意見を集約、現状の問題点などを洗い出しました」などがあった。このことから、このサブグラフを「日本ハンドボール協会内での小学生専門委員会の活動」と概念化した。

5 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「小学生」であった（表 18）。引用文には、「今後小学生チームが向かうべき…方向性も示されました」、「小学生チームも…底辺が拡大」などがあった。このことから、このサブグラフを「小学生ハンドボールの普及および指導理念の提示」と概念化した。

6 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「技術」であった。引用文には、「ハンドボール特有の動きや判断力、それを駆使したパスワークとシュート技術」、「片手キャッチ等の基本技術の習得から正しい状況判断の実践」などがあった。このことから、このサブグラフを「攻撃における戦術力の向上および技術力の習得」と概念化した。

7 つ目のサブグラフの中で中心性の最も高い語は「習得」であった。引用文には、「基本動作習得の大切さ」、「技術の基礎・基本の習得」などがあった。このことから、このサブグラフを「基礎・基本技術の習得」と概念化した。

8 つ目の以降の残りのサブグラフにおいて、中心性の高い語は、「指導」、「メニュー」であったが、これらに関して意味のある解釈ができなかった。

表16 日本の2013年から2018年のサブグラフにおける引用文とその概念化①

サブグラフ	中心語	共起語	引用文	引用文の概念化
1	ディフェンス	オフェンス	<p>新ゲーム様式(Jクイックハンドボール)も2年目を迎えた結果、得点後の素早いボール展開とハンドボールコート全面を使った幅広い攻撃、コート全体を見渡す視野の広さ、オフェンスのプレーの芽摘み、ボールカットを狙った積極的なディフェンスを目的としたこのゲーム様式は、特に男子チームに浸透し、準決勝以上の試合はワクワクするようなゲーム展開が繰り返されました。</p> <p>開会式の前のU-12NTS講習会では、『Jクイックハンドボール』の趣旨をより理解していただくために、スローイングの基礎と激しいフットワーク、積極的なディフェンスとそれに対応したオフェンスについて研修を深めました。</p> <p>遊び感覚の中で、道具を使用しながら(コーン、ピブスなど)鬼ごっこをモデルとした、ディフェンス-オフェンスの間隔を身につけさせたり、腕の振りの間隔を身につけたり、グループで競争しながらのフットワークを取り入れるなど、誰もができるメニューを導入し、幼少期から柔軟性・体幹を習得することで、身体の軸が作られ色々な動作の発展性に繋がるようにしました。</p> <p>NTSのU-12講習会を開催し、今後小学生チームが向かうべきゲーム展開の方向性も示されました。積極的なディフェンス、1対1を積極的に抜きに行くオフェンス、速いゲーム展開、中でも素早く正確なパスキャッチやシュート。ディフェンスは、パスを予測し、オフェンスのキャッチのタイミングでアタックする動作を意識。</p>	新ゲーム形式における積極的な防御とそれに対する攻撃

表17 日本の2013年から2018年のサブグラフにおける引用文とその概念化②

2	課題	育成	<p>運営面ではプログラムの充実と、技術指導面では技術の伝達と指導者の育成など、取り組むべき課題は山積しています。各カテゴリーにより多くの指導者を派遣できれば、NTSへの理解と技術の伝達が進むとともに、所属チームに戻った後も指導が継続されるなど、さらなる発展につながる。</p> <p>選手個々の負担と指導者の育成には、まだ課題が残されています。</p> <p>また選手の発掘育成と同等に指導者の育成も重要課題であると思います。</p> <p>今後の課題としては、小・中・高の指導体制の一貫性をどのように持たせていくか、各カテゴリー別に噛み砕いた説明の必要性、指導者育成のための粘り強い取り組み、選手選考の在り方の工夫と検証、U-12におけるゴールキーパートレーニングの取扱いと小学生普及を兼ねた効果的な指導方法の検討があげられます。</p> <p>NTSの成果を上げるためには、運営面ではプログラムの充実と、技術指導面では技術の伝達と指導者の育成など、取り組むべき課題は山積しています。</p>	指導者育成の課題
3	内容	ハンドボール	<p>実技講習は、(公財)日本ハンドボール協会NTS内容策定メンバーU-12担当の濱野健一氏を講師にむかえ「ゴールデンエイジ期における基礎・基本的な動きづくりと状況判断」をコンセプトとして実施しました。</p> <p>1年間の実施を受け、小学生委員会より競技規則の一部改訂が提案された。(公財)日本ハンドボール協会審判委員会では、提案の内容を受け、小学生委員会と協議の結果、下記の通り競技規則条文を定めた。</p> <p>日本ハンドボール協会は、小学生段階の選手に、判断力と想像力に裏付けられた総合的機動力(トータルモビリティ)を習得させることをねらいとして、平成27年の全国小学生ハンドボール大会においてJクイックハンドボールと呼ばれる新ゲーム様式を導入した。具体的なゲーム様式変更の内容は、競技時間を前半15分のゲームを10分×3セットに変更すること、センターラインからのスローオフをゴールキーパーラインからのゴールキーパースローに変更すること、オープンディフェンスを推奨することであった。</p> <p>日本では、Jクイックハンドボールという競技規則に則って小学生の試合が行われています。子どもたちに将来どんなハンドボールをやってもらいたいのかという将来像を持った上で、目的に適した方法で練習を行うことがこの年代の選手にとってよりよい影響をもたらすと思います。競技規則とそのコンセプト、そして練習内容の全てが噛み合った時に、子どもたちがハンドボールを通してたくさんのことを学び、将来トップレベルで活躍するための経験を積むことができると思います。</p>	新ゲーム様式(Jクイックハンドボール)の導入
4	委員	ゲーム	<p>NTS内容検討委員会で、U-12の段階については普及、指導、強化の観点に立ち2004年より指導内容の検討を進めてきました。2012年に立ち上げた「U-12ゲーム検討委員会」では、少年期の子供たちがハンドボールの魅力を十分に味わいつつ「正しい習慣(Good Habit)」を身につけ、将来にわたって発展していくために、正確な基礎基本の技術の習得、正確で素早い判断力・多面的能力の養成、ハンドボールにおける広がりや奥行き感覚の養成、1対1の強さの養成を具現化できる「U-12ゲーム様式」の2年間試行をスタートさせました。</p> <p>今後は、「U-12ゲーム検討委員会」で2年間試行でのご意見を参考に、さらに細部を検討して本格実施案を決定、全国へ情宣を進め、27年度4月から完全実施の計画です。</p> <p>近年、NTSをはじめ日本協会内で、Jr指導についての連携が強まっています。指導委員会、技術委員会、NTS委員会、リーグ機構が小学生委員会と連携し、情報交流や講習会等を実施しています。</p> <p>研修会の最後は私が小学生専門委員長の立場で、小学生の現状についてお話しさせていただきました。今年度から始まったJクイックハンドボールの検証を筑波大学のご協力を得て実施し、その速報結果に対して小学生委員が意見を集約、現状の問題点などを洗い出しました。</p> <p>1年間の実施を受け、小学生委員会より競技規則の一部改訂が提案された。</p>	日本ハンドボール協会内での小学生専門委員会の活動

表18 日本の2013年から2018年のサブグラフにおける引用文とその概念化③

5	小学生	チーム	<p>参加都道府県は男子が35, 女子が34, 東北地方からの参加がなかったのが淋しいところですが, 全国各地の小学生チームがハンドボールを通して交流する姿は, 清々しいものがあります.</p> <p>今年も, 開会式の前にNTSのU-12講習会を開催し, 今後小学生チームが向かうべきゲーム展開の方向性も示されました.</p> <p>小学生チームもクラブチームを中心に底辺が拡大してきています. また, 技術指導委員やインストラクターも充実しており, 日本リーグ経験者が小中高各カテゴリーで指導できる体制も整っていることに加え, デモンストレーターには全日本選手を数多く輩出している湧永製菓の選手からの適切な指導・助言は参加選手達に分り易く伝わるばかりではなく, 夢を持たせる事にも繋がっており, 他ブロックにはない事ではないかと思えます.</p> <p>小学生チームの重要性については, 都道府県協会の会長・理事長さん方をはじめ多くの方々が認識しており, 具体的に力を入れて活動している都道府県も多くなってきています.</p> <p>都道府県小学生委員や全国すべての小学生チーム指導者との情報交流. このように, 小学生委員会では, 普及と指導の両面において活性化と活動内容の充実を図っております.</p>	小学生ハンドボールの普及および指導理念の提示
6	技術	判断	<p>Jr指導の大切さも想像に難くないと思います. なによりもハンドボール特有の動きや判断力, それを駆使したパスワークとシュート技術等は, そう簡単には身に付かないのでしょうか.</p> <p>受け身やドリブル, 片手キャッチ等の基本技術の習得から正しい状況判断の実践を行いました.</p> <p>状況に応じたパスを行うために, 腕の動き, 視野の確保, 片手パスキャッチなどについて, 実際の場面をつくり, 正確な判断やパス技術を意識させた. また, 動きの中で常に次のプレーを想定させることで, 視野を広くし, 攻撃の空間を確保できるような動きをすることを意識させた.</p> <p>ロールプレイング研修: 男子は大城氏, 女子は藤本氏とローランド氏によるコミュニケーションスキルアップや技術判断トレーニングなどを研修.</p> <p>これを踏まえてNTS2012では, 応用段階を中心とした「的確な観察と判断による動き」づくりを主眼に, 攻撃編, 防御編, 速攻編, ゴールキーパー編それぞれに設定し, コートプレーヤーについて2人~3人のコンビネーション技術を取り上げました.</p>	攻撃における戦術力の向上および技術力の習得
7	習得	基本	<p>最後にはラダーとボールを同時使用するなど, 頭で考えながら工夫されたフットワーク練習も紹介していただき, 基本動作習得の大切さを実践的に学ぶことが出来ました.</p> <p>現日本代表やアンダーカテゴリーで課題となっている技術の基礎・基本の習得, 技術の伝達, 指導者の資質向上を図るため, 指導内容策定委員会でそれぞれのカテゴリー別に内容を模索し, 次のように策定しました.</p> <p>それと同時にU-12, 16の基礎基本技術習得の徹底を図ることが喫緊の課題であるとの認識に立ち, 2012年には強化・指導・審判・小学生の各専門委員会のメンバーからなる「U-12ゲーム検討委員会」を立ち上げ, 正確な基礎基本の技術の習得, 正確で素早い判断力, 多面的能力の養成, ハンドボールにおける広がりや奥行き感覚の養成, 1対1の強さの養成を具現化するゲーム様式のあり方を検討しました.</p> <p>2012年に立ち上げた「U-12ゲーム検討委員会」では, 少年期の子供たちがハンドボールの魅力をも十分に味わいつつ「正しい習慣(Good Habit)」を身につけ, 将来にわたって発展していくために・正確な基礎基本の技術の習得・正確で素早い判断力・多面的能力の養成・ハンドボールにおける広がりや奥行き感覚の養成・1対1の強さの養成を具現化できる「U-12ゲーム様式」の2年間試行をスタートさせました.</p> <p>受け身やドリブル, 片手キャッチ等の基本技術の習得から正しい状況判断の実践を行いました.</p>	基礎・基本技術の習得

⑦日本の歴史的変遷に関する結果のまとめ

共起ネットワーク分析によって得られた結果から、それぞれの年代におけるサブグラフは以下のように概念化された。

1988年から1992年の5年間では、「小学生年代における松ヤニ使用の取りやめ」、「攻撃における技術力向上を目指した取り組み」、「パス動作」、「打点の高いシュート」と概念化された(表8)。1993年から1997年の5年間では、「大会成績」、「海外における自主練習ドリルの紹介」、「ミニハンドボールの概要」、「各都道府県が担う小学生ハンドボールの普及課題」と概念化された(表9, 表10)。1998年から2002年の5年間では、「NTS(ナショナルトレーニングシステム)の開始」、「実践現場における様々な指導方針の紹介」、「攻撃における戦術力」、「基礎的な運動能力の向上」と概念化された(表11)。2003年から2007年の5年間では、「NTSにおける課題克服型トレーニング」、「一貫指導理念の重要性」、「大会成績」、「ハンドボールチームの活動環境」、「一貫指導システムの重要性」と概念化された(表12, 表13)。2008年から2012年の5年間では、「各県・ブロックにおけるNTS活動報告」、「各ブロックにおけるNTS活動報告」、「攻撃および防御に関するプレー方法」、「戦評」、「育成年代の選手が将来世界で活躍することを目指したNTS活動」と概念化された(表14, 表15)。2013年から2018年の6年間では、「新ゲーム形式における積極的な防御とそれに対する攻撃」、「指導者育成の課題」、「新ゲーム様式(Jクイックハンドボール)の導入」、「日本ハンドボール協会内での小学生専門委員会の活動」、「小学生ハンドボールの普及および指導理念の提示」、「攻撃における戦術力の向上および技術力の習得」、「基礎・基本技術の習得」と概念化された(表16, 表17, 表18)。

4. 考察

(1) ドイツの歴史的変遷に関する考察

①ドイツにおける育成年代初期の選手育成の取り組みに関する変革プロセス

表19に、ドイツの育成年代初期における選手育成の取り組みを概念化して5年ごとにまとめたものを示した。これを概観すると、1988年からの5年間では、ゲーム能力の系統的かつ長期的な養成に関する理念を提示することによって「子どものハンドボール」の必要性を促し、1993年からの5年間では、遊びの中で積極的な防御とそれに対する攻撃を習得させることに、1998年からの5年間では、攻撃における個の育成に取り組んでいたと解釈できる。また、2003年からの5年間では、一貫指導体制を確立させ、2008年からの5年

間では、義務化した試合形式を実践に適用させ、2013年からの6年間では、楽しめる練習で攻撃力の育成に取り組んだと解釈できる。

Brand et al. (2009, p.36) は、2002年までに行われた育成年代初期における選手養成改革の実現のための講習会、練習ドリルなどの提示では実際の試合構造と練習は変わらなかったこと、そのため競技規則を変えることによって練習を変えるという考え方に方針を変え、2003年から育成年代の試合において特別な競技規則が導入されたと報告している。このことから、理念や価値観の提示では実践現場における選手養成の内容や方法が変わら

表19 ドイツの各年代でのまとめ

年代	引用文を元に概念化したサブグラフ	各年代での中心的なテーマ
1988 - 1992	子どもに適したボールの推奨 クラブで実践すべき新たな学習内容の提示 系統的なコンセプトの必要性 育成年代に適した練習内容 ゲーム能力の長期的な育成	・ゲーム能力の系統的、長期的育成に関する理念
1993 - 1997	1対1状況を個人で解決する防御能力の育成 遊びの中での育成 積極的な防御とそれに対する攻撃	・積極的な防御とそれに対する攻撃を遊びの中で練習させること
1998 - 2002	積極的または消極的な防御に対する攻撃 ゴール方向へボールを運ぶ意識 様々な大きさや種類のボールを用いた練習 2×3対3での試合形式のトレーニング 個の育成	・攻撃における個の育成
2003 - 2007	積極的な防御を規定するドイツハンドボール協会 一貫指導コンセプト 育成方針の反省と一貫指導コンセプトの確立	・一貫指導体制の確立
2008 - 2012	10歳以下での試合形式 ゲームを通じた初心者指導 規定(義務化)された試合形式の実践への適用 Württemberg州での活動内容の紹介	・試合形式の義務化とその適用
2013 - 2018	子どもが楽しめる多面的な練習 練習ドリルの紹介 ゴール方向へ攻める動き 空いているスペースを利用した攻撃	・楽しめる練習で攻撃力の育成

ず、実質的な効果をあげられないこと、強制的な競技規則変更によってその競技規則の下で勝つために選手が習得すべきプレーがトレーニングされることを示している。

球技の戦術は、指導者の持つゲーム観およびゲーム構想を背景に勝利に対して合目的的に発生する（會田，2015）。また、競技規則はゲームで許容するプレーを規定する（中川，2015，p.495）。さらに、積極的な防御（マンツーマン防御）によって、防御とそれに対する攻撃において個人が対峙し合うプレーが多いこと（中山・會田，2019）を考え合わせると、「積極的な防御（マンツーマン防御）」の義務化が、指導者の持つゲーム構想を個の育成へ方向付けたことを示していると考えられる。この意味においてドイツにおける育成年代初期の選手育成の取り組みは、全国の試合でマンツーマン防御が義務化された2003年が転換点であったと捉えられる。

②ドイツのハンドボールにおける育成年代初期の練習内容と方法

球技における選手育成を目指した練習では、国内外を問わずに戦術力を養成することが重要性を増してきている（會田，2012）。戦術力の養成では、動作そのものを志向してその習得や修正を目指すことと、対峙する選手と「対話」することを志向して動作に関しては前意識的に行えるようにすることの2つが求められている（會田，2012）。

ドイツの育成年代初期における練習の内容と方法については、「育成年代に適した練習内容」（1988～1992年）、「遊びの中での育成」（1993～1997年）、「様々なボールを用いた練習」、「試合形式のトレーニング」（1998～2002年）、「ゲームを通した初心者指導」（2008～2012年）、「子どもが楽しめる多面的な練習」（2013～2018年）と概念化された（表19）。

これらのことから、ドイツにおける育成年代初期の練習は、ドリル形式の練習によって技術力を養成し、ゲーム形式の練習によって戦術力を養成するという要素還元的な考えに基づいた練習（會田，2012）ではないことがわかる。むしろ、「試合形式」、「多面的」、「ゲームを通した」、「遊びの中で」が概念化のキーワードになっていることから、技術力と同時に戦術力も発揮しなければならない練習であり、練習で設定された状況の解決を選手が試みることで技術力と戦術力が統一されたゲーム能力の育成を目指していると捉えられる。

(2) 日本の歴史的変遷に関する考察

①日本における育成年代初期の選手育成の取り組みに関する変革プロセス

表20に、日本の育成年代初期における選手育成の取り組みを概念化して5年ごとにまと

めたものを示した。これを概観すると、1988年からの5年間では、育成年代初期における攻撃に関するプレー方法の説明、1993年からの5年間では、海外の育成年代初期における選手育成活動の紹介が行われていた。また1998年からの5年間では、個の育成を目指したNTSが新設、実施され、一貫指導の枠組みが作られた。その一方で、現場の指導者の持つ様々な指導方針が紹介されることによって、それぞれの指導者にあった指導方針の採用が推奨された。2003年からの5年間では、NTSにおける指導内容と一貫指導理念を提示することで、全国で統一された指導方針の採用が目指され、2008年からの5年間では、各ブロックでのNTS活動内容が報告、攻撃および防御のプレー方法が提示され、2013年からの6年間では、新しいゲーム形式の理念を提示することで一貫指導における育成年代初期で取り組むべき内容を明示したと解釈できる。

表20 日本の各年代でのまとめ

年代	引用文を元に概念化したサブグラフ	各年代での中心的なテーマ
1988 - 1992	小学生年代における松ヤニ使用の取りやめ 攻撃における技術力向上を目指した取り組み パス動作 打点の高いシュート	・攻撃に関するプレー方法
1993 - 1997	大会成績 海外における自主練習ドリルの紹介 ミニハンドボールの概要 各都道府県が担う小学生ハンドボールの普及課題	・海外の小学生年代における選手育成活動の紹介 ・都道府県単位の普及
1998 - 2002	NTS(ナショナルトレーニングシステム)の開始 実践現場における様々な指導方針の紹介 攻撃における戦術力 基礎的な運動能力の向上	・個の育成を目指したNTSの開始 ・様々な指導方針の紹介
2003 - 2007	NTSにおける課題克服型トレーニング 一貫指導理念の重要性 大会成績 ハンドボールチームの活動環境 一貫指導システムの重要性	・NTSの内容報告 ・一貫指導理念の重要性
2008 - 2012	各県・ブロックにおけるNTS活動報告 各ブロックにおけるNTS活動報告 攻撃および防御に関するプレー方法 戦評 育成年代の選手が将来世界で活躍することを目指したNTS活動	・NTSの活動報告 ・攻撃および防御のプレー方法
2013 - 2018	新ゲーム形式における積極的な防御とそれに対する攻撃 指導者育成の課題 新ゲーム様式(Jクイックハンドボール)の導入 日本ハンドボール協会内での小学生専門委員会の活動 小学生ハンドボールの普及および指導理念の提示 攻撃における戦術力の向上および技術力の習得 基礎・基本技術の習得	・小学生ハンドボールの普及 ・新ゲーム形式の理念の提示

育成年代初期の選手育成活動に携わる組織に着目すると、「都道府県単位の普及」（1993～1997年）、「各県・ブロックにおけるNTS活動」（2008～2012年）、「日本ハンドボール協会内での小学生専門委員会」（2013～2018年）と概念化されていることから、その組織は都道府県から各ブロック、そして日本ハンドボール協会内小学生専門委員会へと専門化されたと捉えられる。

育成対象者に着目すると、「パス」、「シュート」（1988～1992年）、「自主練習ドリル」（1993～1997年）、「戦術力」、「運動能力」（1998～2002年）、「プレー方法」（2008～2012年）が概念化されていることから、1988年から2012年では、育成対象は選手であると解釈できる。一方、「指導者育成の課題」（2013～2018年）が概念化されていることから、2013年以降は、指導者も育成対象と捉えられるようになったと理解できる。

これらのことから、育成年代初期における選手育成活動は、2002年から始まったNTSと共に組織化され、すでに17年の歴史があると捉えられそうではある。しかし、NTS指導教本において、育成年代初期を含む年齢カテゴリーは、U14または12歳から18歳に限られる（財団法人日本ハンドボール協会、2002）。その後、『ハンドボール強化指導教本NTS2009』においては、最も低い年齢カテゴリーとして小学校期が提示された（財団法人日本ハンドボール協会、2009）ものの、ここでは小学校1年生から6年生までを一つのカテゴリーとしている。このことは、ドイツ、デンマーク、ハンガリーの強豪国では、U6またはU8からU12まで2歳刻みのカテゴリーを設けていること（永野ほか、2017；ノイハウス、2016、p.6）を考え合わせると、NTSでは小学校期の6年間でさらに短い期間で刻んだ年齢カテゴリー、すなわち育成年代初期特有の年齢カテゴリーはないといえる。これらのことから、育成年代初期における組織的な選手育成活動は、日本ハンドボール協会内の小学生専門委員会の活動が本格化し、2015年の全国小学生ハンドボール大会において新ゲーム形式が導入されてからであると解釈した方が良いであろう。

②日本の育成年代初期における練習の内容と方法についての問題点

日本の育成年代初期において身につけるべき技術・戦術の内容は、1988年から順に「攻撃に関するプレー方法」（1988～1992年）、「攻撃における戦術力」（1998～2002年）、「攻撃および防御に関するプレー方法」（2008～2012年）、「攻撃における戦術力の向上および技術力の習得」（2013～2018年）、「基礎・基本技術の習得」（2013～2018年）と概念化された（表20）。近年、長期的視野に立った選手育成の初期の段階において、球技では、国内

外を問わず、個人の能力の向上が強調されている（永野ほか，2017；ネメシュ・會田，2012；西，2008）。本章の結果から、日本の育成年代初期のハンドボールにおいても「個の育成」が目指されており、その内容は攻撃および防御における技術力と戦術力の養成であったと推察される。

しかし、それらをどのように養成するのかについて、すなわち練習の方法については、『ハンドボール強化指導教本 NTS2009』において記述されてはいるものの、機関誌の過去 31 年間では中心的なテーマとなっていない。球技における個人の競技力は、ゲーム能力の前提として、戦術力、技術力、体力があり、それらを心的・知的能力が支えるという階層構造になっていると理解されている（會田，2019b, p.65）。これらの個別の要素は互いに影響を及ぼしあいながら全体として総合されているため、個別の要素だけを合理的にトレーニングする方法には問題がある（會田，2019b, p.66）。ドリル形式の練習によって技術力を養成し、2対2や3対3の練習でグループ戦術を、さらに6対6の練習でチーム戦術を養成し、体力トレーニングによって体力を養成するというような要素還元的な考えに基づいた練習は、ゲーム能力を合理的に養成できないと考えられているのである。そのため、近年、球技では、練習の目的に合わせてゲーム状況を設定し（ボル，2017）、相手のいる状況の中で判断を伴うような練習（ヤンコフスキ，2016）によってゲーム能力を養成することが重視されている。

育成年代初期における練習の内容と方法について国内外での取り組みを概観すると、これらの考えに基づいた育成年代初期特有の理念を提示している国や競技団体がある。具体的には、ドイツのハンドボールでは、練習方法の採用における注意点として、ドリルやゲームが年齢に適したものをを用いること（Pabst and Scherbaum, 2018, p.45）、ドリル形式よりゲーム形式の練習を多く採用すること（Schubert and Späte, 2009, p.10）が挙げられている。日本のサッカーでも、ゲーム形式の練習を多く行うことが挙げられている（財団法人日本サッカー協会，2012）。

ゲーム形式の練習とは、味方や相手プレーヤーを伴うパスゲームやミニゲームにおいて複雑な状況を解決する練習形式である（Schubert and Späte, 2009, p.23）。奥田（2018, p.20）は、ゲーム形式の練習について、育成年代初期では、指導者が早期から選手に戦術を指示したり思考させたりすることによって、選手の幅広い知覚が限定されることを避け、選手がゲーム情報をうまく利用する能力の獲得を妨げないように注意することを挙げている。

ゲームを修正する際に指導者が持つ視点について、Thorpe and Bunker（1986）は、成

人が行うゲームと同様の戦術構造を保持したまま学習者の発育発達段階へ適したゲームへ修正する「修正－再提示 (modification-representation)」, 特定の学習課題を誇張する「修正－誇張 (modification-exaggeration)」およびこれらを合わせた「修正・誇張 (representation and exaggeration)」の 3 つを提示している。さらに, Pabst and Scherbaum (2018, pp.46-47) は, 練習の目的および学習者に適した難易度のゲームにするためには, ゲームの形式 (パスゲームやミニゲームなど), 選手数, ボールの数, コート, ルールを変えることが必要であると述べている。

これらのことは, 10 歳から 13 歳は運動学習能力の 1 番高い時期であること (Meinel and Schnabel, 2015), 12 歳以下の子どもの試合や練習は, 大人の練習の縮小版であってはならないこと (Pabst and Scherbaum, 2018, p.15) を考え合わせると, 育成年代初期における練習の内容と方法として, 個人のゲーム能力を伸ばすようなゲーム中心の練習 (ノイハウス, 2016, p.3) を計画・実施する必要がある。このことに関して議論し, 発信していかなければ, 育成年代初期特有の練習方法は全国で浸透せず, 成人と同じような練習, すなわち決められた戦術の習得を目指すような練習 (Brand et al., 2009, p.10), ドリル形式で動作の精度を高めるような練習が育成年代初期において行われてしまうと考えられる。

(3) 総合考察

ドイツにおける育成年代初期の選手育成の取り組みは, 全国の試合でマンツーマン防御が義務化された 2003 年が転換点であったと捉えられた。一方, 日本における取り組みは, 2015 年に育成年代初期の試合における特別な競技規則の導入から本格化したと解釈できた。これらの競技規則は, 成人とは異なり, 「個の育成」を目指して導入された子ども特有の競技規則である。このことから, ドイツおよび日本の両国における育成年代初期では, 「個の育成」を重視していると解釈できる。

しかし, 日本の育成年代初期の試合においては, 競技規則導入前後のゲームパフォーマンスにおいて, 大きな変化は見られなかった (スポーツイベント, 2017) ことから, 日本における子ども特有のハンドボール指導に関する取り組みは十分でないと言える。その理由の 1 つには, 日本の取り組みが「義務」ではなく, 「推奨」であることが挙げられよう。「推奨」であるがゆえに, 各チームの指導者は, 選手育成に有効な取り組みであると感じたとしても, それまでに信じてきた戦い方に関する信念を変えられず, 変革が全国に浸透していかなかったと考えられる。

今後日本が長期的な視点を持って育成年代初期の選手育成活動に関する取り組みの変革を起こすためには、まずは、子ども特有のハンドボールの必要性、すなわち日本ハンドボール協会が選手育成の初期段階においてどのような選手を養成するべきなのかを提示するとともに、その目標像を具現化できるような競技規則を、「推奨」ではなく「義務化」する必要があると考えられる。

5. 要約

本章では、ドイツおよび日本のハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷を明らかにし、過去の取り組みの問題点を明らかにすることによって、今後育成年代初期の選手育成に関する新たな取り組みを行うための知見を提言することを目的とした。この目的を達成するために、ドイツハンドボール協会および日本ハンドボール協会が指導者向けに発行している機関誌の1988年から2018年までの記事を対象に、育成年代初期の選手育成活動に関する記事を選別した後、テキストマイニング分析を行った。本章で得られた知見は以下の通りである。

ドイツにおける育成年代初期の選手育成活動の変遷を、1988年から5年ごとに区切ると、まず、ゲーム能力の系統的かつ長期的な養成に関する理念を提示することによって「子どものハンドボール」の必要性を促し、次に、遊びの中で積極的な防御を習得させること、攻撃において個を育成することを中心的なテーマとしていた。その後、一貫指導体制を確立させ、義務化した試合形式を実践に適用させ、子どもが楽しめる練習で攻撃力を育成していったと解釈できた。

ドイツの育成年代初期における練習の内容と方法に着目すると、1988年から一貫して、練習で設定された状況の解決を選手が試みることで技術力と戦術力が統一されたゲーム能力の育成を目指していると捉えられた。

日本における育成年代初期の選手育成活動の変遷を、1988年から5年ごとに区切ると、まず、個人の攻撃プレー方法を詳細に説明することによって、育成年代初期からの技術力養成の重要性を示し、次に、海外の育成年代初期における選手育成活動の紹介を中心的なテーマとしていた。その後、NTSを開始し、内容報告、活動報告をし、新ゲーム形式の理念を提示したと解釈できた。これらのことから、日本における育成年代初期の選手育成活動は、2002年から始まったNTSと共に組織化されたと捉えられそうではある。しかし、NTSでは、育成年代初期特有の年齢カテゴリーがなかったことから、育成年代初期にお

る選手育成活動は、2015年の全国小学生ハンドボール大会において新ゲーム形式が導入されてから本格化したと推察された。

日本の育成年代初期において身につけさせるべき内容に着目すると、技術力および戦術力の養成が重視されていた。しかし、それらをどのように養成するのかについて、すなわち練習の方法については、過去31年間で中心的なテーマとなっていなかった。もし、このことに関して議論し、発信していかなければ、育成年代初期特有の練習方法は全国で浸透せず、成人と同じような練習が育成年代初期において行われてしまうと考えられる。

今後日本が育成年代初期の選手育成活動に関する新たな取り組みをしていくためには、選手育成の初期段階において、技術力や戦術力などの個人の競技力を構成するそれぞれの要素ではなく、それらを全て含めたゲーム能力の養成を重視しながら、ゲームを中心とした練習の方法を提示していく必要があると考えられる。さらに、選手育成の初期段階においてどのような選手を養成すべきなのかを提示するとともに、その目標像を具現化できるような競技規則を、「推奨」ではなく「義務化」する必要があると考えられる。

第3章 育成年代初期のハンドボールにおける「個の育成」を目指した競技規則の下での選手育成活動について：ドイツと日本のトップチームを比較して（課題Ⅱ）

1. 目的

前章の課題Ⅰでは、ドイツハンドボール協会および日本ハンドボール協会が指導者向けに発行している機関誌の1988年から2018年までの記事を対象に、育成年代初期の選手育成活動に関する記事を選別した後、テキストマイニング分析を行った。その結果、ドイツでは、技術力や戦術力などの個人の競技力を構成するそれぞれの要素ではなく、それらを全て含めたゲーム能力の養成を重視しながら、ゲームを中心とした練習方法を提示していることが推察された。日本では、技術力および戦術力の養成が重視されていたが、それらをどのように養成するのか、すなわち練習方法については中心的なテーマとなっていないことが明らかとなった。しかし、現在、実際のコーチング現場でどのような選手育成活動が行われているのかについては検討してはいない。

ドイツおよび日本の両国においては、「個の育成」が重視されている。では、育成年代初期のハンドボールのコーチング実践において、指導者は「個の育成」に対してどのような方針を持ち、育成すべき「個」の目標像をどのように捉え、目標に到達させるためにどのような内容や方法で練習を行ったら良いのであろうか。そして、その練習の成果としてのゲームパフォーマンスをどのように評価したら良いのであろうか。

もし、これらの考え方とその成果としてのゲームパフォーマンスをドイツと日本の育成年代初期のトップチームおよびその指導者を対象に明らかにでき、これらを両国間で比較することができれば、より明確に両国の特徴が現れ、日本の育成年代初期のコーチングにおける指導の方向性を示すことができる有用な手がかりが得られるであろう。

そこで、本章では、ドイツと日本両国の育成年代初期のトップチームにおいて「個の育成」を目指したそれぞれの競技規則の下でチームの強化に取り組んでいる指導者の持つ育成方針、練習の内容と方法、試合でのゲームパフォーマンスを明らかにし、両国の選手の育成・強化に関する取り組みをトップチームの活動を手掛かりに事例的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査手順の概略

本章では、前述した目的を達成するために、2つの課題を設定した。1つ目は、ドイツと日本の育成年代初期における国内トップレベルのチームを対象に、実際のゲーム様相について記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて数量化し、その特徴を明らかにすることである。2つ目は、対象としたチームの指導者に対するインタビュー調査によって、指導者の持つ個の育成方針とチームの育成方針、それを実現させる練習の内容と方法を明らかにし、記述的ゲームパフォーマンス分析の結果と関連付けて両国間で比較検討することである。

(2) 調査対象者および対象チーム

ドイツの調査対象チームは 201X 年 Bestenermittlung E-Jugend des Handball Verbandes Sachsen (以下「ザクセン州 U10 大会」と略す) および同シーズンのライプツィヒ地区大会男子優勝チームである G1 とそのチームの監督である A 氏であった。日本は、201X 年全国小学生ハンドボール大会男子優勝チームである J1 とそのチームの監督である B 氏および男子準優勝チームである J2 とそのチームの監督である C 氏であった。なお、ドイツでは育成年代初期における全国大会が行われていないため、最も大きな規模の大会である州大会の優勝チームをトップレベルと捉えた。

(3) ゲームパフォーマンスに関する調査

ハンドボールにおけるプレーの内容や方法は、競技規則や対戦相手の特徴（レベル）などの影響を受ける。本章では、競技規則以外の影響をできるだけ小さくするために、トップレベルの複数の相手チームに対応するゲームパフォーマンスを分析した。

①対象試合

a. G1

G1 の調査対象試合は、201X 年ザクセン州 U10 大会で戦った 5 試合と 201X 年メクレンブルク＝フォアポンメルン州 Stiere Cup で戦った 6 試合の合計 11 試合であった。調査対象試合は、各州協会によって定められた競技規則に則って行われた。それぞれの州協会による競技規則は、いずれも以下の 4 点において成人の競技規則とは異なる。それは、競技時間（7 分 30 秒×2 セット、10 分×2 セット、または 15 分×2 セット）、使用するボール

の大きさ (0 号球, 人工皮革), 防御隊形 (コート全面または半面でのマンツーマン防御が義務化されている), 退場の取り扱い方 (退場した選手に代わり他の選手がコートに入れる) である. これらに加えてザクセン州では, 7m スローの代わりにペナルティースロー (フリースローラインの外側から助走をつけたステップシュート) が行われる. さらに, メクレンブルク=フォアポンメルン州では, 使用するゴールの大きさ (高さ 1.6m×幅 3m) が成人 (2m×3m) とは異なる.

b. J1 および J2

J1 および J2 の調査対象試合は, 201X 年全国小学生ハンドボール大会で戦った予選から決勝までの 5 試合であった. 調査対象試合は, J クイックハンドボールに則って行われた. この競技規則は, 以下の 4 点において成人の競技規則と異なる. それはコートの大きさ (36m×20m), 競技時間 (10 分×3 セット), 使用するボールの大きさ (1 号球, 人工皮革), スローオフの方法 (ゴールエリア内からのゴールキーパーズスロー) である.

②分析対象とした局面

ハンドボールのゲームは, 速攻, セット局面における攻撃, 速攻に対する防御, セット局面における攻撃に対する防御から構成される 4 つの基本局面と, フリースロー, コーナーズスロー, スローイン, スローオフから直接または 1 回のパスで攻撃を終了させる特定局面から構成される (大西, 1997). この中で速攻は, 即興的にプレー状況が解決されることが多い (松木・會田, 2016). 一方セット局面における攻撃は, その開始時に防御と均衡を保って対峙することから, 各チームのゲーム構想が現れやすい (大西, 1998). 本章では, 「個の育成」を目指した競技規則の下で指導者がどのような育成方針を持ち, どのようなゲームが達成されているのかについて明らかにすることが目的であるため, 指導者のゲーム構想が現れやすいセット局面での攻撃とそれに対する防御を調査対象局面とした. したがって, 即興的に状況が解決される速攻とそれに対する防御, 特定局面は分析の対象から除いた.

③分析結果の記録方法

分析対象試合の映像を観察しながら, 独自に作成した記録用紙を用いて結果を記録した. その後, Microsoft Excel を使用してデータベースを作成した.

④分析項目

攻撃および防御の様相を明らかにするために、攻撃の全体的特徴については、攻撃成功率、シュート成功率、ミスの種類、ミスエリア、ミス率、防御プレイヤーによる身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローが与えられたプレー（以下「フリースローが与えられたプレー」と略す）のエリア、1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数、1回の攻撃あたりのパス回数、数的関係について分析した（表21）。攻撃の局面的特徴については、きっかけ局面、突破局面、シュート局面ごとに分析項目を作成した（表22）。防御の全体的特徴については、相手の攻撃成功率、シュート成功率、ミスの種類、ミスエリア、ミス率、身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローを与えたプレー

表21 攻撃および防御の全体的特徴に関する分析項目

攻撃		防御	
攻撃成功率		相手の攻撃成功率	
シュート成功率		相手のシュート成功率	
ミスプレー		相手のミスプレー	
①ミスの種類		①ミスの種類	
②ミスエリア		②ミスエリア	
③ミス率		③ミス率	
フリースローが与えられたプレー		フリースローを与えたプレー	
①フリースローが与えられたプレーのエリア		①フリースローを与えたプレーのエリア	
②1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数		②1回の防御あたりのフリースローを与えたプレーの回数	
1回の攻撃あたりのパス回数		数的関係	
数的関係		防御隊形	

表22 攻撃および防御の局面的特徴に関する分析項目

攻撃		防御	
きっかけ	きっかけ局面における活動		
突破	突破局面からシュート局面までで用いられた戦術 個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方 グループ戦術を用いた突破方法	突破	突破局面からシュート局面までで用いられた戦術 突破プレイヤーに対するマークの有無 突破プレイヤーに対する守り方
シュート	シュートエリア シュートのステップパターン シュート結果	中断	最終プレイヤーに対する守り方 最終プレイヤーに対する隣の防御プレイヤーの守り方
		シュート	相手のシュートエリア 相手のシュート結果

(以下「フリースローを与えたプレー」と略す) のエリア, 1回の防御あたりのフリースローを与えたプレーの回数, 数的関係, 防御隊形について分析した(表 21). 防御の局面的特徴については, 被突破局面, 中断局面, 被シュート局面ごとに分析項目を作成した(表 22). 以下に攻撃および防御の各分析項目に関する詳しい説明を示す.

なお, 本論では, 育成年代初期においてどのような「個の育成」が行われているのかを明らかにするために, 攻撃および防御における局面的特徴に関する分析項目を作成した. 分析項目の設定に関しては, ハンドボールの競技歴および指導歴を高いレベルで有し, ハンドボールの科学研究に従事している者 1 名に妥当性のチェックを依頼し, 妥当性を支持する回答を得ている.

a. 攻撃の全体的特徴

ア) 攻撃成功率

セット局面における攻撃成功率を算出した. 攻撃成功率は, 攻撃回数に対する得点の比率と捉え, 以下の式により求めた.

$$\text{攻撃成功率} = \text{ゴール数} / \text{攻撃回数} \times 100 (\%)$$

イ) シュート成功率

シュート成功率を算出した. シュート成功率は, シュート数に対する得点の比率と捉え, 以下の式により求めた.

$$\text{シュート成功率} = \text{得点数} / \text{シュート数} \times 100 (\%)$$

ウ) ミスプレーの分析

i) ミスの種類

ミスの種類を, ラインクロス, オーバーステップ, イリーガルドリブル, キックボール, オフェンシブファール, パッシブプレー, パス・キャッチミス, キープミス, 被スティールの 9 つに分け, 記録した. 次に, それぞれの項目をミス数の合計で除し, それぞれのミスの生起率を求めた.

ii) ミスエリア

ミスエリアを自陣ゴールラインから自陣フリースローラインまで, 自陣フリースローラ

インからセンターラインまで，センターラインから敵陣フリースローラインまで，敵陣フリースローラインから敵陣ゴールラインまでの 4 つに分け，記録した．次に，それぞれの項目をミス数の合計で除し，各ミスエリアでの生起率を求めた．

iii) ミス率

ミス率を算出した．ミス率は，攻撃回数に対するミス数の比率と捉え，以下の式により求めた．

$$\text{ミス率} = \text{ミス数} / \text{攻撃回数} \times 100 (\%)$$

エ) フリースローが与えられたプレーに関する分析

i) フリースローが与えられたプレーのエリア

相手の防御プレーヤーによる身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローが与えられたプレーのエリアをサイド（主にサイドプレーヤーがプレーするエリア），フリースローライン内（主にポストプレーヤーとバックコートプレーヤーがプレーするエリア），自陣のバックコート（主にバックコートプレーヤーがプレーするエリア），敵陣のバックコート（主にバックコートプレーヤーがプレーするエリア）の 4 つに分け，記録した（図 15）．次に，それぞれの項目をフリースロー数の合計で除し，各エリアでのフリースローの生起率を求めた．

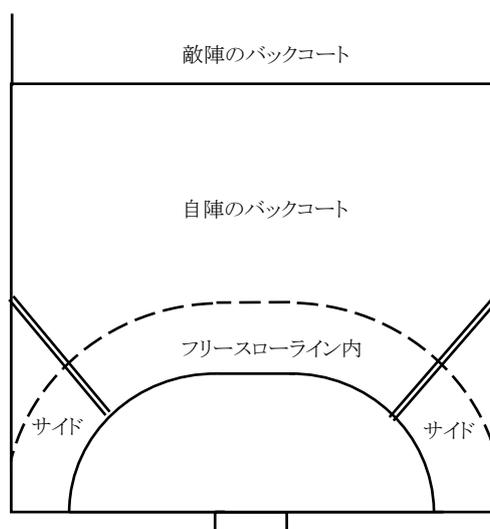


図15 フリースローが与えられたプレーを分析する際のエリア

ii) 1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数

1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数を算出した。1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数については、以下の式により求めた。

$$1 \text{ 回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数} = \text{フリースローが与えられたプレーの回数の合計} / \text{攻撃回数} (\%)$$

オ) 1回の攻撃あたりのパス回数

1回の攻撃あたりのパス回数を算出した。1回の攻撃あたりのパス回数については、以下の式により求めた。

$$1 \text{ 回の攻撃あたりのパス回数} = \text{パス回数の合計} / \text{攻撃回数} (\%)$$

カ) 数的関係

コートプレーヤーの数的関係を両チームに退場者がいない6対6、防御側が数的優位な5対6、攻撃側が数的優位な6対5、両チームのコートプレーヤーが5人以下であるその他の数的関係の4つに分け、記録した。次に、それぞれの項目を攻撃シーン数の合計で除し、数的関係別の生起率を求めた。

b. 攻撃の局面的特徴

大西（1998）は、セットオフENSEを位置取り局面、きっかけ局面、展開局面、突破局面、シュート局面の5局面に分け、攻撃活動における要の局面は、防御を崩すきっかけ局面、シュートにつながる突破局面であると述べている。また、試合の勝敗を直接決定する要因はシュート局面である（江成，1980）。本章では、これら3つの局面に着目することによってより詳細にプレー方法を捉えようとした。各局面の分析項目は以下の通りである。

ア) きっかけ局面の分析

きっかけ局面における活動を、ポジションチェンジ、システムチェンジ、ポジションホールドの3つに分け（シュテラーほか，1993，p.396），記録した。これらに加えて本章では、ポジションチェンジおよびシステムチェンジを同時に行う活動を「ポジションチェンジ+システムチェンジ」と捉え、4つ目の項目に加えた。次に、それぞれの分析項目を攻撃シーン数の合計で除し、活動項目別の生起率を求めた。なお、本章では攻撃シーンを、

攻撃開始から相手の防御プレイヤーの反則によって攻撃活動が中断されるまでを 1 シーンと捉え、ボールの所持権を失うまでの間に攻撃活動が中断される度にシーンを分けた (図 16).

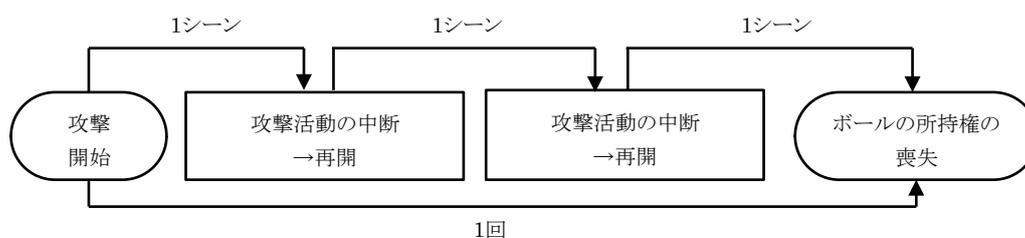


図16 攻撃回数とシーン数の捉え方

イ) 突破局面の分析

i) 突破局面からシュート局面までで用いられた戦術

本章では、突破局面をオンザボールの攻撃プレイヤーがゴール方向へ攻め始めた時点からと捉えた。突破からシュートまたは攻撃活動の中断までにボールを保持した人数を、1人、2人、3人、4人以上の4つに分け、記録した。次に、それぞれの項目を攻撃シーン数の合計で除し、突破からシュートまたは攻撃活動の中断までにボールを保持した人数別の生起率を求めた。

さらに、突破からシュートまたは攻撃活動の中断までにボールを保持した人数を、1人の場合は個人戦術、2人以上の場合はグループ戦術 (Trosse, 1988, p.46) と捉え、分類した。次に、それぞれの項目を攻撃シーン数の合計で除し、突破局面における個人戦術とグループ戦術の生起率を求めた。

ii) 個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方

個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方を、ボールを保持した瞬間の攻撃プレイヤーと相手防御プレイヤーとの位置関係に着目し、ずれた位置、正面、その他の3つに分け、記録した。次に、それぞれの項目を個人で突破したシーン数の合計で除し、個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方についての生起率を求めた。

iii) グループ戦術を用いた突破方法

グループ戦術を用いた突破方法を、リターンパス、ずらし、クロス、ポストプレーの 4 つに分け (Trosse, 1988, p.46), 記録した。これらに加えて本章では、サイドプレーヤーとバックプレーヤーによる同時攻撃を 5 つ目の項目に加えた。ボールを持っていないサイドプレーヤーがポストのポジションへ移行するのと同時に、その隣のバックコートプレーヤーがサイドのポジションへ移行して攻撃するプレーを、サイドプレーヤーとバックプレーヤーによる同時攻撃とした。次に、それぞれの項目を、グループ戦術を用いた突破からシュートまで、または攻撃活動の中断までのシーン数の合計で除し、グループ戦術別の生起率を求めた。

ウ) シュート局面の分析

i) シュートエリア

シュートエリアをサイド、ポスト、カットイン、ミドル、ロングの 5 つに分け (山田, 2010 ; 和田ほか, 2013), 記録した (図 17)。次に、それぞれの項目をシュート数の合計で除し、エリア別のシュート生起率を求めた。7m スローは、攻撃プレーヤーが明らかな得点の際に相手の防御プレーヤーによって妨害された場合に判定されるプレーであるため (公益財団法人日本ハンドボール協会, 2017), 7m スローの際には、7m スローの判定が下された時のシュートエリアを記録した。

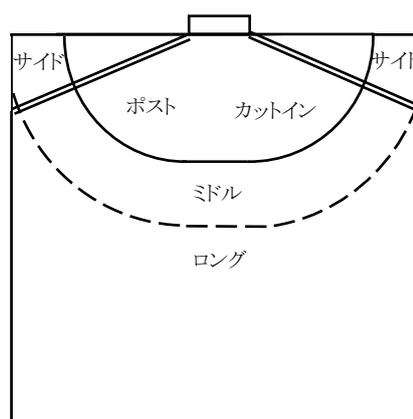


図17 シュートエリアの分類

ii) シュートのステップパターン

シュート時のステップパターンをジャンプシュート、ステップシュート、ランニングシ

シュートの 3 つに分け、記録した。次に、それぞれの項目をシュート数の合計で除し、ステップパターン別の生起率を求めた。

iii) シュート結果

シュートにおける結果をゴール、ゴールキーパーセーブ、枠外シュート、防御プレイヤーによるブロックの 4 つに分けた。ブロックに関しては、その後ゴールキーパーがセーブ、ボールの喪失、再獲得の 3 つに分け、記録した。次に、それぞれのシュート結果をシュート数の合計で除し、シュート結果別の生起率を求めた。

c. 防御の全体的特徴

防御の全体的特徴を明らかにするために、相手の攻撃回数、シュート数、ミス数、ゴール数をカウントし、相手の攻撃成功率、シュート成功率、ミス率、ミスの種類について分析した。ここでは、攻撃の分析と同様の算出方法を用いた。フリースローを与えたプレーのエリア、1回の防御あたりのフリースローを与えたプレーの回数、数的関係についても攻撃の分析と同様の調査項目と算出方法を用いた。

防御隊形に関しては、クローズドディフェンス (6:0 防御：防御プレイヤーがゴールエリアライン付近に横 1 列に位置し、横幅がある防御隊形 (Marczinka, 1993, p.346))、オープンディフェンス (3:2:1 防御, 5:1 防御, 4:2 防御: 2 列以上に分かれた防御隊形 (Marczinka, 1993, p.339))、マンツーマン防御 (それぞれの攻撃プレイヤーに対して 1 人ずつの防御プレイヤーがマークをとる防御)、1~2 名の特定のプレイヤーに対するマンツーマン防御、退場時の防御 (いずれかのチームに 2 分間退場者がいる状況) の 5 つに分け、記録した (和田ほか, 2013) (図 18)。次に、それぞれの防御隊形を防御シーン数の合計で除し、防御隊形別の生起率を求めた。

d. 防御の局面的特徴

防御活動における要の局面は、数的または空間的に有利な状況を作り出す突破局面 (船木・會田, 2014) を防ぐ被突破局面、シュート局面 (江成, 1980) を防ぐ被シュート局面である。本章では、これらに、身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローを与えたプレーを中断局面として加え、より詳細にプレー方法を捉えようとした。各局面の分析項目は以下の通りである。

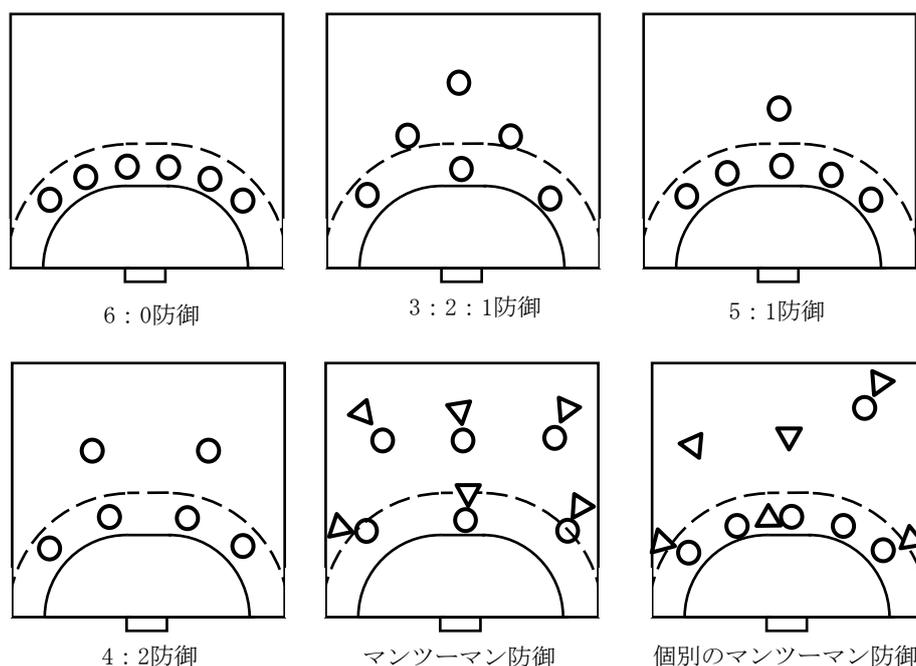


図18 防 御 隊 形

ア) 被突破局面の分析

i) 突破局面からシュート局面までで用いられた戦術

相手の突破からシュートまたは身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数を、1人、2人、3人、4人以上の4つに分け、記録した。ボールを保持してゴール方向へ攻撃した最初のプレーヤーを1人目とした。次に、それぞれの項目を防御シーン数の合計で除し、突破からシュートまたは身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数別の生起率を求めた。

ii) 突破プレーヤーに対するマークの有無

相手の突破プレーヤーに対するマークの有無を、相手の突破プレーヤーに対して、防御プレーヤーが対峙している、していないに分け、記録した。次に、それぞれの項目を防御シーン数の合計で除し、マークの有無の生起率を求めた。

iii) 突破プレーヤーに対する守り方

突破プレーヤーに対する守り方を分析するために、防御開始エリア、ボール保持後の突破プレーヤーに対するプレー方法、ボールを保持した瞬間の突破プレーヤーに対するマー

クの仕方の3つの項目を設定した。

防御開始エリアについては、ボールを保持した瞬間の突破プレーヤーに対峙する防御プレーヤーの位置するエリアと捉え、それをサイド、フリースローライン内、自陣のバックコート、敵陣のバックコートの4つに分け、記録した(図15)。

ボール保持後の突破プレーヤーに対するプレー方法については、アクティブまたはリアクティブに分けて記録した。ボール保持後の突破プレーヤーのパスまたはシュートに制限を加えた場合、または突破プレーヤーの進路を遮断した場合をアクティブ、それ以外をリアクティブと捉えた。

ボールを保持した瞬間の突破プレーヤーに対するマークの仕方を、マーク中心またはボール中心に分けて記録した。突破プレーヤーがボールを保持した瞬間に、防御プレーヤーが突破プレーヤーとゴールライン中央を結ぶ直線上に位置を取って活動した場合をマーク中心、その直線上に位置せずにボールのある方へ寄っている場合をボール中心と捉えた。これらの3項目を、それぞれ防御シーン数の合計で除し、それぞれの生起率を求めた。

イ) 被シュートおよび中断局面の分析

i) 最終プレーヤーに対する守り方

シュート局面の攻撃プレーヤー(シューター)または身体接触によって攻撃活動が中断された際にボールを保持していた攻撃プレーヤーを最終プレーヤーと捉え、最終プレーヤーに対する守り方を分析するために、突破プレーヤーに対する守り方と同様の調査項目と算出方法を用いた。

ii) 最終プレーヤーに対する隣の防御プレーヤーの守り方

最終プレーヤーが突破した側の隣の防御プレーヤーの最終プレーヤーに対する守り方法を分析するために、突破プレーヤーに対する守り方と同様の調査項目と算出方法を用いた。

ウ) 被シュート局面の分析

i) 相手のシュートエリア

相手のシュートエリアを分析するために、攻撃の局面的特徴におけるシュートエリアと同様の調査項目と算出方法を用いた。

ii) 相手のシュート結果

相手のシュート結果を分析するために、攻撃の局面的特徴におけるシュート結果と同様の調査項目と算出方法を用いた。

⑤分析結果の記録方法

分析対象試合の映像を観察しながら、独自に作成した記録用紙（図 19、図 20）を用いて結果を記録した。その後、Microsoft Excel を使用してデータベースを作成した。

大会名：	チーム名：	
数的関係：	グループ戦術を用いた突破方法：	シュートエリア：
1. 6対6	1. リターンパス	1. サイド
2. 5対6	2. ずらし	2. ポスト
3. 6対5	3. クロスプレー	3. カットイン, 6m
4. その他	4. ポストプレー	4. ミドル
	5. サイドプレーヤーとバックコートプレーヤーによる同時攻撃	5. ロング
きっかけ局面での活動：		
1. ポジションチェンジ		フリースローが与えられたプレーのエリア
2. システムチェンジ	ミスの種類：	
3. ポジションチェンジ+システムチェンジ	1. ラインクロス	1. 敵陣のサイドのエリア
4. ポジションホールド	2. オーバーステップ	2. 敵陣のフリースローライン内
	3. ダブルドリブル	3. 敵陣のバックコート
	4. キックボール	4. 自陣のバックコート
	5. オフェンスファール	
突破からシュートまたは攻撃の中断までにボールを保持した人数：	6. パス・キャッチミス	シュートのステップパターン
1. 1人	7. キープミス	1. ジャンプシュート
2. 2人	8. パッシブプレー	2. ステップシュート
3. 3人	9. 被スティール	3. ランニングシュート
4. 4人以上		
	ミスエリア：	シュート結果：
個人で突破する際の防御プレーヤーとの対峙の仕方：	1. 自陣ゴールラインから自陣フリースローラインまで	1. ゴール
1. 正面	2. 自陣フリースローラインからセンターラインまで	2. Hit
2. ずれた位置	3. センターラインから敵陣フリースローラインまで	3. Out
3. その他	4. 敵陣フリースローラインから敵陣ゴールラインまで	4. シュートブロック→セーブ
		5. シュートブロック→ボール喪失
		6. シュートブロック→再獲得
		7. フリースロー
		8. 7m

図 19 攻撃に関する記録用紙

大会名：	チーム名：	
防御隊形： 1. クローズドディフェンス 2. オープンディフェンス 3. マンツーマン防御 4. 個別のマンツーマン防御 5. 退場時	相手のミスの種類： 1. ラインクロス 2. オーバーステップ 3. ダブルドリブル 4. キックボール 5. オフェンスファール 6. パス・キャッチミス 7. キープミス 8. パッシブプレー 9. インターセプト 10. ドリブルスティール	突破プレーヤー，最終プレーヤーに 対峙する防御プレーヤーおよびその 隣の防御プレーヤーの守り方 防御開始のエリア： 1. サイド 2. フリースローライン内 3. 自陣のバックコート 4. 敵陣のバックコート
数的関係： 1. 6対6 2. 5対6 3. 6対5 4. その他		アクティブまたはリアクティブ： 1. アクティブ 2. リアクティブ
突破プレーヤーに対するマークの 有無： 1. 有り 2. 無し	相手のミスエリア： 1. 自陣ゴールラインから自陣フ リースローラインまで 2. 自陣フリースローラインから センターラインまで 3. センターラインから敵陣フ リースローラインまで 4. 敵陣フリースローラインから 敵陣ゴールラインまで	マーク中心またはボール中心： 1. マーク中心 2. ボール中心
シュートエリア： 1. サイド 2. ポスト 3. カットイン，6m 4. ミドル 5. ロング	相手の突破からシュートまたは攻 撃の中断までにボールを保持した 人数： 1. 1人 2. 2人 3. 3人 4. 4人以上	シュート結果： 1. ゴール 2. Hit 3. Out 4. シュートブロック→セーブ 5. シュートブロック→ボール喪失 6. シュートブロック→再獲得 7. フリースロー 8. 7m
フリースローを与えたプレーの エリア： 1. 敵陣のサイドのエリア 2. 敵陣のフリースローライン内 3. 敵陣のバックコート 4. 自陣のバックコート		

図 20 防御に関する記録用紙

⑥分析記録の信頼性の保証

上記の方法で得られた分析記録の信頼性を検討するために，2人の分析者間で分析記録の一致度を検討した。すなわち，ハンドボールの競技歴および指導経験があり，日本スポーツ協会が認定する上級コーチ（ハンドボール）1名と日本スポーツ協会公認コーチ（ハンドボール）を有する本研究者が，全1399シーン中300シーンについて同一の分析を行った。

300 シーンの内訳は、チームごとに異なる 5 試合を無作為に選出し、その試合における攻撃と防御の 10 シーンずつである(3 チーム×5 試合×(攻撃 10 シーン+防御 10 シーン)). 2 人の分析結果を基に分析項目 (30 項目) ごとに一致率 (=一致数 / (一致数+不一致数) ×100 (%)) を求めた. 一致率の解釈はシーデントップ (1988, pp.267-295) に拠った.

⑦統計処理

分析結果の処理は、本研究者が行った. ゲームパフォーマンスをチーム間で比較するため、分析結果をチームごとにまとめ、攻撃成功率、ミス率、シュート率については χ^2 検定を行った. 1 回の攻撃または防御におけるフリースローを与えたプレーの回数と攻撃時のパス回数については、一元配置の分散分析を行い、F 値が有意な場合、Tukey の HSD 法により多重比較を行った. それ以外の項目については、チームと各分析項目 (29 項目) との間で、 χ^2 検定と残差分析を行った. 統計処理の有意性はいずれも 5%で判定した.

(4) 指導者の持つ選手とチームの育成方針、練習の内容と方法についての調査

本章では、前述した目的を達成するために以下の分析手順を経た (図 21). なお、日本を対象とした調査では、「翻訳」の分析手順を省略した.

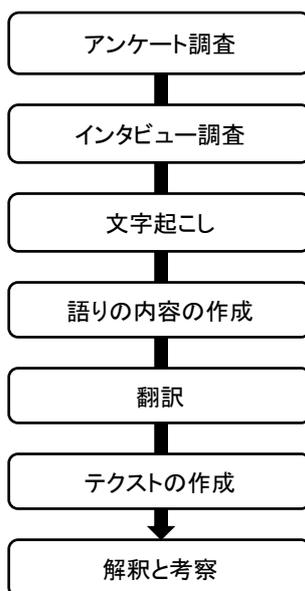


図21 本章における分析手順

①インタビュー調査の内容と方法

3名の指導者に対して、個別にインタビュー調査を行った。調査内容は、個の育成方針、チームの育成方針、練習の内容と方法、年間を通したチームの活動についてであった。インタビュー調査の約2週間前に、調査内容に対して自由記述式で回答を求めるアンケート調査票を対象者に郵送し、調査内容について記述、返信してもらった。インタビュー調査時には、それを補助資料として用いた。全ての発言内容をICレコーダーを用いて録音した。

調査は、ドイツの指導者に対しては201X年12月23日にドイツ語で、日本の指導者に対しては201X年10月28日および29日に日本語で、それぞれの対象者と調査者が1対1で対話できる静かな場所で、半構造化面接を用いて行った。

インタビューの聞き手は、本研究者が務めた。この研究者は、ドイツオリンピックスポーツ連盟C級コーチ(ハンドボール)および日本スポーツ協会公認コーチ(ハンドボール)の資格と、ドイツおよび日本において育成年代初期の選手に対するハンドボールの指導経験を持っていた。また、ドイツ語の語学能力証明書としてGoethe-Zertifikat B2を持っていた。この語学能力証明書は「自分の専門領域では専門的な議論も理解することができるドイツ語力」(Goethe Institut, online)を意味している。これらのことは、インタビュー調査におけるデータの収集が適切に行われたこと、インタビュー結果であるテキストの分析が対象者の語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点を持って行われたことを保障するものであると考えられる(會田・坂井, 2008)。

なお、対象者には、本章の趣旨を事前に文書にて十分に説明し、調査への協力を得た。インタビュー調査に先立ち、いずれの質問に対しても回答を拒否できることを伝え、調査内容の音声記録と研究結果の公開に関して了解を得た。調査の趣旨説明からインタビュー実施までの間に、ラポール(土屋, 2005)の形成に努めた。

②語りの内容の作成

まず、インタビュー調査における全ての発言内容を逐語録として文章におこした。次に、語りの意味内容を全体として十分理解できるまで逐語録を熟読した。続いて、語りの意味内容をくずさないように、文脈を尊重しながら、個の育成方針とチームの育成方針、練習の内容と方法に着目し、語りの内容としてまとめた。語りの内容の妥当性および信頼性を保証するためにメンバー・チェック(フリック, 2011)を行った。すなわち、語りの内容を対象者に示し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および修正箇所はないかを

確認した。これらの作業を終えたものを個の育成方針とチームの育成方針、練習の内容と方法に関する調査結果とした。ここまでの手続きは、それぞれのインタビュー時に用いた言語のみを使用した。

③分析の手続き

まず、ドイツ語で示された A 氏の調査結果を日本語へ翻訳した。次に、3 名の指導者それぞれから得られた調査結果を精読し、個の育成方針とチームの育成方針、練習の内容と方法に関して記述された部分を取り出し、対象者ごとにテキストとして日本語で再構成した。調査結果をテキストとして再構成する時には、意味内容が恣意的に変換されていないことを 1 名の研究者と十分に確認しながら進めた。なお、この研究者は、日本スポーツ協会公認上級コーチ資格（ハンドボール）を有し、コーチング学で質的研究を専門とする博士号を有する者であった。

3. 結果

(1) 記述的ゲームパフォーマンス分析

①分析記録の信頼性

分析記録の一致率は、全ての項目で 88%以上であった（表 23、表 24）。このことは、本章の分析記録に信頼性が得られたことを示している（シーデントップ、1988）。

表23 攻撃プレーに関する分析記録の一致度

項目	G1 (n=50)	J1 (n=50)	J2 (n=50)
ミスの種類	98	100	98
ミスエリア	98	100	98
フリースローが与えられたプレーのエリア	100	100	100
1回の攻撃あたりのパス回数	100	92	92
数的関係	100	100	100
きっかけ局面における活動	100	96	94
突破局面からシュート局面までで用いられた戦術	98	98	100
個人で突破する際の防御プレーヤーとの対峙の仕方	94	98	98
グループ戦術を用いた突破方法	94	98	98
シュートエリア	96	98	98
シュートのステップパターン	100	100	100
シュート結果	98	98	96

数値は%を示す

表24 防御プレーに関する分析記録の一致度

項目	G1 (n=50)	J1 (n=50)	J2 (n=50)
相手のミスの種類	100	100	98
相手のミスエリア	100	100	100
フリースローを与えたプレーのエリア	100	100	100
数的関係	100	100	100
防御隊形	100	100	92
突破局面からシュート局面までで用いられた戦術	94	94	94
突破プレーヤーに対するマークの有無	100	100	100
突破プレーヤーに対する守り方			
エリア	98	96	100
アクティブ/リアクティブ	94	96	94
マーク中心/ボール中心	98	98	98
最終プレーヤーに対する守り方			
エリア	98	90	100
アクティブ/リアクティブ	96	92	100
マーク中心/ボール中心	98	88	100
最終プレーヤーに対する隣の防御プレーヤーの守り方			
エリア	96	90	100
アクティブ/リアクティブ	98	92	100
マーク中心/ボール中心	92	92	96
相手のシュートエリア	100	98	100
相手のシュート結果	98	96	100

数値は%を示す

②分析結果

a. 攻撃の全体的特徴

ア) 攻撃成功率

表 25 は、攻撃成功率を表したものである。攻撃成功率において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=1.3$, ns)。

表25 攻撃成功率

	G1 (n=167)	J1 (n=157)	J2 (n=145)
攻撃成功率(%)	48.5	40.1	38.6

$\chi^2=1.3$, ns

イ) シュート成功率

表 26 は、シュート成功率を表したものである。シュート成功率において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=2.3$, ns)。

表26 シュート成功率

	G1 (n=108)	J1 (n=112)	J2 (n=97)
シュート成功率(%)	66.7	51.8	53.6
$\chi^2=2.3$, ns			

ウ) ミスプレーの分析

い) ミスの種類

表 27 は、ミスの種類を表したものである。ミスの種類において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=35.8$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 はキープミスが多いことが認められた。J2 は G1 と比べてオーバーステップとオフENSIBフールが多いことが認められた。G1 は J2 と比べて被スティールが多いことが認められた。

表27 ミスの種類

	G1 (n=50)	J1 (n=40)	J2 (n=44)
ラインクロス(%)	8.0	5.0	13.6
オーバーステップ(%)	2.0 †	10.0	20.5 *
イリーガルドリブル(%)	2.0	2.5	4.4
キックボール(%)	2.0	0.0	0.0
オフENSIBフール(%)	0.0 †	10.0	20.5 *
パッシブプレー(%)	0.0	0.0	0.0
パス・キャッチミス(%)	20.0	15.0	15.9
キープミス(%)	10.0	22.5 *	6.8
被スティール(%)	56.0 *	35.0	18.2 †
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=35.8$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

表 28 はターンオーバー、テクニカルミス、被スティール の 3 つにミスの種類をまとめ、表したものである。3 つに分類した相手のミスの種類において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=25.6$, $p<0.05$)。J2 は G1 と比べてターンオーバーが多いことが認められた。G1 は、J2 と比べて被スティールが多いことが認められた。

表28 3つに分類したミスの種類

	G1 (n=50)	J1 (n=40)	J2 (n=44)
ターンオーバー (%)	14.0 †	27.5	59.1 *
テクニカルミス (%)	30.0	37.5	22.7
被スティール (%)	56.0 *	35.0	18.2 †
合計 (%)	100	100	100

ターンオーバー：ラインクロス，オーバーステップ，イリーガルドリブル
キックボール，オフエンシブファール，パッシブプレー

テクニカルミス：パス・キャッチミス，キープミス

$\chi^2=25.6$, $p<0.05$

*：有意に多い †：有意に少ない

ii) ミスエリア

表 29 は、ミスエリアを表したものである。ミスエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=37.2$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 と J2 は G1 と比べて敵陣フリースローラインから敵陣ゴールラインまでのエリアでのミスが多いことが認められた。G1 は、

表29 ミスエリア

	G1 (n=50)	J1 (n=40)	J2 (n=44)
自陣ゴールラインから自陣フリースローライン (%)	2.0	0.0	0.0
自陣フリースローラインからセンターライン (%)	10.0 *	0.0	0.0
センターラインから敵陣フリースローライン (%)	68.0 *	27.5 †	29.5 †
敵陣フリースローラインから敵陣ゴールライン (%)	20.0 †	72.5 *	70.5 *
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=37.2$, $p<0.05$

*：有意に多い †：有意に少ない

自陣フリースローラインからセンターラインまでのエリアでのミスが多いこと、日本の 2 チームと比べてセンターラインから敵陣フリースローラインまでのエリアでのミスが多いことが認められた。

iii) ミス率

表 30 は、ミス率を表したものである。ミス率において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=0.5$, ns)。

表30 ミス率

	G1 (n=167)	J1 (n=157)	J2 (n=145)
ミス率(%)	29.9	25.5	30.3
$\chi^2=0.5$, ns			

エ) フリースローが与えられたプレーに関する分析

i) フリースローが与えられたプレーのエリア

表 31 は、防御プレーヤーによる身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローが与えられたプレーのエリアを表したものである。フリースローが与えられたプレーのエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=32.0$, $p<0.05$)。残差分析の結果、

表31 フリースローが与えられたプレーのエリア

	G1 (n=80)	J1 (n=44)	J2 (n=27)
サイド(%)	1.2 †	9.1	11.1
フリースローライン内(%)	31.2 †	70.4 *	59.3
敵陣のバックコート(%)	56.2 *	20.5 †	25.9
自陣のバックコート(%)	11.2 *	0.0 †	3.7
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=32.0$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

J1 は G1 と比べてフリースローライン内が多いことが認められた。G1 はサイドのエリアで少ないこと、J1 と比べて敵陣のバックコートと自陣のバックコートが多いことが認められた。

ii) 1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数

表 32 は、1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数を表したものである。一元配置の分散分析を行った結果、防御に攻撃活動を中断されてフリースローが与えられたプレーの回数において、チーム間に有意な差が認められた ($F=5.5$, $p<0.05$)。多重比較の結果、G1 は J2 より、フリースローが与えられたプレーの回数が多いことが認められた。

表32 1回の攻撃あたりのフリースローが与えられたプレーの回数

	G1 (n=167)	J1 (n=157)	J2 (n=145)	F	差
フリースロー回数 (回)	0.48±0.82	0.28±0.54	0.19±0.50	5.5*	G1>J2

数値はM±SDを示す

* : $p<0.05$

> : $p<0.05$

オ) 1回の攻撃あたりのパス回数

表 33 は、1回の攻撃あたりのパス回数を表したものである。一元配置の分散分析を行った結果、1回の攻撃あたりのパス回数において、チーム間に有意な差が認められた ($F=102.5$, $p<0.05$)。多重比較の結果、J1 は攻撃時のパス回数が J2 より多く、J2 は G1 より多いことが認められた。

表33 1回の攻撃あたりのパス回数

	G1 (n=167)	J1 (n=157)	J2 (n=145)	F	差
パス回数 (回)	4.01±2.52	10.5±5.28	7.56±4.12	102.5*	J1>J2>G1

数値はM±SDを示す

* : $p<0.05$

> : $p<0.05$

カ) 数的関係

表 34 は、コートプレイヤーの数的関係を表したものである。数的関係において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=41.8$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べて 5 対 6, 6 対 5, その他の数的関係が多いことが認められた。G1 は J1 と比べて 6 対 6 の数的関係が多いことが認められた。

表34 数的関係

	G1 (n=248)	J1 (n=201)	J2 (n=171)
6対6 (%)	100.0 *	85.6 †	94.7
5対6 (%)	0.0 †	8.0 *	2.9
6対5 (%)	0.0 †	5.0 *	2.3
その他 (%)	0.0	1.5 *	0.0
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=41.8$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

b. 攻撃の局面的特徴

ア) きっかけ局面の分析

表 35 は、きっかけ局面における活動を表したものである。きっかけ局面の活動において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=118.2$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と

表35 きっかけ局面における活動

	G1 (n=241)	J1 (n=201)	J2 (n=166)
ポジションチェンジ (%)	0.4 †	5.5	11.4 *
システムチェンジ (%)	0.0 †	19.4 *	21.1 *
ポジションチェンジ+システムチェンジ (%)	0.0 †	8.4 *	8.4 *
ポジションホールド (%)	99.6 *	66.7 †	59.1 †
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=118.2$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

比べて、システムチェンジ、ポジションチェンジ+システムチェンジを行うことが多いことが認められた。J2はG1と比べてポジションチェンジ、システムチェンジ、ポジションチェンジ+システムチェンジを行うことが多いことが認められた。G1は、日本の2チームと比べてポジションホールドが多いことが認められた。

イ) 突破局面の分析

い) 突破からシュートまで、または身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数

表36は、突破からシュートまたは身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数を表したものである。突破からシュートまたは攻撃活動の中断までにボールを保持した人数において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=27.3$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1はJ2と比べて1人が多いことが認められた。J2はJ1と比べて2人が多いこと、G1と比べて3人が多いことが認められた。

表36 突破からシュート攻撃の中断までに
ボールを保持した人数

	G1 (n=194)	J1 (n=178)	J2 (n=158)
1人(%)	58.8	62.4 *	38.6 †
2人(%)	37.1	28.7 †	49.4 *
3人(%)	3.6 †	7.9	11.4 *
4人以上(%)	0.5	1.1	0.6
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=27.3$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

表37は、突破からシュートまたは身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数を、1人の場合は個人戦術、2人以上の場合はグループ戦術と分類し、表したものである。突破からシュートまたは攻撃活動の中断までに用いられた戦術において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=21.8$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1はJ2と比べて個人戦術が多いことが認められた。J2はJ1と比べてグループ戦術が多いことが認められた。

表37 突破局面で用いられた戦術

	G1 (n=194)	J1 (n=178)	J2 (n=158)
個人戦術 (%)	58.8	62.4 *	38.6 †
グループ戦術 (%)	41.2	37.6 †	61.4 *
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=21.8, p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ii) 個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方

表 38 は、個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方を表したものである。個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=36.9, p<0.05$)。残差分析の結果、日本の 2 チームは G1 と比べて正面が多いことが認められた。G1 は日本の 2 チームと比べてずれた位置が多いことが認められた。

表38 個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方

	G1 (n=114)	J1 (n=111)	J2 (n=61)
正面 (%)	45.6 †	73.0 *	80.3 *
ずれた位置 (%)	54.4 *	23.4 †	19.7 †
その他 (%)	0.0	3.6 *	0.0
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=36.9, p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

iii) グループ戦術を用いた突破方法

表 39 は、突破において用いられたグループ戦術を表したものである。グループ戦術において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=87.4, p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は J2 と比べてポストプレーが多いことが認められた。J2 は、他の 2 チームと比べてサイドプレイヤーとバックプレイヤーによる同時攻撃が多いことが認められた。G1 は日本の 2 チームと比べてリターンパスが多いこと、J2 と比べてクロスプレーが多いことが認められた。

表39 グループ戦術を用いた突破方法

	G1 (n=80)	J1 (n=67)	J2 (n=97)
リターンパス (%)	23.8 *	1.5 †	0.0 †
ずらし (%)	33.8	44.8	42.3
クロスプレー (%)	10.0 *	3.0	1.0 †
ポストプレー (%)	32.5	44.8 *	23.7 †
サイドとバックプレーヤーの同時攻撃 (%)	0.0 †	6.0 †	33.0 *
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=87.4$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ウ) シュート局面の分析

i) シュートエリア

表 40 は、シュートエリアを表したものである。シュートエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=78.1$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 と J2 は G1 と比べてサイドシュートが多いこと、G1 は日本の 2 チームと比べてカットインシュートが多いことが認められた。

表40 シュートエリア

	G1 (n=117)	J1 (n=117)	J2 (n=101)
サイド (%)	8.5 †	44.4 *	51.5 *
ポスト (%)	14.5	12.8	7.9
カットイン (%)	59.0 *	17.1 †	21.8 †
ミドル (%)	10.3	9.4	6.9
ロング (%)	7.7	16.2	11.9
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=78.1$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ii) シュートのステップパターン

表 41 は、シュートのステップパターンを表したものである。シュートのステップパター

ンにおいて、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=4.5$, ns).

表41 シュートのステップパターン

	G1 (n=108)	J1 (n=113)	J2 (n=97)
ジャンプシュート (%)	93.5	92.9	92.8
ステップシュート (%)	3.7	6.2	7.2
ランニングシュート (%)	2.8	0.9	0.0
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=4.5$, ns

iii) シュート結果

表 42 は、シュート結果を表したものである。シュート結果において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=12.8$, ns).

表42 シュート結果

	G1 (n=108)	J1 (n=113)	J2 (n=97)
ゴール (%)	66.7	51.8	53.6
ゴールキーパーセーブ (%)	19.4	29.4	26.8
枠外シュート (%)	13.9	16.1	16.5
シュートブロック→ゴールキーパーセーブ (%)	0.0	0.0	0.0
シュートブロック→ボール喪失 (%)	0.0	1.8	0.0
シュートブロック→ボール再獲得 (%)	0.0	0.9	3.1
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=12.8$, ns

c. 防御の全体的特徴

ア) 相手の攻撃成功率

表 43 は、相手の攻撃成功率を表したものである。相手の攻撃成功率において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=1.1$, ns).

表43 相手の攻撃成功率

	G1 (n=219)	J1 (n=179)	J2 (n=170)
相手の攻撃成功率(%)	33.8	25.7	30.6

$\chi^2=1.1$, ns

イ) 相手のシュート成功率

表 44 は、相手のシュート成功率を表したものである。相手のシュート成功率において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=2.1$, ns)。

表44 相手のシュート成功率

	G1 (n=119)	J1 (n=87)	J2 (n=112)
相手のシュート成功率(%)	56.3	47.1	42.9

$\chi^2=2.1$, ns

ウ) 相手のミスプレーの分析

い) 相手のミスの種類

表 45 は、相手のミスの種類を表したものである。相手のミスの種類において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=57.5$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べて相手のオーバーステップとオフENSIBフールが多いことが認められた。J2 は、J1 と比べて相手のキープミスが多いことが認められた。G1 は、J1 と比べてインターセプトとドリブルスティールが多いことが認められた。

表 46 はミスの種類をターンオーバー、テクニカルミス、被スティールの 3 つにまとめ、表したものである。3 つに分類した相手のミスの種類において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=27.7$, $p<0.05$)。J1 は G1 と比べてターンオーバーが多いことが認められた。J2 は、テクニカルミスが多いことが認められた。G1 は、日本の 2 チームと比べて被スティールが多いことが認められた。

表45 相手のミスの種類

	G1 (n=93)	J1 (n=87)	J2 (n=54)
ラインクロス (%)	4.3	2.3	7.4
オーバーステップ (%)	10.8 †	31.0 *	20.4
イリーガルドリブル (%)	3.1	1.2	1.8
キックボール (%)	4.3	3.4	3.7
オフENSIBフアール (%)	2.1 †	16.1 *	3.7
パッシブプレー (%)	0.0	0.0	1.8
パス・キャッチミス (%)	11.9	16.1	16.7
キープミス (%)	5.4	2.3 †	16.7 *
インターセプト (%)	48.4 *	26.4 †	27.8
ドリブルスティール (%)	9.7 *	1.2	0.0
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=57.5, p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

表46 3つに分類した相手のミスの種類

	G1 (n=93)	J1 (n=87)	J2 (n=54)
ターンオーバー (%)	24.7 †	54.0 *	38.9
テクニカルミス (%)	17.2	18.4	33.3 *
被スティール (%)	58.1 *	27.6 †	27.8 †
合計 (%)	100	100	100

ターンオーバー : ラインクロス, オーバーステップ, イリーガルドリブル

キックボール, オフENSIBフアール, パッシブプレー

テクニカルミス : パス・キャッチミス, キープミス

被スティール : インターセプト, ドリブルスティール

$\chi^2=27.7, p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ii) 相手のミスエリア

表 47 は, 相手のミスエリアを表したものである. 相手のミスエリアにおいて, チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=23.5, p<0.05$). 残差分析の結果, J1 は G1 と比べてフリ

ースローライン内での相手のミスが多いことが認められた。J2 は、サイドのエリアで相手のミスが多いことが認められた。G1 は、J2 と比べて自陣のバックコートエリアで相手のミスが多いこと、J1 と比べて敵陣のバックコートエリアでの相手のミスが多いことが認められた。

表47 相手のミスエリア

	G1 (n=93)	J1 (n=87)	J2 (n=54)
サイド(%)	6.5	8.0	20.4 *
フリースローライン内(%)	20.4 †	39.1 *	37.0
自陣のバックコート(%)	63.4 *	51.7	38.9 †
敵陣のバックコート(%)	9.7 *	1.1 †	3.7
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=23.5$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

iii) 相手のミス率

表 48 は、相手のミス率を表したものである。相手のミス率において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=3.4$, ns)。

表48 相手のミス率

	G1 (n=219)	J1 (n=179)	J2 (n=170)
相手のミス率(%)	42.5	48.6	31.8

$\chi^2=3.4$, ns

エ) フリースローを与えたプレーに関する分析

i) フリースローを与えたプレーのエリア

表 49 は、身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローを与えたプレーのエリアを表したものである。フリースローを与えたプレーのエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=15.0$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J2 は G1 と比べてサイドのエリアでフリースローを与えたプレーが多いこと、G1 は J2 と比べて自陣のバックコートでフ

リースローを与えたプレーが多いことが認められた。

表49 フリースローを与えたプレーのエリア

	G1 (n=87)	J1 (n=63)	J2 (n=58)
サイド(%)	1.1 †	4.8	12.1 *
フリースローライン内(%)	28.7	36.5	43.1
自陣のバックコート(%)	63.2 *	55.6	43.1 †
敵陣のバックコート(%)	6.9	3.2	1.7
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=15.0$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ii) 1回の防御あたりのフリースローを与えたプレーの回数

表 50 は、1回の防御あたりのフリースローを与えたプレーの回数を表したものである。一元配置の分散分析を行った結果、フリースローを与えたプレーの回数において、チーム間に有意な差は認められなかった ($F=0.3$, ns)。

表50 1回の防御あたりのフリースローを与えたプレーの回数

	G1 (n=219)	J1 (n=179)	J2 (n=170)	F	差
フリースロー回数/防御回数	0.39±0.72	0.35±0.66	0.34±0.65	0.3	-

数値はM±SDを示す

- : ns

オ) 数的関係

表 51 は、コートプレーヤーの数的関係を表したものである。コートプレーヤーの数的関係において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=64.6$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べて 5 対 6, 6 対 5 の数的関係が多いこと、またその他の数的関係も多いことが認められた。G1 は J1 と比べて 6 対 6 が多いことが認められた。

表51 数的関係

	G1 (n=309)	J1 (n=242)	J2 (n=228)
6対6 (%)	100.0 *	83.1 †	94.7
5対6 (%)	0.0 †	6.6 *	1.8
6対5 (%)	0.0 †	8.7 *	3.5
その他 (%)	0.0	1.6 *	0.0
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=64.6, p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

カ) 防御隊形

表 52 は、防御隊形を表したものである。防御隊形において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=865.5, p<0.05$)。また残差分析の結果、また J1 は、G1 と比べてオープンディフェンスが多いこと、他の 2 チームと比べて退場時の防御が多いことが認められた。J2 は、G1 と比べてオープンディフェンスが多いこと、他の 2 チームと比べてクローズドディフェンスが多いこと、J1 と比べて個別のマンツーマン防御が多いことが認められた。G1 は日本の 2 チームと比べてマンツーマン防御が多いことが認められた。

表52 防御隊形

	G1 (n=309)	J1 (n=242)	J2 (n=228)
クローズドディフェンス (%)	0.0 †	0.0 †	11.8 *
オープンディフェンス (%)	0.0 †	83.1 *	83.3 *
マンツーマン防御 (%)	100.0 *	0.0 †	0.0 †
個別のマンツーマン防御 (%)	0.0	0.0	1.4 *
退場時 (%)	0.0 †	16.9 *	3.5 †
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=865.5, p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

d. 防御の局面的特徴

ア) 被突破局面の分析

i) 相手の突破からシュートまたは身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数

表 53 は、相手の突破からシュートまたは身体接触を伴う攻撃活動の中断までにボールを保持した人数を表したものである。相手の突破からシュートまたは攻撃活動の中断までにボールを保持した人数において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=4.9$, ns)。

表53 相手の突破からシュートまたは攻撃の
中断までにボールを保持した人数

	G1 (n=309)	J1 (n=240)	J2 (n=227)
1人 (%)	65.0	64.2	64.8
2人 (%)	28.8	29.2	26.9
3人 (%)	5.8	5.8	6.2
4人以上 (%)	0.3	0.8	2.2
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=4.9$, ns

ii) 突破プレイヤーに対するマークの有無

表 54 は、相手の突破プレイヤーに対するマークの有無を表したものである。突破プレイヤーに対するマークの有無において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=13.4$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は J2 と比べてマークの有ることが多いこと、J2 は J1 と比べてマークの無いことが多いことが認められた。

表54 突破プレイヤーに対するマークの有無

	G1 (n=309)	J1 (n=241)	J2 (n=228)
マーク有り (%)	98.1	98.8 *	93.4 †
マーク無し (%)	1.9	1.2 †	6.6 *
合計 (%)	100	100	100

$\chi^2=13.4$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

iii) 突破プレーヤーに対する守り方

表 55 は、突破プレーヤーに対する守り方を、防御エリア、アクティブまたはリアクティブ、マーク中心またはボール中心の 3 つの項目に分けて表したものである。

オンザボールの突破プレーヤーに対峙する防御プレーヤーが防御を開始するエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=143.4$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べてフリースローライン内が多いことが認められた。J2 は G1 と比べてフリースローライン内とサイドのエリアが多いこと、G1 は、J2 と比べて自陣のバックコートが多いこと、J1 と比べて敵陣のバックコートが多いこと認められた。

ボール保持後の突破プレーヤーに対するプレー方法において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=20.4$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 と J2 は、G1 と比べてリアクティブな活動が多いこと、G1 は日本の 2 チームと比べてアクティブな活動が多いことが認められた。

ボールを保持した瞬間の突破プレーヤーに対するマークの仕方において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=118.9$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 と G1 は J2 と比べてマーク中心が多いこと、J2 は他の 2 チームと比べてボール中心が多いことが認められた。

表55 突破プレーヤーに対する守り方

		G1 (n=305)	J1 (n=239)	J2 (n=215)
エリア ^{a)}	サイド(%)	1.6 †	9.6	18.6 *
	フリースローライン内(%)	9.2 †	26.0 *	40.0 *
	自陣のバックコート(%)	83.9 *	63.6	40.5 †
	敵陣のバックコート(%)	5.2 *	0.8 †	0.9
アクティブ／リアクティブ ^{b)}	アクティブ(%)	55.4 *	38.9 †	38.6 †
	リアクティブ(%)	44.6 †	61.1 *	61.4 *
マーク中心／ボール中心 ^{c)}	マーク中心(%)	96.7 *	89.5 *	62.8 †
	ボール中心(%)	3.3 †	10.5 †	37.2 *

a) $\chi^2=143.4$, $p<0.05$

b) $\chi^2=20.4$, $p<0.05$

c) $\chi^2=118.9$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

イ) シュート局面の分析

い) 最終プレイヤーに対する守り方

表 56 は、最終プレイヤーに対する守り方を、突破プレイヤーの分析結果と同様に、防御エリア、アクティブまたはリアクティブ、マーク中心またはボール中心の 3 つの項目に分けて表したものである。

オンザボールの最終プレイヤーに対峙する防御プレイヤーが防御を開始するエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=50.9$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べてサイドのエリアが多いこと、J2 は G1 と比べてフリースローライン内が多いこと、G1 は日本の 2 チームと比べて自陣のバックコートが多いことが認められた。

ボール保持後の最終プレイヤーに対するプレー方法において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=2.4$, ns)。

ボールを保持した瞬間の最終プレイヤーに対するマークの仕方において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=15.8$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べてボール中心が多いこと、G1 は J1 と比べてマーク中心が多いことが認められた。

表56 最終プレイヤーに対する守り方

		G1 (n=107)	J1 (n=83)	J2 (n=73)
エリア ^{a)}	サイド(%)	4.7 †	27.7 *	24.7
	フリースローライン内(%)	40.2 †	48.2	64.4 *
	自陣のバックコート(%)	55.1 *	24.1 †	11.0 †
	敵陣のバックコート(%)	0.0	0.0	0.0
アクティブ/リアクティブ ^{b)}	アクティブ(%)	31.8	21.7	27.4
	リアクティブ(%)	68.2	78.3	72.6
マーク中心/ボール中心 ^{c)}	マーク中心(%)	57.0 *	30.1 †	35.6
	ボール中心(%)	43.0 †	69.9 *	64.4

a) $\chi^2=50.9$, $p<0.05$

b) $\chi^2=2.4$, ns

c) $\chi^2=15.8$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ii) 最終プレイヤーに対する隣の防御プレイヤーの守り方

表 57 は、最終プレイヤーに対する隣の防御プレイヤーの守り方を、突破プレイヤーの分析結果と同様に、防御エリア、アクティブまたはリアクティブ、マーク中心またはボール中心の 3 つの項目に分けて表したものである。

オンザボールの最終プレイヤーに対峙する隣の防御プレイヤーが、防御を開始するエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=85.5$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 は G1 と比べてサイドのエリアで防御を開始することが多いこと、J2 は G1 と比べてフリースローライン内が多いことが認められた。G1 日本の 2 チームと比べて自陣のバックコートが多いこと、J1 と比べて敵陣のバックコートが多いことが認められた。

ボール保持後の最終プレイヤーに対する隣の防御プレイヤーのプレー方法において、チーム間に有意な差は認められなかった ($\chi^2=1.5$, ns)。

ボールを保持した瞬間の最終プレイヤーに対する隣の防御プレイヤーのマークの仕方において、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=47.8$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J1 と J2 は G1 と比べてボール中心であることが多いこと、G1 は日本の 2 チームと比べてマーク中心が多いことが認められた。

表 57 最終プレイヤーに対する隣の防御プレイヤーの守り方

		G1	J1	J2
		(n=255)	(n=196)	(n=182)
エリア ^{a)}	サイド (%)	6.3 †	19.9 *	16.5
	フリースローライン内 (%)	33.4 †	49.5	61.5 *
	自陣のバックコート (%)	56.8 *	30.6 †	21.4 †
	敵陣のバックコート (%)	3.5 *	0.0 †	0.6
アクティブ/リアクティブ ^{b)}	アクティブ (%)	12.9	16.8	13.7
	リアクティブ (%)	87.1	83.2	86.3
マーク中心/ボール中心 ^{c)}	マーク中心 (%)	63.9 *	38.8 †	33.5 †
	ボール中心 (%)	36.1 †	61.2 *	66.5 *

a) $\chi^2=85.5$, $p<0.05$

b) $\chi^2=1.5$, ns

c) $\chi^2=47.8$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ウ) 相手のシュートプレーに関する分析

i) 相手のシュートエリア

表 58 は、相手のシュートエリアを表したものである。相手のシュートエリアにおいて、チーム間に有意な差が認められた ($\chi^2=58.5$, $p<0.05$)。残差分析の結果、J2 は G1 と比べてポストシュートとロングシュートを打たれることが多いこと、G1 は日本の 2 チームと比べてカットインシュートを打たれることが多いことが認められた。

表58 相手のシュートエリア

	G1 (n=129)	J1 (n=92)	J2 (n=116)
サイド(%)	36.4	40.2	28.4
ポスト(%)	2.3 †	7.6	17.2 *
カットイン(%)	52.7 *	25.0 †	23.3 †
ミドル(%)	4.7	12.0	6.9
ロング(%)	3.9 †	15.2	24.1 *
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=58.5$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ii) 相手のシュート結果

表 59 は、相手のシュート結果を表したものである。相手のシュート結果において、チー

表59 相手のシュート結果

	G1 (n=119)	J1 (n=87)	J2 (n=112)
ゴール(%)	50.1 *	47.1	42.8
ゴールキーパーセーブ(%)	41.0	41.4	31.3
枠外シュート(%)	6.9 †	8.0	22.3 *
シュートブロック→ゴールキーパーセーブ(%)	0.7	0.0	0.9
シュートブロック→ボール喪失(%)	0.0	0.0	0.9
シュートブロック→ボール再獲得(%)	0.7	3.5	1.8
合計(%)	100	100	100

$\chi^2=25.7$, $p<0.05$

* : 有意に多い † : 有意に少ない

ム間に有意な差が認められた ($\chi^2=25.7$, $p<0.05$). 残差分析の結果, J2 は G1 と比べて相手チームの枠外シュートが多いことが認められた. G1 はゴールインが多いことが認められた.

(2) 選手およびチームの育成方針

() は分析者の補足を示す.

①A 氏

a. 個の育成方針

第一に, 私たちは子ども達の人格形成を重視しています. 競技種目に特化した専門家を育てるのではなく, 多様で複合的な練習を行います. なぜなら U10 の選手が将来, どの道へ進むかわからないからです. できるだけ多くの可能性を持たせながら育てることが大切なので, そのようにしています.

また, チームスポーツなので, フェアプレーや他の人に対するリスペクト, 時間通りに行動すること, 目標に向かって熱心に取り組むことを重視しています. スポーツを通して子どもたちは自尊心を高めることができると考えています. 12 歳以下の選手にとってはこれらのことが大切だと考えています.

b. チームの育成方針

私たちの 1 シーズンにおける目標は, ある順位に到達することではなく, 選手を育成することです. 例を挙げるとすれば, もし今 8 歳のチームを持っているとしたら, 私の目標は 1 位や 2 位をとることではなく, このシーズン中にきちんとしたステップシュート, きちんとしたマンツーマン防御と連携プレーを身につけさせることです.

1 つ上のカテゴリーへ行くと, また他の目標を持ちます. そのため, 私にとって順位は重要ではありません. チームあるいは個人として, U10 のシーズン目標は, 個人を育成することです.

もちろん子どもたちにとっても何か目標が必要ですし, スポーツ選手なので勝ちたいと思うのは当然です. 私たちのシーズン目標は地区大会優勝とザクセン州大会優勝です. 試合ではプレッシャーがかかり, 練習とは異なることをたくさん学べます. 良い練習を行えば試合で勝てますが, 試合で勝つために 10 人をプレーさせて 5 人はベンチに座らせるということはしません. 子どもに対して試合時間を均等に与えることを重視して, 試合で負け

る経験も大切であると考えています。

②B氏

a. 個の育成方針

基本的な投げ方、シュートフォームを身につけさせたいと考えています。（シュートフォームで）肘が下がっている子どもに対しては指導するようにしています。また、パス・キャッチに関しては「できないようなら試合には出られない」というほど徹底して指導しています。学校（将来進学する中学校や高校）によっていろいろなスタイルがありますが、どこにいても通用するような基礎・基本の指導を目指しています。

また、守り方や攻め方の考え方も身につけさせたいと考えています。守り方とは、脚の運び方やフットワーク、隣の防御プレイヤーがフォローできるようなプレーのことです。

b. チームの育成方針

小学生のレベルでは、防御がある程度強くなれば大会で上位にいけると思っています。しっかりと防御をすればある程度守れ、ロースコアにもちこめるため、強いチームにも勝てる可能性があります。もちろん得点しなければ勝てませんが、特に小学校・中学校においては攻撃より防御が大切であると考えています。

（J1の）選手が（体格的に）小さいこと、防御を強化していることから、防御からの速攻で得点しようと考えています。ゴールキーパーの球出し（コートプレイヤーへ速攻のパスを出すこと）もチームのひとつの得点源です。（J1には）強いシュートを打てるような身体の大きな選手が集まらないため、このような小さい選手ならではの方針を掲げています。

③C氏

a. 個の育成方針

4年生からトリッキーなプレー、さまざまなプレー（バックパス、バックスライド、スピンプス、ループパス、フックパス、うでぬきパス）を、基本プレーの一部としてトライさせています。パスを選択する能力、シュートを自由に打つ能力、決まりごとの中で防御する能力を身につけさせたいと考えています。パスでは、どこからパスを出すのか、どのくらいの強さでバウンドパスするのか、ボールの空気圧を考えながらプレーすることを意識させています。

公式戦では判断力や「試合観」を身につけさせたいと考えています。「試合観」とは、「ここで慌てていっちゃだめだろう」、「いつもやっていることができないときにどうするか」というような、試合に勝つための戦術的思考を意味しています。子どもたちは試合の残り30秒、2点差で負けていると焦ることがよくあります。しかし、そのような状況でも「まだ焦らなくていい」というような試合観を持たせたいと考えています。また時間に合わせてボールを回したり、遅攻（セットオフense）にしたり、「今この場面では速攻で点数を取っておかなくちゃいけない」というような、時間を意識したゲーム運びを行えるようにさせたいです。

b. チームの育成方針

チームとして全員でどのように守るかを理解させているので、防御は計算のもと（事前の計画を実行し）勝利を引き入れることができると考えています。

1対1に魅力を感じるような身体の大きい子やパワフルな子と出会っていないため、チームで攻めなかったら勝てないと考えています。セットオフense勝負でも勝てないと考えています。

(3) 練習の内容と方法

①G1

火曜日と木曜日に90分の練習を行っています。チームはU8、U10、U12に分かれています。能力に合わせて練習や試合を行わせたいと考えているので、U10のチームでは8歳から12歳の選手と一緒に練習を行っています。

90分の練習の中で基本的には、ウォーミングアップ30分（ゲーム形式、ボールを扱う、Athletik^(注5)）、メイン40分（基礎的な練習）、最後に20分通常のハンドボールのゲームを行います（表60）。

表60 G1の主な練習内容

練習メニュー	時間：分
ウォーミングアップ （ボールアップ）	30
メインテーマ	40
ゲーム	20
合計	90

メインテーマに即したウォーミングアップを行わせませす。練習テーマによっては、練習形式がドリルあるいはゲームのいずれかに偏ることがあります。例えば、ステップシュートをテーマとした練習はこのような内容で行います（表 61）。

表61 G1の主な練習内容例

テーマ：ステップシュート	
練習メニュー	時間：分
壁当てゲーム	20
箱当てゲーム	20
2対2	30
ゲーム	20
合計	90

いつも同じ練習を行えば、選手は考えずに丸呑みするだけで、プレーするときに自主性がなくなる上に、（反復練習が）コンディショントレーニングになってしまうと考えています。そのため、多面的で複合的な練習を行っています。専門的で一面的な練習は行いません。（練習での）中心的なテーマは、ゲーム特有の基礎スキルであるドリブル、キャッチ、シュート、（味方との）協同プレー、コーディネーション、コンディションの6つで、それらに加えて他競技を経験させることを重視しています。これらのことを全て組み合わせた練習を心がけています。

練習内容を常に変えることによって、選手は常に考えてプレーしなければなりません。それによって、子どもたちは早くて正しい決断を下せるようになると考えています。また、たくさんを経験して、プレーの引き出しを増やすことが大切なので、いつも複合的な練習を行わせています。子どもの自主性と創造性を支援し、自分でゲーム状況を解決させるようにしています。

②J1

練習は週に3回、水・土・日曜日に行っています。土曜日と日曜日の練習は1年生から6年生まで全員（約40人）で、水曜日は希望者だけで練習を行っています。水曜日の練習には1・2年生はほとんど来ませんが、高学年はだいたい全員来ます。

1日練習では、午前中は全員、午後からは4年生以上（約20名）で練習しています。1

年生は遊んでしまうので、指導者が4, 5人いないと練習できません。しかし小さい子が上の子の練習を見ること、一緒に体感することは少しでもうまくなる早道だと思っているので、練習を学年で分けたりはしていません。昔からこのようなやり方で練習をしています。

練習の内容は学年に関わらずある程度同じですが、低学年にはあまり難しいことはさせずに単発のシュート練習などを行わせています。パス・キャッチの練習としては、3角パスや対人パスをよく行っています。練習は、いつも同じような流れで行っています(表62)。基礎を重視しているためあまり細かい練習は行っていません。監督の不在時は、コーチ陣が普段と同じ練習をやっています。

表62 J1の主な練習内容

練習メニュー	時間：分
準備体操	5
ウォーミングアップ/ 2～4人組でフリーアップ	10
ダッシュ・フットワーク	10
パス・キャッチ	10
ゴールキーパー練習	10
シュート練習	10
ハーフ速攻(2対1)	15
休憩	5
ゲーム	40
合計	115

③J2

練習は月・水・金・土の週に4回行っています。月・水・金は、全国大会までは16時30分から19時までですが、そのうち30分は準備などの時間であるため、実質は2時間です。土曜日は9時から12時、13時から15時に練習しています。夏休みに入ってから全国大会(8月上旬)までの1か月は、週4回9時から16時に練習を行っています。練習は、いつも同じような練習を行っています(表63, 表64)。練習の順序として、まずは準備体操、次にXハンドボールクラブの指導者から教わったボールアップ、そしてCoordination^(注6)トレーニングを行います。Coordinationトレーニングは2種類行っています。ひとつはラダートレーニングなどの反復で、神経系のためのトレーニングです。もうひとつは、

判断力を伴いながらさまざまな動きを多様に行うトレーニングです。子どもに筋肉がつきすぎないように配慮しながら、体幹トレーニングも取り入れています。次に、3角パスの形式でパス・キャッチの練習を行います。パス・キャッチのための練習は多く、時間も長いです。

表63 J2の試合期以外の主な練習内容

練習メニュー	時間：分
準備体操	10
ウォーミングアップ（ボールアップ）	30
Coordination・体幹	15
フットワーク	15
パス・キャッチ（3角パス，遠投）	15
3対3（半面，全面での攻防）	15
ハーフ速攻（2対1）	10
ポスト練習	15
休憩	10
攻撃練習	30
合計	165

表64 J2の試合期の主な練習内容

練習メニュー	時間：分
準備体操	10
ウォーミングアップ（ボールアップ）	30
Coordination・体幹	15
フットワーク	15
パス・キャッチ（3角パス，遠投）	15
3対3（半面，全面での攻防）	15
ハーフ速攻（2対1）	10
ポスト練習	15
休憩	10
攻撃練習	30
6対6，練習試合	120
合計	285

練習の際には、顔をふってからパスをするなど、パスをする前に判断をさせるような動きを入れています。そして、半面または攻防の3対3，6:0 防御に対する、「リズム取り」のチーム練習を行います。1対1の練習は行いません。攻撃時の1対1における脚の使い

方は、3対3、3対6の中で行っています。攻撃が3人・防御が6人の攻防で、攻撃は「リズムを取る」練習のみで、その中でどこが空くのかを判断させています。また、ポストプレーヤーの練習も多いです。

試合前はこのような流れの練習のあとに、6対6を行います。また、素早い攻防の切り替えの練習を成立させるために、ゴールキーパーの球出し練習をさせています（表 64）。

4. 考察

(1) G1

攻撃に関するゲームパフォーマンスに着目すると、全体的特徴において、G1のミスエリアは、自陣のフリースローラインからセンターラインの間のエリアとセンターラインから敵陣のフリースローラインの間が多かった（表 29）。このことから、攻撃と防御の対峙が敵のゴールから遠いエリアで開始していると推察される。また、1回の攻撃あたりのパス回数が少なく（表 33）、きっかけ局面では、ポジションホールドが多く用いられていた（表 35）。これらのことから、攻撃においては、ポジションやシステムを変えずに攻撃を開始することによって、個人で攻めやすい状況を作っていることがわかる。個人で突破する際の防御プレーヤーとの対峙の仕方においては、ずれた位置に入ることが多く（表 38）、シュートは、カットインシュートが多く、サイドシュートが少なかった（表 40）。これらのことから、少ないパス回数で、ボールを持つ前に動いて防御プレーヤーの間を突破することを試みようとし、個人で攻撃を開始してシュートを生み出していることがわかる。

防御の全体的特徴において、相手のミスの種類は、被スティールが多かったこと（表 45、表 46）から、G1は相手からボールを奪うプレーが多いと捉えられる。その理由として、突破プレーヤーに対して、自陣および敵陣のバックコートの積極的な位置で防御を開始し、相手のパスやシュートの制限または進路の遮断のいずれかを行うアクティブな活動を行っていること（表 55）、最終プレーヤーに対して、自陣のバックコートの積極的な位置で防御を開始し、マーク中心に守ることが多いこと（表 56）が考えられる。これらのことから、防御においては、味方との連携は少なく、個人の積極的なプレーが多いと推察される。

A氏の個の育成方針は、「人格形成」、「スポーツを通して…自尊心を高める」という語りから、ハンドボールを用いて子どもの成長を支援することであると理解できる。一方、チームの育成方針は、「順位ではなく、選手の育成」、「個人の育成」という語りから、団体競技としてチームで活動しているが、チームとしての結果より個の育成を重視していると理

解できる。また、「試合で…たくさん学べる」、「負ける経験も大切」という語りから、選手一人ひとりに様々な経験を積ませることを重視していると理解できる。

練習の内容と方法は、「多面的」、「複合的」、「プレーの引き出しを増やす」、「子どもの自主性と創造性」、「自分でゲーム状況を解決」という語りから、様々な状況に応じて自分の判断でプレーできるようなゲーム能力の養成を重視した育成方針であると捉えられる。これらのことから、G1では、ゲーム能力を習熟させる方針で、複合的な練習の内容と方法を採用していると推察される。

(2) J1

攻撃に関するゲームパフォーマンスに着目すると、J1は1回の攻撃あたりのパス回数がG1より多く（表33）、きっかけ局面では、ポジションチェンジやシステムチェンジが多く用いられていた（表35）。これらのことから、パスを多く回しながら、ポジションチェンジなどのチーム戦術を用いて攻撃を開始することによって、チームで攻めやすい状況を作っていることがわかる。また、個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方においては、正面に入ることが多く（表38）、シュートでは、カットインシュートが少なく、サイドシュートが多かった（表40）。これらのことから、オフザボール時の動きで相手より有利な位置を取ることよりも、ボールを持ってからのスピードや動作の変化を用いたフェイント（Müller et al., 1992, p.18）を重視して突破を試みようとし、その後パスを繋いでサイドのエリアでシュートを生み出していると推察できる。

防御では、相手からボールを奪うプレーが少なかった（表45, 表46）。その理由として、突破プレイヤーに対して、フリースローライン内の消極的な位置で防御を開始することが多く、相手のパスやシュートの制限または進路の遮断のいずれも行わないリアクティブな活動を行っていること（表55）、最終プレイヤーに対して、サイドのエリアの消極的な位置で防御を開始し、ボール中心に守ることが多いこと（表56）が考えられる。また、相手のシュートエリアについては、カットインシュートが少なく、ロング・ミドルシュートが多かった（表58）。これらのことから防御においては、ゴールエリアに最も近く、コート中央から放たれるシュート成功率の高いカットインシュート（田中ほか, 2009）を容易に達成されないように、味方と連携して防御プレイヤーの間を突破されない防御プレー、すなわち個人の消極的な防御が多いと推察される。このことは、シュート成功率の低いロング・ミドルシュート（田中ほか, 2009）を誘発するような防御プレーが多いとも解釈できる。

B氏の個の育成方針は、「基本的な投げ方、シュートフォームを身につけさせたい」、「パス・キャッチに関しては…徹底して指導を行っている」、「脚の運び方やフットワーク」という語りからハンドボールに必要な動作の習熟であると理解できる。一方チームの育成方針は、「防御である程度強くなれば大会で上位にいける」、「攻撃より防御が大切」という語りから、攻防の両局面の育成ではなく、勝つために防御を強化しようとしていると理解できる。また、「強いシュートを打てるような身体の大きな選手が集まらない」、「小さい選手ならではの方針」という語りから、チームの構成メンバーの運動能力や体格に応じて最も勝利に近づける戦術を理解させ身につけさせることであると推察される。

練習の内容と方法は、「練習の内容は学年に関わらずある程度同じ」、「練習は、いつも同じような流れ」という語りから、反復練習によって動作および基本的な戦術の習熟を目指していると理解できる。これらのことは、チームの構成メンバーに適した戦術の習得を目指すというチームの育成方針を考え合わせると、子どもたちに多くのことを考えさせたり、判断させたりするのではなく、決められた動きを自動的に反復できるようにさせる（永井，2010）育成方針であると捉えられる。これらのことから、J1では、ハンドボールに必要な技術・戦術を習熟させる方針で、それらを反復することで身につけさせるような練習の内容と方法を採用していると推察される。

(3) J2

攻撃に関するゲームパフォーマンスに着目すると、全体的特徴において、J2は敵陣のフリースローライン内のエリアでのミスが多く（表 29）、ミスの種類はオーバーステップとオフフェンシブファールが多く、被スティールが少なかった（表 27, 表 28）。相手の防御プレイヤーの身体接触を伴う攻撃活動の中断によってフリースローが与えられたプレーの回数は、G1より少なかった（表 32）。きっかけ局面では、システムチェンジ、ポジションチェンジ、ポジションチェンジ+システムチェンジを行うことが多かった（表 35）。個人で突破する際の防御プレイヤーとの対峙の仕方においては、正面に入ることが多く、ずれた位置に入ることが少なかった（表 38）。このことから、スピードや動作の変化を用いたフェイント（Müller et al., 1992, p.97）を用いて突破、シュートしようとしていると推察される。突破局面からシュート局面で用いられた戦術は、グループ戦術が多く（表 37）、それはサイドプレイヤーとバックプレイヤーによる同時攻撃が多かった（表 39）。シュート局面では、サイドシュートが多く、カットインシュートが少なかった（表 40）。これらのことから、J2

は防御の間を突破することよりも、相手の防御プレイヤーと間合いを取りながらサイドまで攻撃を展開することを優先していると推察される。

防御の全体的特徴において、相手の攻撃活動を中断し、相手にフリースローを与えたプレーのエリアは、サイドのエリアが多く、自陣のバックコートでは少なかった（表 49）。相手のミスはサイドのエリアで多く、自陣のバックコートで少なかった（表 47）。ミスの種類はキープミスが多かった（表 45）。このことから J2 は、ボールを獲得しにいくような防御プレーは少ないと推察される。防御隊形は、クローズドディフェンス、オープンディフェンス、個別のマンツーマン防御が多かった（表 52）。このことから、J2 は異なる防御隊形を習得すること、また、異なる攻撃隊形に対して調整しながら防御するチーム戦術（Trosse, 1988, p.47）を重視していると推察される。突破局面では、突破プレイヤーに対してマークの無いことが多く（表 54）、自陣のフリースローライン内とサイドのエリアに位置し（表 55）、リアクティブにボール中心に守ることが多かった（表 55）。また、オンザボールの最終プレイヤーに対する防御プレイヤーは、自陣のフリースローライン内に位置することが多く、自陣のバックコートに位置することが少なかった（表 56）。最終プレイヤーが突破した側の隣の防御プレイヤーは、自陣のフリースローライン内に位置することが多いこと、自陣のバックコートに位置することが少ないこと、ボール中心に守ることが多かった（表 57）。相手のシュートエリアは、ポストとロングシュートが多く、カットインシュートが少なかった（表 58）。これらのことから、J2 は、フリースローライン内の消極的な位置で、攻撃に対して 1 対 1 ではなく、チームとして組織的な防御をしていると推察される。

C 氏の個の育成方針は、「4 年生からはトリッキーなプレーを基本プレーの一部としてトライさせる」こと、「パスを選択する能力」、「シュートを自由に打つ能力」、「決まりごとの中で防御する能力」、「試合に勝つための戦術的思考」を身につけさせたいと理解できる。一方、チームの育成方針は、「防御は計算のもと（事前の計画を実行し）勝利を引き入れることができる」、「チームで攻めなかったら勝てない」、「セットオフense勝負では勝てない」というような、試合で勝つことを目指して、ゲーム構想を立てていると理解できる。

練習の内容と方法は、「パス・キャッチのための練習が多く、時間も長い」こと、『リズム取り』のチーム練習の中で「1 対 1 における脚の使い方」などを練習すること、これらが「いつも同じような練習」メニューの中で行われることから、ドリル形式の練習の中で起きたプレー一つひとつに対して細かい指導や助言をして、基礎技術、攻撃および防御の戦術を身体で理解させることを目指していると推察される。

(4) ドイツと日本における「個の育成」内容の相違

ドイツと日本の両国においては、「個の育成」を目的に、日本ではオープンディフェンスの推奨、ドイツではコート全面または半面でのマンツーマン防御が義務化されている。これらは、防御プレー方法に直接的に影響し、それに対する攻撃プレー方法にも間接的に影響すると考えられる。

しかし、ドイツと日本両国の記述的ゲームパフォーマンス分析の結果から、攻撃成功率、シュート成功率、ミス率に有意な差はなかった。両国ではそれぞれ異なる競技規則で試合が行われ、競技規則がゲームパフォーマンスに与える影響は避けられないが、セット局面における全体的特徴に違いはないことが明らかとなった。

本章の結果から、新競技規則導入後 1X 年目において国内トップレベルであった G1 は、多様な運動経験の蓄積を重視した「個の育成」を目指していること、ゲーム能力の向上を重視していると推察される。一方、新競技規則導入後 X 年目において国内トップレベルであった J1 および J2 は、ハンドボールに必要な動作の習熟を重視した「個の育成」を目指していること、チームのメンバーに適した戦術を身につけさせていることから選手一人ひとりに高い専門性を求めていると推察される。

このように、それぞれの国では、育成年代初期から「個の育成」を目指すという言葉は同じであるが、その方針や内容は異なることが推察される。

5. 要約

本章の目的は、ドイツと日本両国の育成年代初期のトップチームにおける試合でのゲームパフォーマンス、現場の指導者の持つ「個の育成」方針、練習の内容と方法を明らかにし、両国の選手の育成・強化に関する取り組みをトップチームの活動を手掛かりに提示することであった。ドイツおよび日本のトップチームを対象に、チームのゲームパフォーマンス分析および指導者に対するインタビュー調査を行った結果、以下の知見が得られた。

ドイツと日本両国のゲームパフォーマンス分析の結果から、攻撃成功率、シュート成功率、ミス率に有意な差はないこと、すなわち各国ではそれぞれ異なる競技規則で試合が行われているが、セット局面における全体的特徴に違いはないことが明らかとなった。一方、プレー方法の相違について着目すると、G1 では、全ての局面を一人で解決する試みが多いこと、J1 と J2 では攻撃および防御において個人の役割を局面ごとに分担し、個人がチームの歯車となるような役割を果たす試みが多いことが推察された。

G1, J1, J2における個の育成方針は、いずれもハンドボールの基本的なスキルを身につけさせることであった。しかし、それを養成するための練習の内容と方法について、G1はゲーム能力を習熟させる方針で、複合的な練習の内容と方法を採用し、J1およびJ2はハンドボールに必要な技術・戦術を習熟させる方針でそれらを反復することで身につけさせるような練習の内容と方法を採用していることから、その理念は異なることが推察された。

これらのことから、日本とドイツ両国のトップチームにおいて「個の育成」を目指すという言葉は同じであるが、その方針や内容は異なることが推察された。

第4章 総括

1. 結論

近年、球技では、長期的な選手育成を目的に国ごとや競技種目ごとに様々な取り組みが行われている。ハンドボールに着目すると、ドイツと日本では、育成年代初期の試合で身体的特徴に対する適応および「個の育成」を目的に特別な競技規則が導入されている。具体的には、「個の育成」のために、ドイツではコート全面または半面でのマンツーマン防御が義務化され、日本ではオープンディフェンスが推奨されている。しかし、日本の育成年代初期における選手育成活動では、協会の掲げる理念が全国に浸透しているとは言えない。

もし、ドイツおよび日本ハンドボール協会が育成年代初期でのこれまでの選手育成において、どのような問題を発見し、どのような理念、目標、プログラムを作成し、それを育成年代初期の指導に携わる指導者に向けてどのように発信してきたのか、すなわち育成年代初期の選手を育成する取り組みの歴史の変遷について明らかにすることができれば、現在の選手育成活動をより詳細に理解できるであろう。

さらに、指導者の選手育成に関する考え方、練習の内容と方法、その成果としてのゲームパフォーマンスをドイツと日本の育成年代初期のトップチームおよびその指導者を対象に明らかにでき、これらを両国間で比較することができれば、より明確に両国の特徴が現れ、日本の育成年代初期のコーチングにおける指導の方向性を示すことができる有用な手がかりが得られるであろう。

しかし、先行研究を概観すると、一貫指導に関する研究では、調査時点の選手育成活動の内容を明らかにすることを目的としており、そのような取り組みが行われた背景、育成活動に関する変革の歴史の変遷については明らかにしていない。また、育成年代初期の選手に対する指導に関する研究では、具体的な育成の方針や個別のチームの練習成果をゲームパフォーマンスとして明らかにしてはいない。

そこで本論では、以下の2つの課題を解決することによって、ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷と現状を明らかにし、今後日本の育成年代初期の選手育成に関する新たな取り組みを行うための知見を提言することを目的とした。

課題Ⅰ ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷

課題Ⅱ 育成年代初期のハンドボールにおける「個の育成」を目指した競技規則の下での選手育成活動について：ドイツと日本のトップチームを比較して

(1) ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷

第2章では、ドイツおよび日本のハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷を明らかにし、過去の取り組みの問題点を明らかにすることによって、今後育成年代初期の選手育成に関する新たな取り組みを行うための知見を提言することを目的とした。この目的を達成するために、ドイツハンドボール協会および日本ハンドボール協会が指導者向けに発行している機関誌の1988年から2018年までの記事を対象に、育成年代初期の選手育成活動に関する記事を選別した後、テキストマイニング分析を行った。本章で得られた知見は以下の通りである。

- 1) ドイツにおける育成年代初期の選手育成活動の変遷を、1988年から5年ごとに区切ると、まず、ゲーム能力の系統的かつ長期的な養成に関する理念を提示することによって「子どものハンドボール」の必要性を促し、次に、遊びの中で積極的な防御を習得させること、攻撃において個を育成することを中心的なテーマとしていた。その後、一貫指導体制を確立させ、義務化した試合形式を実践に適用させ、子どもが楽しめる練習で攻撃力を育成していったと解釈できた。
- 2) 日本における育成年代初期の選手育成活動の変遷を、1988年から5年ごとに区切ると、まず、個人の攻撃プレー方法を詳細に説明し、次に、海外の育成年代初期における選手育成活動の紹介を中心的なテーマとしていた。その後、NTSを開始し、内容報告、活動報告をし、新ゲーム形式の理念を提示したと解釈できた。これらのことから、育成年代初期における選手育成活動は、2002年から始まったNTSと共に組織化されたと捉えられそうではある。しかし、NTSでは、育成年代初期特有の年齢カテゴリーがなかったことから、育成年代初期における選手育成活動は、2015年の全国小学生ハンドボール大会において新ゲーム形式が導入されてから本格化したと推察された。
- 3) 日本の育成年代初期が身につけさせるべき内容に着目すると、技術力および戦術力の養成が重視されていた。しかし、それらをどのように養成するのかについて、すなわち練習の方法については、過去31年間で中心的なテーマとなっていなかった。もし、このことに関して議論し、発信していかなければ、育成年代初期特有の練習方法は全国で浸透せず、成人と同じような練習が育成年代初期において行われてしまうと考えられる。
- 4) 今後日本が育成年代初期の選手育成活動に関する新たな取り組みをしていくためには、選手育成の初期段階において、技術力や戦術力などの個人の競技力を構成するそれぞれの要素ではなく、それらを全て含めたゲーム能力の養成を重視しながら、ゲームを中心

とした練習の方法を提示していく必要があると考えられる。さらに、選手育成の初期段階においてどのような選手を養成すべきなのかを提示するとともに、その目標像を具現化できるような競技規則を、「推奨」ではなく「義務化」する必要があると考えられる。

(2) 育成年代初期のハンドボールにおける「個の育成」を目指した競技規則の下での選手育成活動について：ドイツと日本のトップチームを比較して

第3章では、ドイツと日本両国の育成年代初期のトップチームにおける試合でのゲームパフォーマンス、現場の指導者の持つ「個の育成」方針、チームの育成方針、練習の内容と方法を明らかにし、両国の選手の育成・強化に関する取り組みをトップチームの活動を手掛かりに提示することを目的とした。ドイツおよび日本のトップチームを対象に、チームの記述的ゲームパフォーマンス分析および指導者に対するインタビュー調査を行った結果、以下の知見が得られた。

- 1) ドイツと日本両国のゲームパフォーマンス分析の結果から、攻撃成功率、シュート成功率、ミス率に有意な差はないこと、すなわち各国ではそれぞれ異なる競技規則で試合が行われているが、セット局面における全体的特徴に違いはないことが明らかとなった。一方、プレー方法の相違について着目すると、G1では、全ての局面を一人で解決する試みが多いこと、J1とJ2では攻撃および防御において個人の役割を局面ごとに分担し、個人がチームの歯車となるような役割を果たす試みが多いことが推察された。
- 2) G1、J1、J2における個の育成方針は、いずれもハンドボールの基本的なスキルを身につけさせることであった。しかし、それを養成するための練習の内容と方法について、G1はゲーム能力を習熟させる方針で、複合的な練習の内容と方法を採用し、J1およびJ2はハンドボールに必要な技術・戦術を習熟させる方針で、それらを反復することで身につけさせるような練習の内容と方法を採用していることから、その理念は異なることが推察された。
- 3) これらのことから、日本とドイツ両国のトップチームにおいて「個の育成」を目指すという言葉は同じであるが、その方針や内容は異なることが推察された。

(3) 論文全体の結論

ドイツにおける育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷から、ドイツでは、1988年から一貫して、練習で設定された状況の解決を選手が試みることで技術力と戦術力が統

合されたゲーム能力の育成を目指していると捉えられた。そして、そのような練習の内容と方法の実現へと方向付けるために、2003年に育成年代初期の試合においてマンツーマン防御の採用が義務化された時が育成活動の転換点であったと解釈できた。この歴史の変遷を踏まえて、201X年に国内トップチームであったG1では、ゲーム能力を習熟させる方針で、複合的な練習の内容と方法を採用し、試合では全ての局面を一人で解決することが多いことが推察された。

一方、日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史の変遷から、日本では、攻撃および防御における技術力と戦術力の養成が中心的なテーマであったと捉えられた。しかし、それらをどのように養成するのかについて、すなわち練習の方法については、過去31年間で中心的なテーマとなっていなかった。この歴史の変遷を踏まえて、201X年に国内トップチームであったJ1およびJ2では、ハンドボールに必要な技術・戦術を習熟させる方針で、それらを反復することで身につけさせるような練習の内容と方法を採用し、試合では個人の役割を局面ごとに分担し、個人がチームの歯車となるような役割を果たす試みが多いことが推察された。

今後日本が育成年代初期の選手育成活動に関する新たな取り組みをしていくためには、選手育成の初期段階において、技術力や戦術力などの個人の競技力を構成するそれぞれの要素ではなく、それらを全て含めたゲーム能力の養成を重視しながら、ゲームを中心とした練習の方法を提示していく必要があると考えられる。さらに、選手育成の初期段階においてどのような選手を養成すべきなのかを提示するとともに、その目標像を具現化できるような競技規則を、「推奨」ではなく「義務化」する必要があると考えられる。これらの取り組みを行うことによって、育成年代初期の選手育成活動において、成人の練習の内容や方法、試合での戦い方のコピーではなく、育成年代初期特有のコーチング活動に関する理念が日本全国に浸透すると考えられる。

2. 今後の課題

本論では、育成年代初期のドイツおよび日本における選手育成活動の歴史の変遷を明らかにし、次に、その現状について「個の育成」に着目してドイツ（1チーム）と日本（2チーム）におけるトップチームおよびそのチームの指導者を対象に事例的に調査した。今後は、ドイツを含むヨーロッパ諸国および日本における、育成年代初期のチームとその指導者を対象にハンドボールのコーチング活動に関する調査を続け、より研究を深めることに

よって、合理的な指導法を開発するために有用な知見が得られると考えられる。

注

- 注 1) 育成年代初期におけるバスケットボールでの全国大会は、トーナメント戦によって 1 つの優勝チームを決定する形式から、1998 年には 4 つの優勝チームを決定する形式へ、2018 年には参加チームがそれぞれ 3 試合行い順位を決めない形式へ変更された。
- 注 2) 「2×3 対 3」のゲームとは、2 つのチームが通常の選手数（6 人のコートプレーヤーと 1 人のゴールキーパー）でプレーするゲームである。通常のコートを半面に分け、それぞれのコートに、各チーム 3 人ずつのコートプレーヤーが入る。センターラインを超えてプレーすることは禁止されており、いずれのコートでもマンツーマン防御でプレーする（ノイハウス、2016、p.10）。すなわち、積極的な防御を用いたゲームである。
- 注 3) 「4+1」のゲームとは、2 つのチームが 4 人のコートプレーヤーと 1 人のゴールキーパーの計 5 人でプレーするゲームである（ノイハウス、2016、p.8）。
- 注 4) ミニハンドボールとは、今日（1986 年当時）、世界の多くの国で行われており、IHF は統一的競技規則を決めるのではなく、それぞれの国で独自の競技規則が作られるべきという立場をとっている（アーカード・スコガード、1995、p.22）。具体的には、コート、ボール、選手数、ボールに関して成人とは異なる競技規則が用いられている（アーカード・スコガード、1995、p.23）。
- 注 5) 筋力、持久力、コーディネーション能力、スピード力、可動性に関するトレーニング（Geisler、2013）。
- 注 6) Coordination：C 氏は Coordination には 2 つの意味があると捉えていた。ひとつは「アメリカが由来の、判断力を伴う多様な動きをさせること」。もうひとつは、「ドイツが由来の、ラダートレーニングなどの同じ動きを繰り返して言われた通りはやく動けるようにさせること」。

文献

- 阿部征大・富田幸博（2018）スポーツ少年団の指導者に関する一考察 -ボランティア指導者の職務遂行能力に着目して-. 日本体育大学紀要, 47(2) : 181-190.
- 會田宏（2006）球技の戦術. 最新スポーツ科学事典. 平凡社：東京, pp.178-179.
- 會田宏（2012）球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方. スポーツ運動学研究, 25 : 17-28.
- 會田宏（2015）球技における戦術の発達. 中村敏雄ほか編, 21世紀スポーツ大事典. 大修館書店：東京, p.487.
- 會田宏（2019a）球技における技術力とその構造. 日本コーチング学会編, 球技のコーチング学. 大修館書店：東京, p.75.
- 會田宏（2019b）競技力の構造. 日本コーチング学会編, 球技のコーチング学. 大修館書店：東京.
- 會田宏・船木浩斗（2011）ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究-大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに-. コーチング学研究, 24 : 107-118.
- 會田宏・坂井和明（2008）国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例研究. 武庫川女子大紀要, 56 : 69-76.
- アーカード・スコーガード：小西博喜監修（1995）ミニハンドボール. 機関誌『ハンドボール』5月号. 財団法人日本ハンドボール協会：東京.
- 安藤純光（1990）機関誌 300号の発刊に当たって. 機関誌『ハンドボール』8月号. 財団法人日本ハンドボール協会：東京, p.1.
- 朝岡正雄（2006）戦術・戦術力. 最新スポーツ科学事典. 平凡社：東京, p.207.
- 東根明人（1997）ドイツにおけるハンドボール競技に関するトレーニングとコーチング及びハンドボール事情について. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 1 : 98-105.
- Backer, J. and Côté, J. (2003) Sport-Specific practice and the development of expert Decision-Making in team ball sports. Journal of applied sport psychology, 15 : 12-25.
- ブロック：松村剛訳（2004）歴史のための弁明. 岩波書店：東京, p.22.
- Brand, H. (2012) Sichern Sie die Zukunft unserer Sportart!. handballtraining JUNIOR. Philippka Sportverlag, 1: p.3.

- Brand, H., Heuberger, M., Petersen, K., Lemmel, U., Kurrat, H., Pfänder, J., Sichelschmidt, P., Schubert, R., Langhoff, K. and Späte, D. (2009) Rahmentrainingskonzeption des deutschen Handballbundes für die Ausbildung und Förderung von Nachwuchsspielern. Philippka Sportverlag: Münster.
- Denne, F. (2001) Jugend-Wettkampfphilosophie im Kreis Heidelberg. handballtraining. Philippka Sportverlag, 11: pp.8-15.
- Deutscher Basketball Bund (2016) Spielempfehlungen für die Alterklassen U10 und jünger. Deutscher Basketball Bund, p.1.
- Deutscher Fussball Bund (online) Wettspiele mit E-Junioren: Begegnungen in kleinen Gruppen auf Kreiseebene. <https://www.dfb.de/trainer/e-juniorin/artikel/wettspiele-mit-e-junioren-begegnungen-in-kleinen-gruppen-auf-kreiseebene-261/> (accessed 2019-12-31).
- Deutscher Handballbund (2017) Strukturplan 2017-2024. Deutscher Handballbund.
- 土井秀和・村上成治・大場渉・奥田知靖 (2008) 一貫指導プログラム作成に向けたハンドボール戦術の分析に資する客観的評価指標の構築 -年代別の移動特性から表れるゲーム像-. 大阪教育大学紀要第IV部門, 57 (1) : 125-135.
- Eberl, C. and Baum, K. (2015) Evaluation konditioneller Leistungsfähigkeit im Vergleich von A-Jugend-Bundesliga- und DKB Handball-Bundesliga-Spielern. Genehmigte Dissertation zur Erlangung des akademischen Grades Doktor der Sportwissenschaften: Köln, p.13.
- 江成元伸 (1980) ハンドボールにおけるオフense展開に関する一考察. 日本体育学会大会号, 31 : 585.
- Ericsson, A. (1993) The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. Psychological review, 100: 363-406.
- Fédération Française de Handball (2019) Pratiquer le HAND à 4. https://res.cloudinary.com/ffhb-production/image/upload/v1562576609/ffhb-prod/assets/Hand_a_4_20_19_bis.pdf. (accessed 2019-12-31).
- Feldmann, K. (2013) Trainingsbausteine für E- und D-Jugendliche in der Mandeckung spielen lernen. handballtraining special. Philippka Sportverlag: Münster.
- フリック : 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳 (2011) 新版質的研究入門 (人間科

- 学) のための方法論. 春秋社: 東京, p.477.
- 藤本元 (2019) 発育発達段階を踏まえた標準的なゲームプランの作成. 日本コーチング学会編, 球技のコーチング学. 大修館書店: 東京, p.196.
- 船木浩斗・會田宏 (2014) ハンドボール競技のセットディフェンスにおける 1 対 1 のプレー方法に関する研究. 体育学研究, 59(1): 329-343.
- Geisler, S. (2013) Athletiktraining-So trainiert man heute. Body LIFE, 3, p.92.
- Goethe Institut (online) Goethe-Zertifikat B2. <https://www.goethe.de/de/spr/kup/prf/prf/gb2.html>, (accessed 2019-12-31).
- Gruic, I., Vuleta, D., Milanovic, D. and Ohnjec, K. (2005) Influence of performance parameters of back court attackers on final outcomes of matches of the 2003 world championships for women in Croatia. 4th International Scientific Conference on Kinesiology: 474-477.
- 花城清紀 (2012) ハンドボール競技におけるジュニア期のトレーニングとコーチングについて～スペインにおけるジュニア選手 (育成) のための練習ドリル～. 高松大学研究紀要, 56・57: 153-175.
- 樋口耕一 (2018) 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-. ナカニシヤ出版: 京都.
- 井上元輝・橋下真一・下拂翔・吉兼練・佐藤奏吉・仙波慎平・伊東裕希・加納明帆・福田丈・永野翔大・ネメシュ ローランド・山田永子・藤本元・會田宏・三輪一義 (2015) J クイックハンドボールの導入が小学生のゲームパフォーマンスに及ぼした影響: 量的分析を用いて. ハンドボールリサーチ, 4: 47-54.
- International Handball Federation (2004) Athens olympic games 2004 Official results books. International Handball Federation. https://archive.ihf.info/files/Uploads/Documents/8294_HB.pdf, (accessed 2019-12-31).
- International Handball Federation (online) Ranking table. <https://archive.ihf.info/en-us/thegame/rankingtable.aspx>, (accessed 2019-12-31).
- ヤンコフスキ: フットボールウィークリー編集部訳 (2016) 日本人に教えた戦術的ピリオダイゼーション入門. 東邦出版: 東京, p.3.
- 勝田隆 (2002) 知的コーチングのすすめ: 頂点をめざす競技者育成の鍵. 大修館書店: 東京, p.79.

- 加納恒男 (1961) 安保反対闘争記事の内容分析. 新聞研究, 119 : 16-20.
- 川端亮 (2003) 宗教の計量的分析 : 真如苑を事例として. 大阪大学大学院人間科学研究科
平成 14 年度博士論文, p.41.
- 川端亮・樋口耕一 (2003) インターネットに対する人々の意識-自由回答の分析から-. 大
阪大学大学院人間科学研究科紀要, 29 : 163-180.
- 川上整司 (2009) 創刊 500 号に思うこと. 機関誌『ハンドボール』5 月号. 財団法人日本
ハンドボール協会 : 東京, p.1.
- 河村レイ子・大西武三・水上一 (1981) 日本と西ドイツの小学生のハンドボールに関する
研究. 日本体育学会大会号, 32 : p.685.
- Korfmeier, F. (2006) Einheitliche Wettspiele für den Kinder- und Jugendhandball.
handballtraining. Philippka Sportverlag, 8: pp.20-27.
- 公益財団法人日本バスケットボール協会 (2018) なぜマンツーマンが必要か?. 公益財団
法人日本バスケットボール協会 : 東京.
- 公益財団法人日本ハンドボール協会 (2014) U12 ゲーム様式について. 公益財団法人日本
ハンドボール協会, 東京.
- 公益財団法人日本ハンドボール協会 (2015) 「平成 27 年度 J クイックハンドボール指導者
講習会」報告書. 公益財団法人日本ハンドボール協会.
- 公益財団法人日本ハンドボール協会 (2017) ハンドボール競技規則 2017 年度版. 公益財団
法人日本ハンドボール協会.
- 楠本繁生・田代智紀・會田宏 (2015) ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟
達化に関する事例研究 : 高校・大学において全国大会で 17 回優勝している監督の語り
を手がかりに. ハンドボールリサーチ, 4 : 11-19.
- Leonardo L. and Scaglia, A. (2018) Study on youth handball regulations: A documental
analysis on the mandatory use of individual defensive system in unter-12 and under-14
competitions. Journal of Physical Education, 29.
- Lewin, K. (1951) Field theory of social science. Harper & Brothers: New York.
- 毎日新聞 (2016) ブラジルのメダル量産計画 / 4 ハンドボール. 4 月 30 日朝刊.
- 町田洋介 (2018) 日本バスケットボール界における男子選手育成の課題に関する一考察-ス
ペインクラブチームの育成理念及びシステムの現地調査をもとにして-. 札幌大学総合研
究, 10 : 215-233.

- Malina, M. (2010) Early sport specialization: roots, effectiveness, risk. *Current Sports Medicine Reports*, 9: 364-371.
- Marczinka, Z. (1993) *Playing handball. A comprehensive study of the game.* International Handball Federation: Budapest.
- 松原英輝・入口豊・吉田雅行・吉田康成 (2009) フランスのサッカー選手育成の現状について-育成年代における一貫指導体制の現状と特徴-. *大阪教育大学紀要*, 57(2):241-258.
- 松木優也・會田宏 (2016) ハンドボールにおけるディフェンスおよび速攻の戦術指導に関する事例報告. *コーチング学研究*, 29(2) : 199-208.
- Meinel, K. and Schnabel, G. (2015) *Bewegungslehre- Sportmotorik. 12, Ergänzte Auflage.* Meyer & Meyer Verlag: Aachen.
- 水上一・大西武三・河村レイ子 (1997) 第12回世界女子ハンドボール選手権でのゲーム分析-世界における日本女子ハンドボールの現状と課題-. *筑波大学運動学研究*, 13 : 41-49.
- 文部省 (2000) *スポーツ振興基本計画.* 文部省.
- Müller, M., Stein, H. and Konzag, I. (1992) *Handball spielend trainieren.* Sportverlag.
- 中川昭 (2009) 記述的ゲームパフォーマンス分析によるラグビーのキックオフプレーの重要性と実践の有効性. 平成21年度筑波大学大学院博士論文.
- 中川昭 (2011) ラグビーにおける記述的ゲームパフォーマンス分析を用いた研究. *筑波大学体育科学系紀要*, 34 : 1-16.
- 中川昭 (2015) ゲーム分析の目的と意義. 中村敏雄ほか編, *21世紀スポーツ大事典.* 大修館書店 : 東京.
- 永井洋一 (2010) *賢いスポーツ少年を育てる.* 大修館書店 : 東京, p.28.
- 永野翔大・ネメシュ ローランド・藤本元・會田宏 (2017) ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムに関する比較研究. *コーチング学研究*, 30(2) : 109-123.
- 中矢礼美 (2019) エスノグラフィの特徴. 山内乾史編, *若手研究者必携 比較教育学の研究スキル.* 東信堂, p.37.
- 中山紗織・會田宏 (2019) 小学生年代のハンドボールにおける「個の育成」を目指したルールの下での選手育成活動について : 日本とドイツのトップチームを比較して. *体育学研究*, 64(1) : 285-301.
- Nederlands Handbal Verbond (2015) *Jeugdhandbal nieuwe stijl.* <http://www.white-demons.nl/images/Presentatie%20E-jeugd.pdf>. (accessed 2019-12-31).

- ネメシュ ローランド・會田宏 (2012) ハンガリーにおける一貫指導システム：7歳から12歳までの指導プログラムに着目して. *ハンドボールリサーチ*, 1 : 31-39.
- ノイハウス：中山紗織・會田宏訳 (2016) ドイツにおける子どものハンドボール実施規則-試合構造を統一させるための解説と情報-. 公益財団法人日本ハンドボール協会：東京.
- 新村出編 (2008) 広辞苑第六版, 岩波書店：東京, p.661.
- 西政治 (2008) 日本サッカーにおける育成期一貫指導の重要性と課題-世界に通用する選手育成-. *京都学園大学経営学部論集*, 18(1) : 173-196.
- 岡出美則 (2018) スポーツ庁平成 29 年度 体育・スポーツ資質向上等推進事業報告書. https://www.nittai.ac.jp/pe/report_29.pdf. (accessed 2019-12-31).
- 奥田知靖 (2018) バルシューレプログラムの概要. スポーツ庁平成 29 年度 体育・スポーツ資質向上等推進事業報告書. https://www.nittai.ac.jp/pe/report_29.pdf. (accessed 2019-12-31).
- 大江淳悟・上田毅・沖原謙・磨井祥夫 (2013) サッカーにおけるゲームパフォーマンスの客観的評価. *体育学研究*, 58 : 731-736.
- 大島寛・大島建・大島安奈 (2018) ジュニアスポーツにおける指導の現状と今度の課題 (その 1) -北海道地区の野球におけるジュニア期指導に着目して-. *近畿大学商経学会*, 64(3) : 617-665.
- 大西武三 (1997) ハンドボールのゲームにおける局面の構成について. *筑波大学体育科学系紀要*, 20 : 95-103.
- 大西武三 (1998) ハンドボールにおける世界トップレベルチームの戦術について-セットオフenseの戦術-. *筑波大学体育科学系紀要*, 21 : 63-75.
- Pabst, J. and Scherbaum, M. (2018) *Kinderhandball. Von der Minis bis zur D-Jugend – ein Laitfaden für Trainer*. Philippka-Sportverlag: Münster.
- ボル：坪井健太郎訳 (2017) *バルセロナフィジカルトレーニングメソッド*. カンゼン：東京, p.155.
- Pombo Menezes, R., Santos Sousa, M. and Carvalho Braga, J. (2011) The teaching-learning-training process of handball for U-12 category in non-formal education: Conceptions and methodologies. *Evista da Faculdade de Educação Física da UNICAMP*: 49-70.
- Praveen, R., Chandrasekaran, K. (2017) Notational analysis of playing ability on men

- handball teams. International journal of current research and modern education, 2: 171-173.
- Roth, K. and Kröger, C. (2015) Ballschule Ein ABC für Spielanfänger, 5. Auflage. Hofmann-Verlag: Schorndorf, p.9.
- ルソー：今野一雄訳（1978）エミール 上. 岩波書店：東京, pp.80-113.
- Schubert, R. and Späte, D. (2009) Kinder für Handball begeistern Praxiserprobtes Handwerkzeug für (Jung-) Trainer, Helfer und Betreuer. Philippka Sportverlag: Münster.
- シーデントップ：高橋健夫他訳（1988）体育の教授技術. 大修館書店：東京.
- シュテラー・コンツァック・デブラー：唐木國彦監訳（1993）ボールゲーム指導辞典. 大修館書店：東京.
- 式場隆三郎（1960）巻頭言. 機関誌『ハンドボール』5月号. 財団法人日本ハンドボール協会：東京, p.1.
- 須田芳正・岩崎陸・松山博明・福士徳文（2019）サッカーのユース選手育成についての研究：オランダサッカーの育成システムに関する一考察. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 58(1) : 1-8.
- 杉山茂（1960）編集後記に代えて. 機関誌『ハンドボール』12月号. 財団法人日本ハンドボール協会：東京, p.32.
- 鈴木宏哉・西嶋尚彦（2002）サッカーゲームにおける攻撃技能の因果構造. 体育学研究, 47 : 547-567.
- Späte, D. (1988) Editorial. handballtraining JUNIOR. Philippka Sportverlag, 4: p.2.
- Späte, D. and Wilke, G (1989) Antizipatives Abwehrspiel. Philippka Sportverlag: Münster, p.54.
- スポーツイベント（2017）J クイックハンドボール. スポーツイベント・ハンドボール, 11月号：東京, p.107.
- Svenska Handboll Förbundet (online) Tävlingsbestämmelser för barn och ungdom. http://www.svenskhandboll.se/imagevaultfiles/id_24391/cf_31/t-vlingsbest-mmelser_barn_och_ungdom_fastst-llda.pdf. (accessed 2019-12-31).
- 田代智紀・會田宏（2014）ハンドボール指導者の熟達化に関する事例研究：新たなチームを立ち上げた全国大会常連校に育てた若手指導者の語りを手がかりに. ハンドボールリ

- サーチ, 3 : 9-16.
- 田中将・檜塚正一・會田宏 (2009) シュートエリアから見た女子ハンドボール競技におけるオフENSEの特徴-世界選手権を対象として-. 武庫川女子大学紀要, 57 : 103-107.
- Thorpe, R., Bunker, D. and Almond, L. (1986) A change in focus for the teaching of games. In Pieron, M and Graham, G. (Eds.) Sport Pedagogy: The 1984 Olympic congress proceedings, vol.6. Human Kinetics Publishers: Oregon, pp.163-169.
- Trosse, H. D. (1988) Handball Training, Technik, Taktik. Rowohlt Taschenbuch Verlag: Hamburg.
- 土屋葉 (2005) ラポール. 桜井厚・小林多寿子編, ライフストーリー・インタビュー. せりか書房 : 東京, pp.83-84.
- Vaeyens, R., Güllich, A., Warr, R. and Philippaerts, R. (2009) Talent identification and promotion programmes of olympic athletes. J sports science, 27(4): 1376-1380.
- 和田拓, 藤本元, 山田永子, 會田宏 (2013) ハンドボール日本代表男子チームにおけるオフENSEの現状と課題 : 同一監督が指揮した 2008 年から 2012 年までの公式試合の分析から. ハンドボールリサーチ, 2 : 9-20.
- 山岡徹 (2006) 組織変革と組織変化-変革と変化をつなぐ「矛盾」の主導的役割について-. 横浜経営研究, 27(2) : 13-34.
- 山田亜沙妃・野川春夫・工藤康宏・早瀬健介 (2013) カヌースラローム競技のジュニア育成プログラムに関する国際比較研究. SSF スポーツ政策研究, 3(1) : 343-352.
- 山田永子 (2010) 女子ハンドボール競技における日本代表チームとヨーロッパ諸国代表チームのオフENSE様相の比較 : 特にシュート場面について. スポーツ方法学研究, 23(1) : 1-13.
- 山田永子 (2011) わが国の女子ハンドボール競技におけるシュートプレーの問題点とその改善に関する研究-ヨーロッパ強豪国との比較に基づいて-. 筑波大学大学院平成 22 年度博士論文.
- 財団法人日本ハンドボール協会 (2002) ハンドボール強化指導教本 NTS2002 ナショナル・トレーニング・システム. 財団法人日本ハンドボール協会 : 東京.
- 財団法人日本ハンドボール協会 (2009) ハンドボール強化指導教本 NTS2009 ナショナル・トレーニング・システム. 財団法人日本ハンドボール協会 : 東京.
- 財団法人日本サッカー協会 (2012) 8 人制サッカー競技規則. 財団法人日本サッカー協会 :

東京.

謝辞

本論文の執筆にあたり、筑波大学体育系教授 會田宏先生には、指導教員として本研究の実施の機会を与えていただき、ご指導をいただきました。心より感謝の意を表します。

また、筑波大学体育系教授 中山雅雄先生、同准教授 長谷川悦示先生には、アドバイザーコミッティーにおいて、論文の完成度を高める貴重なご助言をいただきました。日本体育大学スポーツ文化学部教授 岡出美則先生、筑波大学体育系助教 山田永子先生には、副査として予備審査会からご指導いただきました。筑波大学体育系准教授 藤本元先生には、ハンドボールコーチングに関して貴重なご助言をいただきました。元ドイツ・ライプツィヒ大学教授 Norbert Schlegel 先生には、ドイツにおける子どものハンドボールおよび本論文の構想に関して貴重なご助言をいただきました。お忙しい中、貴重なお時間を割いてご指導を賜りましたことに心より感謝の意を表します。

さらに、本研究を行うにあたって、ご協力をいただきましたチームおよび指導者の皆様には、調査用紙への回答、面接調査への対応に多大な時間と労力を費やしていただきました。心より感謝の意を表します。

本論文の作成に際しては、2017年度日本コーチング学会学生助成をいただきました。心より感謝の意を表します。

2020年3月 中山紗織